



193.6-Y32-37



1200500728717

193.6  
2

X  
複写



始



193.6-Y32-3ウ



193.6

i2

X

書聖の衆民

書音福傳コルマ

著平軍室山

1

Y

193.6  
Y32  
3

書聖の衆民

書音福傳コルマ

著平軍室山



山室武甫六 寄贈本

はしがき

『民衆の聖書』は新約聖書を一年三百六十餘日に割當て、毎朝十五分乃至二十分間を費して、其の日の日課を讀むと共に、そこから何か、心靈的、實行的の教訓數ヶ條を學び得るやう、其の目的を以て編述せられたものである。

スボルジョンは言ふた、『朝々の勤行は靈魂の錨である。それがあれば一日中滅多に神を離れて漂ひ去る如き恐がなからう。これは又心の香料である。能く終日馨しき敬虔の香を周圍に散ずることが出来る。私共は人生の眞劍味を解するほど、益々其の朝々を如何に用ゆるかに注意を拂ふやうになる。若夫れ朝々の勤行なしに、寢床から直ちに事務に赴く者の如きは、これ顔を洗はず、裸體のまゝにて外出する愚人か、さもなければ武器を携へずして戰場に臨む痴人に、類するものである』と。

それであるから私共は、朝目を覺したならば、先づ神の前に跪いて其の恩寵を祈ると共に、亦聖書を繕いて其の御意の在る所をたづぬべき必要がある。『汝の御言は我が

足の燈火、我が路の光なり。』(詩一一九。一〇五) 又『御言の滋味は、我が頸に甘きこと如何ばかりぞや、蜜の我が口に甘きにまされり』(詩一一九。一〇三)と。これは神の子供たる私共が、其の父の御旨を聖書に探ぐるの利益と、快樂とを語つて、餘蘊なきものに近い。

『民衆の聖書、マルコ傳福音書』は、前に『マルコ傳餘師』といふ名にて、一度世に公にしたものであるが、大震火災の爲に其の紙型を失ひ、之を改版するに當り、本文に若干の訂正を加へ、其の書名をも改めて、今一度江湖に送り出すことゝなつたのである。

基督敎界の耆宿三浦徹氏が、假名遣、送假名等の誤を正し、一々丁寧なる示教を垂れられたことを、こゝに感謝するのである。

大正十四年一月

山室軍平

## 民衆の聖書 マルコ傳福音書

### 目次

(一)	福音の始(マルコ傳福音書第一章一一二〇).....	一
(二)	會堂、家庭、街頭(同、第一章二一—四五).....	六
(三)	四隅の務(同、第二章).....	一二
(四)	十二使徒(同、第三章一一一九).....	一八
(五)	我が兄弟、我が姉妹(同、第三章二〇—三五).....	二四
(六)	心の島(同、第四章一一二〇).....	二九
(七)	一粒の芥種(同、第四章二一—四一).....	三五
(八)	一聯隊の惡鬼(同、第五章一一二〇).....	四〇

二

(九) 多くの醫者と耶蘇イエス(同、第五章二一—四二)……………四六

(一〇) 田舎大工てかだいく(同、第六章一一—二九)……………五二

(一一) パンの奇蹟きせき(同、第六章三〇—五六)……………五八

(一二) 形式家けいしきか(同、第七章一一—三三)……………六三

(一三) 祈禱きたうする母はは(同、第七章一四—三七)……………六八

(一四) 耶蘇イエスの奇蹟きせき(同、第八章一一—二二)……………七四

(一五) 人格じんかくの尊貴そんき(同、第八章二二—三八)……………七九

(一六) 祈禱きたうの山やま(同、第九章一一—二九)……………八四

(一七) 誰たれか大おほいならんたれ(同、第九章三〇—五〇)……………九〇

(一八) 尙なほ一つひとを缺かぐなほ(同、第十章一一—三一)……………九六

(一九) 凡すべての者ものの僕しもべ(同、第十章三二—五二)……………一〇二

(二〇) ホザナ、ホザナホザナ(同、第十一章一一—一八)……………一〇八

(二一) 信仰しんかうの祈禱きたう(同、第十一章一九—三五)……………一一四

(二二) 葡萄園ぶどうの主ぬし(同、第十二章一一—二七)……………一一九

(二三) 大なる誠命まこと(同、第十二章二八—四四)……………一二五

(二四) 産うみの苦難くるしみ(同、第十三章一一—三三)……………一三〇

(二五) 目めを覺さしをれめ(同、第十三章一四—三七)……………一三五

(二六) 最後の晩餐ばんさん(同、第十四章一一—二五)……………一四一

(二七) 御意みこころのまゝみこころにみこころ(同、第十四章二六—五二)……………一四七

(二八) 夜半やはんの鷄鳴けいめい(同、第十四章五三—七二)……………一五三

(二九) 耶蘇イエスの十字架じふじか(同、第十五章一一—二六)……………一五九

(三〇) 何ぞ我われを見棄みすて給たまひし何ぞ(同、第十五章二七—四七)……………一六五

(三一) 進軍令しんぐんれい(同、第十六章)……………一七〇

# 聖書各卷略號

## 舊約聖書の部

- |             |            |             |
|-------------|------------|-------------|
| 創世記(創)      | 出埃及記(出)    | レビ記(レビ)     |
| 民數記略(民)     | 申命記(申)     | ヨシユヤ記(ヨシ)   |
| 士師記(士)      | ルツ記(ルツ)    | サムエル前書(サム前) |
| サムエル後書(サム後) | 列王紀略上(列上)  | 列王紀略下(列下)   |
| 歴代志略上(歴上)   | 歴代志略下(歴下)  | エズラ書(エズ)    |
| ネヘミヤ記(ネヘ)   | エステル書(エス)  | ヨブ記(ヨブ)     |
| 詩篇(詩)       | 箴言(箴)      | 傳道之書(傳)     |
| 雅歌(雅)       | イザヤ書(イザ)   | エレミヤ記(エレ)   |
| 哀歌(哀)       | エゼキエル書(エゼ) | ダニエル書(ダニ)   |
| ホゼヤ書(ホゼ)    | ヨエル書(ヨエ)   | アモス書(アモ)    |

ヲバデヤ書(ラベ)  
ナホム書(ナホ)  
ハガイ書(ハガ)

ヨナ書(ヨナ)  
ハバコク書(ハバ)  
ゼカリヤ書(ゼカ)

ミカ書(ミカ)  
ゼバニヤ書(ゼバ)  
マラキ書(マラ)

新約聖書の部

マタイ傳福音書(マタ)  
ヨハネ傳福音書(ヨハ)  
コリント前書(コリ前)  
エペソ書(エペ)  
テサロニケ前書(テサ前)  
テモテ後書(テモ後)  
ヘブル書(ヘブ)  
ペテロ後書(ペテ後)  
ヨハネ第三書(ヨハ参)

マルコ傳福音書(マル)  
使徒行傳(使)  
コリント後書(コリ後)  
ビリピ書(ヒリ)  
テサロニケ後書(テサ後)  
テトス書(テト)  
ヤコブ書(ヤコ)  
ヨハネ第一書(ヨハ壹)  
ユダ書(ユダ)

ルカ傳福音書(ルカ)  
ロマ書(ロマ)  
ガラテヤ書(ガラ)  
コロサイ書(コロ)  
テモテ前書(テモ前)  
ピレモン書(ピレ)  
ペテロ前書(ペテ前)  
ヨハネ第二書(ヨハ貳)  
ヨハネ黙示録(黙)

マルコ傳福音書總論

(一)

昔に於ては、マルコ傳福音書のことを、『ペテロの追想録』又は『ペテロ傳福音書』など、呼ばれたことがある。之はマルコがペテロに隨ふて歩く間に、彼から聴取つた所を録したものであるから、著者はマルコであれど、内容はペテロから出て居るとの理由によつたものである。

マルコ傳福音書が、如何にペテロに負ふ所多きかに就いては、紀元一三〇年の頃、ピヤスの言に『マルコはペテロの通譯者として働く間に、其の聞いた所を、悉く記憶の中から書き録した。即ちペテロが聴者の所望に應じ、其の教訓の骨子として語つた所を、マルコが筆記したのである』と、いふてある。オリゲネスの言に、『これはペテロの指導の下に、マルコが編述したものである』とあり。テルトリヤヌスの言に又『マルコ傳福音書はペテロに據る』とあるのは、共に同じ事實を語つたものである。



然らばマルコ傳福音書の著者マルコは、如何なる人であつたかといふに、彼のユダヤ人としての本名はヨハネ（使二二・一二）といひ、其の従兄バルナバがレビ人であつた關係から推して、彼も多分同じ家筋に生れたものと見做されて居る。其の父のことは不明であれど、母の名はマリヤといひ、エルサレムに住んで居つた。紀元四年の頃ヘロデ（アケリツバ一世）がヤコブを殺し、更にペテロを捕へて獄に投じた時、マリヤの家には『數多の者集りて祈りゐたる』最中ペテロが不思議に出獄して、そこへ訪ねて來た故、一同驚喜したといふ物語がある。（使二二・一七）之によつて見ても、如何に彼女の家庭が、未だ自分達に屬する會館一つ有たない初代の基督者に取つて、祈禱の家、相談所、若しくは慰安休息の場所となつて居つたか、想像に難くない。

或は言ふ、耶穌が弟子達と晚餐を共にし給ふた『大なる二階座敷』（マル一四・一五）といふのは、同じ家のことにて。又其の準備の爲に遣された弟子達が、途中で出會ふた、『水を入れたる瓶を持つ人』（ルカ二二・一〇）とは、即ちマルコ其人であつたと。

或は言ふ、主の昇天後、弟子達が十日間、集つて祈禱會を續けた『高樓』（使一・一三）といふのも、亦此のマリヤの家であつたと。

若し此等の説が本當だとすれば、尙更彼女の家庭と、初代基督運動との間に、深い關係のあつたことが知られる。而してマルコ傳福音書の著者は、實に此うした家庭の兒であつた。

(111)

マルコ傳福音書に、耶穌がゲッセマネにて敵の手に捕はれ給ふ時、素肌に亞麻布をまとい、之に従ふた若者があり、人々が之を捕へると、彼は亞麻布を棄て、裸にて逃げ去つたとある。（マル一四・五一、五二）所が傳説によれば、此の若者とは即ちマルコのことであつたといふのである。

しかし乍ら彼の名が明白に聖書に記されてあるのは、紀元四六年の頃彼の従兄なるバルナバが同勞者パウロと共に、饑饉救済の用向にて上京し、其の歸途彼を伴ふてアンテオケに往いた時からの事である。（使二二・二五）

翌四七年、バルナバとパウロとが、第一回傳道旅行に上つた時、彼等はマルコを「助人」として連れゆいたが。一行がバボスを経てバムフリヤのベルガに到りたる時、マルコは勝手に彼等を離れてエルサレムに歸つた。(使一三。一三) 其のわけは、「何れ活動が厭になつたか、又は母の顔を見度なつたからであらう」と、いふ人もあれど。一説には又、「マルコは生拔のエルサレム兒にて、其の宗教思想が偏狭なるユダヤ式に出来て居つた故、パウロの大膽にして自由なる、異邦人傳道に對して疑懼の念を生じ、不安を感じるの餘、途中から逐轉したのであらう」とも、言はれて居る。何れにしても、餘り感心した行動でなかつた丈は、明白である。

それから三四年を経て、バルナバとパウロとが第二回傳道旅行に上らんとするに當り、二人の間に今一度マルコを伴ふべきか、否かに就いて意見の衝突を生じた。察するにバルナバは彼と従兄弟同志の關係もあり、旁々彼の才を惜み、何とか世話して將來有用の器に仕立てやりたいと、専ら彼の爲を思ふて之を同伴せんことを熱望し。パウロは又異邦人傳道事業草創の際、悪くすると復遁げ出すかも知れぬやうな、頼にならぬ

人物を伴ふて、神の御榮を穢すやうなことがあつてはならぬと、専心神の御事業を憂ふる上から、彼を連れゆくことに反對し。どうしても双方の議論が一致せぬ結果、到頭兩人別箇の運動をすることとなり、バルナバはマルコを連れて、彼の郷里クプロ島に赴き、パウロはシラスを伴ふて、小亞細亞の各地に轉戦したる後、進んで歐羅巴にまでも、福音を宣傳するに至つたのである。

もつともこれより少し前、エルサレムにて基督教對異邦人問題に關する會議があり、(使一五。六) それらの態度方針も確定したることとて、假令マルコが或人の説の如く、當初異邦人傳道に對する偏狭な思想を有つて居つたとしても、此の頃は早や全く解けて、相當の理解を得て居つたものと見ねばならぬ。

(四)

マルコは其の以來何年くらゐ、バルナバと一緒にクプロ島で働いて居つたか詳でない。けれども其の間、彼が精神上にも、事業上にも、共に大なる進境があり。殊に其の品性の上に於ては、著しき向上進歩を遂げたものと、見るべきの理由がある。

斯するうち、彼はペテロからの招を受け、無論バルナバも大賛成にて、乃ち其の許に赴き、暫くの間その秘書役、若しくは通譯者といふ格にて、共に各地に救の御軍を戦ふことゝなつた。彼は久しい以前、ペテロがエルサレムにて、しばしば其の母の家をおとづれた頃から彼を知り、之を敬愛して居つたのである。ペテロが後に彼のことを『我が子マルコ』（ペテ前五。一三）といふたのを見れば、或は彼は少年時代に、ペテロの指導に由つて、信仰に入つたのであらうと、いはれて居る。それが多年の後、一つの處に住んで、共に神への奉仕を勵むこととなり、日々其の教訓を受け、其の人物に接し、殊に老使徒から、主耶蘇御在世當時の物語を細々と聞かされては、彼が今更のやうに、大に啓發せらるゝ所あつたのも、一向不思議はない。

或は言ふ、ペテロとマルコとの間には、其の性格の上から見ても餘程相似た所があり。從來どちらかといへば、お互に輕卒で、動搖し易い氣質の爲に、飛んだ不覺をとつた如き經驗もあり。所謂同病相憐んで、ペテロは自分の若い時の事を思ひ出してマルコを庇護し、マルコは又老て後には、ペテロの如く圓熟した聖徒になりたいものと、心

から彼を敬慕し、爲に兩人の間に、尋常ならぬ情誼が結ばれて居つたのであると。成程さういふこともあつたか、知れない。

## (五)

紀元六一、若しくは六二年の頃、パウロがロマにて第一回入獄の際、入獄とはいへ、實は一家屋を賃し、番兵を附せられて、そこに起臥しつゝ、盛んに福音を宣傳して居たのであるが。マルコは彼の斯る不自由な境涯に在るのを聞いて、いたはしさに堪へず。遙々ロマ迄訪ねて往つて、暫くの間共に滞在し、極力之をいたはり、輔けたものと見える。何れ其の間には、久しい以前の失策を詫び、其の舊恩を謝すると共に、またそれ以來、如何に神が彼を教へ、導き、助け給ふたかといふ様な、打ちとけ話も出たであらう。而してパウロも之には非常の満足を覚え、凡ての榮を神に歸し、且彼の前途を心から祝福したものと見える。乃ち其の頃パウロがピレモンに寄せた書翰の中に、マルコの事を『我が同勞者』（ピレ二四）と呼び。コロサイ人に贈る書中には、『彼若し汝等に到らば之を受けよ』（コロ四。一〇）といふて、慇懃に之を推薦して居るのは、其の

爲である。更に一二年を経て、パウロがロマに於ける第二回の入獄中、其のテモテに與へたる書翰に『汝マルコを連れて共に來れ、彼の職は我に益すればなり』(テモ後四。一一)といふてあり。如何に獄裡の老聖徒が、其の晩年に及んで、厚き信任と尊敬とをマルコに置いて居つたか、推察せらるゝではないか。パウロも、ペテロも、共に殉教の最後を遂げたる後、マルコは埃及に往いてアレキサンドリヤに入り。そこに教會及び學校を起し、多年成功ある奉仕をなしたる後、亦血を流して主を證する者の數に入つたと、傳へられて居る。

(六)

マルコ傳福音書の特徴は、其の専ら耶穌の行動を録したところにある。マイヤーはペテロがコルネリオにむかひ、『これは神が聖靈と能力とを以て注ぎ給ひしナザレの耶穌の事にして、彼は徧くめぐりて、善き事を行ひ、凡て惡魔に制せらるゝ者を醫せり、神之と偕に在したればなり』といふた一句を引いて『これはマルコ傳福音書のプログラムである』といふた。如何にも其の如く、マルコは専ら耶穌が『徧くめぐりて善き

事を行ひ』給ふた顛末を録し、其の教訓や、譬喩談の如きは、大方之を省略した。それ故マタイは耶穌の譬喩談十四を載せたるに對し、マルコは唯四つしか之を掲げて居ない。山の上の説教はマタイとルカとは精しく出て居れど、マルコは全く之を記して居ない。使徒を任命せられた始末は、マタイに於ては其の第十章の全部を占めて居れど、マルコに於ては唯四五節を占むるのみにて。(六。七一―二) 耶穌が學者とパリサイ人とを叱責し給ふた記事は、マタイに於ては第二十三章の全部に亘れど、マルコは之を唯三四節の間に約して居る。(二。三七一―四〇) ヨハネ傳福音書に至つては、其の大部分が耶穌の教訓を集めたものであるから、尙更マルコ傳福音書との相違が、著しいことを覺える。斯してマルコ傳福音書は他の三福音書に比して、殊に耶穌の行動を載せたる點に、其の特色を有するものと謂はねばならぬ、それさへマルコ傳福音書は、殊に活動の人としての耶穌の行動を記録したものの如く見える。一例を擧ぐれば、ルカ傳福音書の方は、あれだけ長篇であるにも拘らず、其の中に『直ちに』といふ語が八回しか用ゐてない。けれどもマルコの方には四十一回迄

も用ゐてあり、耶蘇が如何に息つく暇もなく、次から次へと活動を續け給ふたかといふことを録して居る。即ち『食事する暇もなかりき』(マルコ三。二〇)といふ一句は、此の福音書中の耶蘇を、最も代表的に語つた言であると言ふて可からう。

更に一つの注意すべき點は、マルコ福音書の記事が、他の三福音書と比べて、往々微に入り細を穿つて居ることである。或は崖を駆け下り、海に溺れた豚の數が『二千匹』(五。一三)であつたといひ。ペテロが耶蘇を否んだ夜、鶏は『二度』(一四。七二)鳴いたといひ。五つのパンと二つの魚とにて五千人を養ひ給ふた時、人々は『青草の上』(六。三九)に坐したといふ如きは、其の實例である。而して此等は皆ペテロが其の目撃した所を傳へた爲に、斯は精細に事實の真相を傳へ得たのであらうと、言はれて居る。

## (七)

『マタイ福音書はユダヤ人の爲に、ルカ福音書はギリシヤ人の爲に、而してマルコ福音書はローマ人の爲に、著されたものである』(随つてマルコはマタイのやうに、何ぞといへば舊約聖書を引くことをしない。マタイには『律法』といふ字が八回、ルカ

には九回、ヨハネには十五回出て居れど、マルコには唯の一度も之を用ゐてない。反つてそこにユダヤ人の風俗(七。三、四)言語(七。一二)を説明したやうな所があり。後に其の家族がローマに移り住んだと覺しき、(ローマ一六。一三)『アレキサンデルとルフとの父シモンといふクレネ人』(二五。二)の事を、其の親子の關係に迄立入りて記述したる如き。抑々又彼自らのローマ風の名前『マルコ』といふのからして、何れも皆此の書

が特にローマ人の爲に著されたことを、暗示せざるはない。之を著作した場所がローマであつたことは、古來一般に認められた所であれど。其の年月に就いては、或はペテロの殉教(紀元六四年か、或は六七年)前だともいひ、或は後だともいふて、一定し難い。即ちアイレネウス(紀元一七七年)の言に、『ペテロ、パウロの死後、ペテロの弟子、又通譯者たりしマルコは、ペテロの説教の資料を筆にして、私共に頒布した』とあり。さうかと思ふと、アレキサンドリヤのクレメンスは又『ペテロが御言をローマに宣傳したる頃、多數の聽衆は、マルコが久しく彼に隨行する故を以て、其の彼から聞いて記憶する所を手記せんことを勧めたるにより、マルコは乃ち福音書を著

して、之を其の人々に配りたるに、ペテロはそれを聞いて別に妨害もせず、又獎勵も  
しなかつた」といふて居る。そんなわけで、此の福音書の出来た日取は判然しない。  
多分早くて紀元六〇年頃、おそくて六六年から七〇年の間だらうと信ぜられて居る。

(八)

此の書の内容は雑と次の如し。

- (一) 耶蘇が公生涯に入り給ふ準備 (一〇・一一三)
- (二) ガリラヤ及びカペナウム傳道 一・一四―九・五〇
- (三) 最後のエルサレム行 (一〇・一一五―一一)
- (四) 受難週、十字架、復活 (一一・一一―一六・二〇)

民衆のマルコ傳福音書

山室軍平著

(一) 福音の始

【マルコ傳福音書第一章一一―二〇】

一 神の子イエス・キリストの福音の始。  
二 豫言者イザヤの書に、「視よ、我なんちの顔の前に、  
わが使を遣す、彼なんちの道を設くべし、三 荒野に  
呼はる者の聲す「主の道を備へ、その路すぢを直く  
せよ」と諭されたる如く、四 バプテスマのヨハネ出  
で、荒野に、罪の赦を得さすの悔改のバプテスマ  
を宣傳ふ。五 エダヤ全國またエルサレムの人々、み  
な其の許に出て來りて罪を言ひあらはし、ヨルダン  
川にてバプテスマを受けたり。六 ヨハネは駱駝の毛

織を着、腰に皮の帶し、蝗と野蜜とを食へり。七 か  
れ宣傳へて言ふ「我よりも力ある者、わが後に來る。  
我は屈みて、その鞋の紐をこくにも足らず、八 我は  
水にて汝らにバプテスマを施せり。されど彼は聖靈  
にてバプテスマを施さん」  
九 その頃イエス、ガリラヤのナザレより來り、ヨル  
ダンにてヨハネよりバプテスマを受け給ふ。十 斯て  
水より上るをりしも、天さけゆき、御靈、鶴のごと  
く已に降るを見給ふ。十一 かつ天より聲出づ「なん

ぢは我が愛しむ子なり、我なんちを悦ぶ』

十二 斯て御靈たちにてイエスを荒野に逐ひやる。十三 荒野にて四十日の間サタンに試みられ、獸もともに居給ふ、御使たち之に事へぬ。

十四 ヨハネの内はし後、イエス、ガリラヤに到り、神の福音を宣傳へて言ひ給ふ、十五 時は満てり、神の國は近づけり、汝ら悔改めて福音を信ぜよ』

十六 イエス、ガリラヤの海にそひて歩みゆき、シモ

二  
ンと其の兄弟アンデレが、海に網投ちなるを見給ふ。かれらは漁人なり。十七 イエス言ひ給ふ、『われに従ひきたれ、汝等をして人を漁る者とならしめん』十八 彼ら直ちに網をすて、從へり、十九 少し進みゆきて、ゼベダイの子ヤコブとその兄弟ヨハネとを見給ふ、彼らも舟にありて網を繕ひたり。二十 直ちに呼び給へば、父ゼベダイを雇人とともに舟に遺して從ひゆけり。

◎神の子耶蘇基督の福音の發端は、バプテスマのヨハネが先づ出でて、荒野に悔改のバプテスマを宣傳へ、程なく世に現れ給ふべき耶蘇に就きて、前觸をなしたることであつた。彼はイザヤ書に『視よ、我汝の顔の前に我が使を遣す、彼汝の道を設くべし。荒野に呼はる聲す、主の道を備へ、其の道すぢを直くせよ。』(イザ四〇。三、四)とある預言の應驗として、出で來りたる人物であつた。此のヨハネは身に駱駝の毛織を着、腰に皮の帯をしめ、蝗と野蜜とを食ひ、飽迄も質朴粗野なる自然兒として、正面から世の輕薄、虚偽、不徳、不信を詰責したのである。其の舌端火を吐く如き言語は、敬

虔、義烈なる彼の人格と相待つて、能く一世の人心を聳動するに足るものがあつた。

『彼の公生涯は地震の如く、世の中を震蕩した。彼の全人格は説教であつた。彼が自ら我は聲であると名乗つたのは、如何にも尤ものことであつた。』(一六)

◎ヨハネは罪の悔改を宣傳した。悔改の大切な事に就いては、昔の人も『汝若し善人たらんと欲せば、先づ自らの惡人たることを信ずべし。』(エヒクテタス)『其の罪を悲しむ者は、殆んど罪なき者に近し。』(セネカ)『過つては即ち改むるに憚る勿れ。』(孔子)

などといふて居る。それと同時に、ヨハネは凡て罪を悔改めたる者が、進んで耶蘇を信仰し、彼より聖靈のバプテスマを受くべき必要を高調した。即ち彼は言ふたのである、『我よりも力ある者我が後に來る、我は屈みて其の鞋の紐をとくにも足らず。我は水にて汝等にバプテスマを施せり、されど彼は聖靈にてバプテスマを施さん』と。彼はどこに迄も、耶蘇の先驅者を以て任じて居つたのである。(七、八)

◎耶蘇はガリラヤのナザレより出で來り、ヨルダン川にてヨハネよりバプテスマを受け、やがて水より上り給へる時、聖靈鴿の如く其の上に降り。且天より聲ありて、

『汝は我が愛しむ子なり、我汝を悦ぶ』といふのが聞えた。申す迄もなく、これは天の父の耶蘇に對する御言であつたに相違ない。即ちここに天より御聲を出し給ふた父と、水より上れる御子と、鴿の如く降り給ふた聖靈と、三つにして一つなる神の顯現を拜んだわけである。即ち聖書の他の部分に、『主耶蘇基督の恩恵、神の愛、聖靈の交感』(コリ後一三。一三)などと録された、同じ貴き奧義を、事實の上に示されたものと見ることが出来る。(九一一二)

◎耶蘇は四十日間、荒野にて惡魔に試みられ、獸と共に居給ふと、そこへ天の使達が來て之に事へたとある。其の如く今日の私共も亦、此の人生の荒野に於て、始終天の使と野獸との間に身を置きつつ、惡魔からの試練を受けて居るものである。即ちコレリツヂが『人には多量の獸性と若干の惡魔の質とあり。同時に或程度まで亦神及び天の使の質が備つて居る』といふたとほり。私共は上つて天の使に似た者となるか、又は下つて野獸の仲間に墮するかといふ、中間に引懸つて、斷えざる試練を経つつある者である。しかし乍ら耶蘇は『自ら試みられて苦み給ひたれば、試みらるる者を助け

得る』御方である。(ヘブ二。一八) 私共は唯彼に依頼むことによりてのみ、能く一切の惡魔の試練に打勝つことが出来る。(二二、一三)

◎耶蘇は神の國の福音を宣傳へて、『時は満てり、神の國は近づけり、汝等悔改めて福音を信ぜよ』と仰せられた。『神の國は近づけり』とは、神の御支配が人の心に行はれ、追々世界に布き及ぼさるべき時代が、近づいたとの意味である。それにつけても、彼は人々が悔改めて、福音を信仰せねばならぬことを教へ給ふた。『此の悔改と信仰とは、ノアの方舟以來の舊い題目にて、しかも永遠まで變ることなき、神の恵に入るの條件である。』(ライル博士) 或人の祈禱に、『神よ、私を悔改に於ては地獄のどん底までも下らせ、信仰に於ては天の高きにまでも上らせ給へ』といふてある。其の如く私共は、飽迄身を低うして罪を悔改め、而してどこ迄も高き神の恩寵に進まんことを、心がけねばならぬ。(一四、一五)

◎耶蘇はガリラヤの湖上にて、網うつて居るシモン(一名、ペテロ)と、其の兄弟アンデレとに對ひ、『我に従ひ來れ、汝等を人を漁る者とならしめん』と仰せられると、彼等



六  
は直ちに網を棄て、従ふた。少し進みゆきて、今度は舟にて網を繕へるヤコブと、其の兄弟ヨハネとを呼び給ふと、彼等も亦其の父を雇人と共に舟にのこし、起ちて彼に従ふた。彼等は『無學の凡人』(使四。一三)であつたが、しかも潔く一切を擲つて耶蘇に従ひ、爾來唯御意のままになり、又御意のままを爲すの生活に入つた故、終にあればど大に神に用ゐらるるに至つたのである。『エホバは全世界を徧く見そはなし、己に對ひて心を全うする者の爲に力を顯し給ふ』(歴下一六。九)とあるのは、此うした場合に當倣まる御言ではないか。(二六一二〇)

## (二) 會堂、家庭、街頭

### 【マルコ傳福音書第二章二一—四五】

二一 斯て彼らカペナウムに到る、イエス直ちに安息日に會堂にいりて教へ給ふ。三二人々その教に驚きあへり。それは學者の如くならず、權威ある者の

ごとき教へ給ふゆゑなり。二三 時にその會堂に、穢れし靈に憑かれたる人あり、叫びて言ふ。二四 『ナザレのイエスよ、我らは汝と何の關係あらんや、汝

われを亡きんとて、來給ふ。われは汝の誰なるを知るか。神の聖者なり』 二五 イエス禁めて言ひ給ふ『黙せ、その人を出てよ』 二六 穢れし靈、その人を痲痺せさせ大聲をあげて出づ。二七 人々みな驚き相問ひて言ふ『これ何事ぞ、權威ある新しき教なるかな、穢れし靈すら命ずれば従ふ』 二八 爰にイエスの噂あまれくガリラヤの四方に弘りたり。

二九 會堂をいで、直ちにヤコブとヨハネとを伴ひて、シモン及びアンデレの家に入り給ふ。三十 シモンの外姑、熱をやみて臥しむれば、人々たゞちに之をイエスに告ぐ。三一 イエス往きて、その手をとり、起し給へば、熱さりて女かれらに事ふ。

三二 夕まなり、日いりてのち人々すべての病ある者悪鬼に憑かれたる者をイエスに連れ來り、三三 全町こぞりて門に集る。三四 イエスさまさまの病を患ふ多くの人をいやし、多くの悪鬼を逐ひいだし、之に物言ふことを免し給はず、悪鬼イエスを知るに因り

てなり。

三五 朝まだき暗き程に、イエス起き出でて、寂しき處にゆき、其處にて祈りたまふ。三六 シモン及び之と偕にをる者ども、その跡を慕ひゆき、三五 イエスに遇ひて言ふ『人みな汝を尋ね』 『ハイエス言ひ給ふ』 『いざ最寄の村々に往かん、われ彼處にも教を宣ぶべし、我はこの爲に出で來りしなり』 三九 遂にゆきて、徧くガリラヤの會堂にて教を宣べ、かつ惡鬼を逐ひ出し給へり。

四〇 一人の癩病人、みもとに來り、跪つき請ひて言ふ『御意ならば我を潔くなし給ふを得ん』 四一 イエス憐みて、手をのべ彼につけて『わが意なり、潔くなれ』と言ひ給へば、四二 直ちに癩病さりて、その人きよまれり。四三 頓て彼を去らしめんとて、嚴しく戒めて言ひ給ふ、四四 『慎みて誰にも語るな、唯ゆきて己の祭司に見せ、モーセが命じたる物を汝の潔のために獻げて、人々に證せよ』 四五 され

ど彼いでて此の事を大に述べたへ、徧く弘め始め  
たれば、この後イエスあらはに町に入りがたく、外

の寂しき處に留りたまふ。人々、四方より御許に  
來れり。

八

◎耶蘇はカペナウムにて、安息日に會堂に入りて教へ給ふた。これは其の當時のユダヤ人が、集つて神を禮拜する爲の場所であつた。人々は彼が一般學者の、火もなく熱もなく、冷々淡々として他人の説を請賣するのと異ひ、權威ある者の如く教へ給ふのに驚いた。言ふ迄もなく、彼は神から遣された『一人の師』(マタ二三。八)として其の『知る事に語り、又見しことを證し』(ヨハ三。一二)給ふ故、其の御言に權威があつたのである。彼が後に、『我は己によりて語れるにあらず、我を遣し給ひし父自ら我が言ふべきこと、語るべきことを命じ給ひし故なり。我其の命令の永遠の生命たるを知る。されば我は語るに、我が父の我に言ひ給ひし儘を語るなり。』(ヨハ一。二。四九、五〇)と仰せられたのは、其の間の消息を語るものではないか。(二二、二二)

◎『穢れし靈』は逸早く耶蘇を認め、『我は汝の誰なるかを知る、神の聖者なり』といふた。惡魔は有神論者であるのみならず、亦正統派の信仰箇條をさへ懷抱する者である。

しかも其の惡魔たることを免れないわけは、彼等に其の信仰と伴ふ處の實生活がないからである。それ故使徒ヤコブの言に、『汝神は唯一なりと信するが、斯く信するは善し、惡鬼も亦信じて慄けり。嗚呼虚しき人よ、汝行爲なき信仰の徒爾なるを知らんと欲するか』(ヤコニ。一九、二〇)とあり。ライル博士は又『基督を救主なりと言ふと、基督を我が救主、我が主なりと言ふとは、全く別物である。前者は惡魔も之を言ひ得れど、後者は唯眞の基督者のみ言ひ得るのである』と、説いた。それにつけても肝要なるは、宗教を實生活に受け入るることである。(二二二―二二八)

◎耶蘇は會堂から直ちに、シモン及びアンデレの家庭に往き給ふた。彼の宗教は唯會堂にのみ封じ込まるべきでなく、宜しく各自の家庭に持込まるべきものだからである。パークハーストの言に、『家庭は天國を説明する。家庭は初學の人に取立ての天國である』又ヘーヤの言に、『アダムに取りては、樂園は即ち家庭であつた。しかし乍ら彼の善良なる子孫に取りては、家庭は即ち樂園である』といふてある。シモンの姑は其の熱病を醫さると、直ちに起つて彼等に奉仕した。耶蘇がどれ位の程度に彼女を

九

快癒なさせ給ふたか、想像せられるではないか。古語に『人を殺さば血を見るべし、人を救はゞ終を見るべし』とあり。耶蘇は人を救ふのみならず、彼等が其の以來、他人に奉仕し得る程度にまで之を救ひ、且之を守り給ふのである。眞に忝けないことではないか。(二九一—三二)

◎彼は家庭から進んで街頭に出で給ふた。而して『各様の病を患ふ多くの人々を醫し、多くの悪鬼を逐ひ出し』給ふたとある。此の如く耶蘇の宗教は、必ず之を街頭に持出して、大多数民衆の間に、其の祝福を分たねばならぬ。ブリス大將(ウィリアム)の言に、『人間社會の狀態が斯くあらん限り、私共が野外に福音を宣傳することは、絶對の必要である。私共は會館に待つて居つては出あへぬ人々を街頭に要し、之に警告を與へて、之を教主に導き來らねばならぬ。由來救世軍の最も大なる勝利は、街頭に得られたのである』といふてある。參考に資すべきことと思ふ。(三二—三四)

◎とはいへ、此の如き不斷の大活動の裏には、必ずや靜に神の前に跪いて、其の恵と力とを求むる、隠れた半面がなくてはならぬ。『朝まだき暗き程に、耶蘇起き出でて寂しき所に往き、其處にて祈りの給ふ』とあるのは、其れである。アシ、のフランシスは早朝小鳥の啼聲を聞いては、其の弟子に言ふて居つた。『我等の小さき兄弟等は、あんな風に早や起き出でて其の造主を讚美し、新に好き日を與へられたことを感謝して居るに、我等は彼等に後をとる様ではならぬ』と。歌に、『起きいでて祈するこそつとむべき、ひと日のわざのはじめなりけれ。』(奥野昌綱) かくて後、耶蘇は最寄の村々に道を傳へ給ふた。彼の言と行とに能力があつたわけは、彼が斷えず神の前に、祈禱を勤められた爲だといふても、差支なからう。(三五—三九)

◎スウィンバルンといふ人の詩に、嘗て一人の貴婦人があり、美貌と高貴なる身分とのために、あらゆる王公貴人から諂諛と笑顔とを以て迎へられて居つたが。一朝彼女が癩病に罹つたことが評判になると、忽ち誰も見かへる者がなくなつた。果ては親類縁者さへ之を見限る様になり、彼女は路頭に彷徨ふ身の上となつた。其の時一人の貧しき書記にて、多年人知れず彼女を慕ひつつ、一度も彼女と語をかはしたことさへない者が現れ、病み衰へた彼女を引取つて介抱し、其のため自分も世から棄てらるるこ

とを厭はず、最後までその世話をしたといふのがある。今耶穌が世から見離された癩病人を顧み、之に貴き御手を觸れて醫しておやりなされた御慈愛は、亦何となく前の物語を思出さしむるものがある。げに耶穌は凡て世の頼邊なき人々の、最も信頼すべき友にて在したまふ。(四〇—四五)

### (三) 四隅の務

#### 【マルコ傳福音書第二章】

一 數日の後、またカペナウムに入り給ひしに、その家に在すことを聞きて、多くの人あつまり來り、門口すら隙間なき程なり。イエス彼らに御言を語り給ふ。三ここに四人に擔はれたる中風の者を人々つれ來る。四 群衆によりて御許にゆくこと能はざれば、在す所の屋根を穿ちあけて、中風の者を床のまま吊り下せり。五 イエス彼らの信仰を見て、中風

の者に言ひたまふ「子よ、汝の罪ゆるされたり」六ある學者たち其處に坐しるたるが、心の中に、七「この人なんぞ斯く言ふか、これは神を瀆すなり、神ひさりの外は誰か罪を赦すことを得べき」を論ぜしかば、八 イエス直ちに彼等がかく論するを心に悟りて言ひ給ふ「なにゆゑ斯ることを心に論するか、九 中風の者に「なんぢの罪ゆるされたり」と言ふと「起き

よ、床をとりて歩め」と言ふと、孰か易き。十 人の子の地にて罪を赦す權威ある事を、汝らに知らせんため」——中風の者に言ひ給ふ——十一「なんぢに告ぐ、起きよ、床をとりて家に歸れ」十二「彼おきて直ちに床をとりあげ、人々の眼前いで往けば、皆おどろき、かつ神を崇めて言ふ「われら斯の如きこととは斷えて見ざりき」十三 イエスマた海邊に出でゆき給ひしに、群衆ももとに集ひ來りたれば、之を教へ給へり。十四 斯て過ぎ往くとき、アルパヨの子レビの、收税所に坐したるを見て「われに從へ」と言ひ給へば、立ちて從へり。十五 而して其の家に於て食事の席につき居給ふとき、多くの取税人・罪人ら、イエス及び弟子たちと共に席に列る、これらの者おほく居て、イエスに從へるなり。十六 パリサイ人の學者ら、イエスの罪人・取税人とともに食し給ふを見て、その弟子たちに言ふ「なにゆゑ取税人・罪人とともに食

するか」十七 イエス聞きて言ひ給ふ「健かなる者は、醫者の要せず、ただ病ある者、これを要す。我は正しき者を招かんとあらで、罪人を招かんとて來り」十八 ヨハネの弟子とパリサイ人は、斷食しむたり。人々イエスに來りて言ふ「なにゆゑヨハネの弟子とパリサイ人の弟子とは斷食して、汝の弟子は斷食せぬか」十九 イエス言ひ給ふ「新郎の友だち、新郎と偕に在るうちは斷食し得べきか、新郎と偕に在る間は、斷食するを得ず。二十 然れど新郎をさらるる日きたらん、その日には斷食せん。二一 誰も新しき布の裂を舊き衣に縫ひつくることは爲じ。もし然せば、その補ひたる新しきものは、舊き物をやぶり、破綻さらに甚だしからん。二二 誰も新しき葡萄酒を、ふるき革囊に入ること爲じ。もし然せば、葡萄酒は囊をばりききて、葡萄酒も囊も廢らん。新しき葡萄酒は、新しき革囊に入ることなり」

二三 イニス安息日に麥島をとほり給ひしに、弟子たち歩みつつ穂を摘み始めたれば、二四 パリサイ人、イエスに言ふ『視よ、彼らは何ゆゑ安息日に爲まじき事をするか』二五 答へ給ふ『ダビデその伴へる人々と共に乏しくして飢ゑしとき爲しし事を未だ讀まぬか。二六 即ち大祭司アビアタルの時ダビデ

神の家に入りて、祭司のほかは食ふまじき供のパンを取りて食ひ、おのれさ僧なる者にも與へたり』二七 また言ひたまふ『安息日は人のために設けられて、人は安息日のために設けられず。二八 然らば人の子は安息日にも主たるなり』

◎一人の中風患者を四人にて耶蘇の御許に伴ふたが、群衆に隔てられて、寄りつくことが出来ないのを見て、屋根に穴をあけ、そこから下に釣り下した。此の如く『意志のある處には方法がある。』私共は尋常の手段で及ばぬ時には、非常の方法を案じ出し、兎も角も人を耶蘇の御許に連れ來らねばならぬ。ブシネルは此の物語にもとづいて、『四隅の務』といふことを説いた。つまり中風患者の寢具の四隅を提げた者共が、銘々其の責任を全うした結果、病人が救はれたる如く。私共は皆銘々、己が役割を忠實に務めねばならぬといふ意味である。救世軍々歌に『救を得たるわれらは誰も、人を救ふのつとめあるなり。たゞ努力せよ、耶蘇は先だち、われらを導く。』とは其の事ではないか。(一一四)

◎中風患者は、其の病を醫されん爲に連れ來られたのであるが、耶蘇は彼の病を醫すのみならず、それよりも先に、彼の罪を赦して、其の靈魂を救ひ入らせ給ふた。彼は病氣が因縁となつて、靈魂の救を得たるものである。アシ、のフランシスは青年時代に酒をのみ、賭事をなし、濫費をして、末に見込のない若者のごとく見えたが。それが軍隊に身を投じ、出征する途中で熱病にかかり、後送せられて郷里に療養中、忽ち其の靈魂の眼が開け、神と永遠とを見得るやうになり、後終にあれ程の聖徒となつた。此の如く神は屢々病氣や、貧乏や、災難や、又は生別、死別等を利用し、それらを手がかりに、靈魂を救に導き給ふことがある。『エホバ言ひ給ひけるは、我實に汝に益を得せしめん爲に汝を惱ます。』(エレ一五、一一) 又『彼等は艱難によりて、我を尋ね求むることをせん。』(ホゼ五、一五) などと教へてあるのは、それである。(五一、一二)

◎取税人といへば、當時のユダヤ人は、一概に唯無慈悲冷酷なる強慾者、人非人といふ風に考へて居つたが。耶蘇は然うした取税人の中から、レビ(一名、マタイ)を擇んで其

の弟子となし給ふた。傳説によれば、或時エルサレムの市にて、多くの人々が一頭の狗の死骸を取巻き、『やれ瘦せて居るではないか。』『穢いではないか。』『足が折れて居るではないか』と、騒いで居る最中、忽ち一人の人が『けれども其の齒の眞珠の如く、美しきを見よ』といふ聲が、如何にも涼しく尊く覺えられ。一同思はず目を其の方にひけると、そこには耶穌基督が立つて居られたといふてある。其の如く世の人が、兎角唯缺點、弱點、汚點のみ認むる所にも、耶穌は何等かの美點を見出し給ふお方である。乃ち昔取税人レビを顧みて、彼をしも尙救ふに足り、又用ゆるに足ると認め給ふた耶穌は、今も凡て極惡非道の人を顧みて、之を救ひたまふ所の救主である。(一三、一四)

◎耶穌がレビの家にて、取税人、罪人等と食卓を共にし、之を教へ導いて居られると。パリサイ人がやつて来て、かれこれと非難する故、耶穌は答へて、『健かなる者は醫者を要せず、唯病ある者之を要す。我は正しき者を招かんとにあらで、罪人を招かんとて來れり』と、仰せられた。マルチン、ルーテルの言に、『或時惡魔が私に來り、『汝は大罪人である、それ故滅亡に墮つべきものぞ』といふから。』一寸待て、私が大罪人

だといふのは事實だが、耶穌は罪人を招きて救ひ給ふ故、滅亡に墮ちずとも可いではないか』と、答へると。惡魔は狼狽して逃げ出した』といふてある。思ふに罪人とは靈魂上の病人の事である。聖潔とは即ち健全の事に外ならない。然も耶穌はあらゆる罪惡の病者を救ふて、之を靈魂上の健康者、即ち全き聖潔に入つた人とならせ給ふのである。有難いことではないか。(一五一―一七)

◎斷食する、しないの問題に就いて、弟子達の事を非難する者があると。耶穌は答へて『誰も新しき布の裂を、舊き衣に縫ひつくることはせじ。誰も新しき葡萄酒を、舊き革囊に入ることはせじ。新しき葡萄酒は新しき革囊に入るなり』と宣ふた。これは、宗教が兎角舊き形式に捕はれて、新しき時代に應ずる、新しき方法手段を採用し兼ねる弊を戒められたものである。斷食の事に就いてはクラムマーの言に『斷食は善し。但し之によりて功德を求め、又は之を重荷の様に覺えながら、強ひて行ふのは基督教の自由に反する』といふてある。それ故斷食は人に見せる爲でなく、唯儀式的に行ふのでなく、眞に克己の精神から、之を神の前に守りてのみ、其の甲斐あるものと思はね

ばならぬ。(二八一—二二)

◎安息日に就いても亦、之を唯形式的に窮屈な思をして守るのでなく、之によりて肉體を休め、又心靈を養ふ爲に、十分有意義に守るべきの必要がある。所謂「安息日は人の爲に設けられて、人は安息日の爲に設けられず」とは、其の謂ではないか。ウイルバフオースは、前の外相カッスルリーが自殺したことを聞き、「憫れの者よ、彼は断えざる心勞を續けた上に、又安息日を守らなかつたから、こんなことになつたのである」といふたことがある。七日の中の少くとも一日は、殊に神を禮拜し、また靈魂上の生命を養ふ爲に使用する風を、我が國にも盛んにしたいものである。(二三一—二八)

(四) 十二使徒

【マルコ傳福音書第三章一一九】

一 また會堂に入り給ひしに、片手なえたる人あり、二人タイエスを訴へんと思ひて、安息日にかの人

を醫すや否やを窺ふ。三 イエス手なえたる人に「中に立て」といひ、四 また人々に言ひたまふ「安息日

に善をなすと惡をなすと、生命を救ふと殺すと、執かよき」彼ら默然たり。五 イエスその心の頑固なるを憂ひて、怒り見回して、手なえたる人に「手を伸べよ」と言ひ給ふ。かれ手を伸べたれば癒ゆ。六

なり。十一 また穢れし靈イエスを見る毎に、御前に平伏し、叫びて「なんぢは神の子なり」と言ひたれば、十二 我を顧すなとて、嚴しく戒め給ふ。十三 イエス山に登り、御意に違ふ者を召し給ひしに、彼ら御許に来る。十四 爰に十二人を擧げたまふ。是

如何にしてかイエスを亡さんと謀る。七 イエスその弟子とともに、海邊に退き給ひしに、ガリラヤより來れる夥多しき民衆も從ふ。又ユダヤ、八 エルサレム、イドマヤ、ヨルダンの向の地およびツロ、シドンの邊より夥多しき民衆その爲し給へる事を聞きて、御許に来る。九 イエス群衆のおしなやますを逃れんとして、小舟を備へ置くことを弟子に命給ふ。十 これ多くの人を醫し給ひたれば凡て病に苦しむもの、御體に觸らんとして押迫る故

を逐ひ出す權威を用ひさする爲に、遣さんとてなり。十六 此の十二人を擧げて、シモンにペテロといふ名をつけ、十七 ゼベダイの子ヤコブ、その兄弟ヨハネ、此の二人にボアネルゲ、即ち雷霆の子といふ名をつけ給ふ。十八 又アンデレ、ピリポ、バルトロマイ、マタイ、トマス、アルパヨの子ヤコブ、タダイ、熱心黨のシモン。十九 及びイスカリオテのユダ、このユダはイエスを賣りしなり。

◎「男子門を出づれば七人の敵あり」とやら。耶蘇の名聲が少しく揚りかかると、早や彼の身邊に附纏ふて其の落度を探し、機會があつたら之を陥れやうとする者共が現

れた。眞に五月蠅い世の中ではないか。昔或哲學者の母が其の子を戒め、『汝が善を行へば悪人に憎まれ、悪を行へば善人に憎まれる。いつそ汝は世に出ぬ方が可くはないか』と言ふと。哲學者は答へて、『其の代、私が善を行へば善人に喜ばれ、悪を行へば悪人に喜ばれるから、私は矢張世に出でます』といふたさうである。私共はどうせ世に出るからには、悪人に憎まれる位は覺悟の上にて、進んで耶蘇に従ふべき筈ではないか。(一一二)

◎『安息日に崖が崩れて、其の下敷となる者あらんに、若し引出して生くる見込があつたら、之を助けても可い。若し其の見込がなくば、翌日まで棄てて置け』といふた位。ユダヤ人は安息日に對する狭苦しい規則を設けて、之を人々に強ひて居つた。けれども耶蘇は、安息日に必要なことをするのと、善を行ふのとは、當然の事として。前には弟子達が安息日に麥の穂を摘みて食ひたるを辯護し。(マル二。二三—二八)此度は又片手拵えた者を、平氣で安息日に醫しておやりなされた。安息日を守る必要に就いては、或時英國の議會にて、一醫師が『七日に一日休業することは、人の健康を増し、壽命

を長くし。又他の事情さへ同じくば、たしかに勞働の質をも量をも、他の七日間のべつに働く者より優良ならしめる』と演説した。其のため倫敦の醫師會では、二十人の専門家が寄つて、果して彼の言の如くであるか否やを研究したが。其の結果は一人残らず、右醫師の主張に大賛成を表するに至つた如き例もあれば。安息日を唯形式上の事とせず、反つて其の眞の意義を辨へて守るのは、非常に大事なことである。(三一六)

◎耶蘇の往き給ふ處には、夥多しき民衆が之に従ふた。彼は飽迄も民衆本位に其の業を爲し給ふたお方である。監獄改良の先驅者ジョン、ハワードが露國に行つた時、其の皇帝が彼を見んことを望み給ふと、彼は辭して應じなかつた。而して言ふには、『私は貧乏人や、在監人を見る爲に斯の國に來たので、高貴なお方に拜謁に來たのではありませぬ。』とのことであつた。もつともつと、基督の宗教を民衆の間に普及することを得せしめよ。(七一—二二)

◎耶蘇は弟子達の中より十二人を選びて、使徒となし給ふた。これは第一、彼等を御側に置く事、第二、御教を宣傳せしむる事、第三、惡鬼を逐ひ出さしむる事等の、目



的の爲であつた。古語に『善人と居るは芝蘭の室に入るが如し、久しくして其の香を聞かず、之と俱に化する』とあり。私共は古の使徒達の如く、肉の耶蘇の御側に侍べることは出来ないにしても、少く共斷えず靈の基督と偕に在りて、始終其の御徳に化されて居る様でなくてはならぬ。私共は又古の使徒達の如く、あらゆる機会を捉へて主の福音を宣傳し、進んで一切の悪魔の業を毀たん爲に戦ふて居らねばならぬ。ウエンデル、フィリップスが、『基督教は戦闘である、夢想ではない』といふたのは、間違のない話である。(二三一―一五)

◎今十二使徒の顔觸を見るに、ペテロ、ヤコブ、ヨハネ、アンデンの最初の四人が、ガラヤの漁夫であつた事。又マタイが取税人であつた事等は、前に見えた通である。其の他の人々の事は餘り明白でないけれども、大概皆似たやうな、質朴單純なる勞働階級の出身と見て間違あるまい。今勞働及び勞働者の尊重せらるべき事に就いては、古人の言に『我等は勞働する、而してこれは神に近き事である。』(ホーランド)『勞働する者には能はざることなし。』(ペリアンダー)『勞働によりて得たる果實は、最も愉快な

る歡樂である。』(ウオウエナゲス)『汝祈禱する如く亦勞働せよ。』(ホイッチャー)『唯勞働のみ貴し』(カーライル)などといふてある。それ故私共は、自分自ら一箇の勞働者として世に現れ、又其の使徒を主として勞働階級より撰び給ひし耶蘇の僕として、飽迄も亦勞働の神聖なる所以を理解し、斷えず正直の額に汗して、忠實に己が職分を行ふものとならぬばならぬ。(二六一―一九)

◎耶蘇は然うした質朴單純なる平民を擧げ用ひて、神の國を地上に打建つべき大任を授け給ふこととなつた。ブリス大將(ウィリアム)が世を去る數月前、或人が彼にむかひ、其の長い年月、神に恵まれ且用ゐられた秘訣を、一言にいへば何であるかと尋ねると。彼は答へて、『全能の神をして、ウィリアム、ブリスに屬する一切を、残らず所有せしめ奉つた、唯それだけである』といふた。其の如く幾ら足りない人間でも、若し其の一切を惜みなく耶蘇に献げ、自由自在に使ふて戴くこととなれば。使はるる人物の如何によらず、これを使ふ方の優れた爲に、意外に大なる御用も勤まらうといふものである。使徒達のことは此の道理を、もつとも力強く私共に教へ示して居るではない

(五) 我が兄弟、我が姉妹

【マルコ傳福音書第三章二〇―三五】

二十 斯てイエス家に入り給ひしに、群衆また集り來りたれば、食事する暇もなかりき。二一 その親族の者これを聞き、イエスを取り押へんさて出て來る、イエスを狂へりと謂ひてなり。二三 又エルサレムより下れる學者たちも「彼はベルゼブルに憑かれたり」と言ひ、かつ「悪鬼の首によりて悪鬼を逐ひ出すなり」と言ふ。二三 イエス彼ら呼びよせ、譬にて言ひ給ふ「サタンは、いかでサタンを逐ひ出し得んや。二四 もし國、分れ争はばその國、立つこと能はず。二五 もし家、分れ争はば其の家、立つこと能はざるべし。二六 若しサタン己に逆ひて分れ争

はば立つこと能はず、反つて亡び果てん。二七 誰にても先づ強き者を縛らずば、強き者の家に入りて其の家財を奪ふこと能はじ、縛りて後々の家を奪ふべし。二八 誠に汝らに告ぐ、人の子らの凡ての罪とけがす穢とは赦されん。二九 然れど聖靈をけがす者は、永遠に赦されず永遠の罪に定めらるべし」三十 これは彼らイエスを「穢れし靈に憑かれたり」と云へるが故なり。

兄弟・姉妹と外にありて汝を尋ね」三三 イエス答へて言ひ給ふ「わが母、わが兄弟とは誰ぞ」三四 斯て周圍に坐する人々を見回して言ひたまふ「視よ、こ

れ我が母、わが兄弟なり。三六 誰にても神の御意を行ふものは、是わが兄弟、わが姉妹、わが母なり」

◎群衆の慕ひ來りたるが爲に、耶蘇は食事をなし給ふ暇さへなかつた。彼は絶間なき勤勞をして居給ふたのである。或人がダンカン、マセソンに對ひ、其の過度の勤勞を諫めると。彼は答へて、「けれ共靈魂の亡ぶる状を見ては、じつとして居られない。永遠の國に入つて後に、休ませて戴くばかりである」といふた。或宗教家がジョン、モリソンにむかひ、「お互に今少し、ゆつくり働かうではないか」といふと。彼は答へて「君よ、怠る宗教家は早く死ぬる」といふたが。それから六ヶ月の後、其の人は大患に罹り、早や危篤に陥つたと聞いて、モリソンが之を見舞に行くと。彼は苦しい息の下から懺悔して言ふた。「君よ、怠る宗教家は早く死ぬると、君が言ふたのは眞實である。僕は今更悔いても及ばない。しかし君は何卒機會の存するかぎり、今後共熱心に、救靈の爲に戦ふてくれ給へ」と、いひ終つて死んださうである。(二〇)

◎親族の者共は、耶蘇を取押へんとして、出で來つた。愛情餘ありて理解を欠いた親類縁者の、宗教上に於ける壓迫干渉ほど、面倒なものは少い。「人の仇は其の家の者なるべし」(マター一〇・三六)とは、其の事ではないか。それ故アブラハムは、カナンに往けとの命を蒙りて出で立ちながら。父のテラが存命中は、妨げられて途中のハラに引かかつた儘、進み得なかつたのである。(創一一・三一)マルチン、ルーテルの如きも、其の初法律家になるつもりで勉強して居つたのを、中頃宗教に身を投じた爲に父の怒を買ひ、宗教改革の事業が餘程緒につく頃迄、尙解けないで困り入つたと、傳へられて居る。私共は此の義理と人情との間に板挾となつて、身の方針を誤ることなきやう、兼々覺悟する所がなくてはならぬ。(二二)

◎彼等は耶蘇を狂人扱した。使徒パウロも後に總督フェストから「パウロよ、汝狂氣せり」(使二六・二四)と、言はれたとあり。人は何事にか熱中する時、往々傍觀者から狂人扱を受けるものである。それ故ニュートンが、石鹼玉を吹いて光線の理を研究する時には、近所の人々が皆狂人だと思ふたのである。石井十次君が醫書を焚いて、專

心孤兒教育に身を委ぬるの決心をした時には、其の夫人までが彼を發狂したと思ふたのである。今日の私共も、若し必要ならば世間から狂人扱を受くる迄、熱心以て神と人にと盡したいものである。(二二)

◎ここに態々エルサレムから下り來れる學者があり、耶蘇を中傷して、彼は惡鬼の首ベルゼブルによりて、惡鬼を逐ひ出すのであるといふた。それに對して耶蘇は宣ふた、「若し國分れ争はば其の國立つこと能はず、若し家分れ争はば其の家立つこと能はざるべし云々」と。如何にも其の如く、一致は力であれど、其の反對に分裂は破滅を意味するものである。それ故昔ネルソンは、部下に屬する二人の艦長が相争ふのを戒めて、海の彼方を指しつつ、「公等の敵は彼處に居る。それを忘れて、戦友互に相争ふとは何事ぞ」といふた。其の如く私共には亦、各自に共通の大敵があつて、それは罪惡である、又惡魔である。私共はこの目前の大敵を忘れて、反つて兄弟牆に閱ぐ如きの愚を演じてはならぬ。(二二―二七)

◎耶蘇は續いて仰せられた、「人の子等の凡ての罪と、穢す瀆とは赦されん。されど聖

靈をけがす者は永遠に赦されず、永遠の罪に定めらるべし」と。これと似た御言はへブル書に、『一度照されて天よりの賜を味ひ、聖靈に與る者となり、神の善き言と來世の能力とを味ひて後墮落する者は、更にまた自ら神の子を十字架に釘けて肆し者とする故に、再び之を悔改に立返らすること能はざるなり。』(へブ六。四一六)又『我等若し眞理を知る知識を受けたる後、ことさらに罪を犯して止めずば、罪の爲に犠牲もはや無し。唯畏れつつ審判を待つ事と、逆ふ者を焚き盡す烈しき火とのみ遺るなり。』(へブ一〇。二六、二七)とあり。私共は斯く故意に聖靈の啓示にさからひ、また耶蘇を再び十字架に釘くる罪の甚だ恐るべきことを知つて、日頃から警戒する所がなくてはならぬ。(二八一三〇)

◎折柄、其の母と兄弟姉妹とが、面會に來たのを好い機會に、耶蘇は萬民同胞の大主義を教へ、『我が母、我が兄弟とは誰ぞ。』又、『誰にても神の御意を行ふ者は、これ我が兄弟、我が姉妹、我が母なり』と仰せられた。世に人類同胞の主義を唱へ、また四海一家の理想を説く者は多くあれど、其の癖彼等が市外の細民をさへ、兄弟として愛し

得ないのは何故かといふに、それは彼等が『神の御意を行ふ』て居ないからである。即ち耶蘇の救に與つて居ないためである。豫言者イザヤが『狼は小羊と共に宿り、豹は小山羊と共に臥し、犢、雄獅、肥えたる家畜共に居りて、小き童子に導かれ云々』と。彼が理想の王國を説きたる後、『そは水の海を掩へる如く、エホバを知るの知識、地に滿つべければなり。』(イザ一。六九)といふたのは、眞に故あることである。人類同胞の主義は、唯人が神を父、又耶蘇を救主としてうけいれ、以來『人に爲られんと思ふことは、人にも亦其の如くする』(マタ七。一二)に至つて後に、始めて實現せらるべきものである。(三一―三五)

(六) 心の島

【マルコ傳福音書第四章一一一〇】

一イエスマた海邊にて教へ始めたまふ。夥多しき群

衆、みもとに集りたれば、舟に乗り海に泛びて坐

したまひ、群衆はみな海に沿ひて陸にあり。二「譬にて數多の事をなし、教の中に言ひたまふ、三「聽け、種播くもの、播かんとて出づ。四「播くとき、路の傍らに落ちし種あり、五鳥きたりて啄む。土うすき硬地に落ちし種あり、土深からぬによりて、速かに崩え出たれど。六日出でてやけ、根なき故に枯る。七茨の中に落ちし種あり、茨そだち塞きたれば、實を結ばず。良き地に落ちし種あり、生え出でて茂り、實を結ぶこと、三十倍、六十倍、百倍せり」九また言ひ給ふ「きく耳ある者は聽くべし」十イエス人々を離れ居給ふとき、御許に在る者とも十二弟子とともに、此等の譬を問ふ。十一イエス言ひ給ふ「なんぢらには神の國の奧義を與ふれど、外の者には、凡て譬にて教ふ。これ十二「見るときも見ゆとも認めず、聽くとき聞ゆとも悟らず、載へりて救はる事なからん爲なり」十三また言ひ給ふ

「なんぢら此の譬を知らぬか、然らば争でもろろの譬を知り得んや。十四「播く者は御言を播くなり。十五「御言の播かれて路の傍らにありとは、斯る人ないふ、即ち聞くととき、直ちにサタン來りて、その播かれたる御言を奪ふなり。十六「同じく播かれて硬地にありとは、斯る人ないふ、即ち御言をききて、直ちに喜び受くれども、十七「その中に根なければ、ただ暫し保つのみ、御言のために、患難また迫害にあふ時は、直ちに蹟くなり。十八「また播かれて茨の中にありとは、斯る人ないふ、十九「即ち御言をきけど、世の心勞、財貨の惑、さまざまの慾をりきたり、御言を塞ぐによりて、遂に實らざるなり。二十「播かれて良き地にありとは、斯る人ないふ、即ち御言を聽きて受け、三十倍、六十倍、百倍の實を結ぶなり。」

◎耶蘇は舟に乗りて湖上に泛び、岸邊につどひ來れる群衆相手に説教し給ふた。最初

に所謂『種蒔の譬喩』を語り、後其の意味を十二弟子始め、御側に居る者共に説明し給ふたのであるが。其の時彼は開口一番、『聽け、種播く者播かんとて出づ』といひ。次に其の意味を解いて、『播く者は御言を播くなり』と仰せられた。然らば御言を播く者とは誰の事かといふに、それは耶蘇御自身のことである。(マタ一三、三七) 又一般基督者の事であるとも言ひ得る。(ヨリ前三、六) 古語には『一年の計は穀を樹るに如くなし、十年の計は木を樹るに如くなし、終身の計は人を樹るに如くなし』とあり。今耶蘇の福音を宣傳することは、靈魂を救ふて新しき人を造る所以である。即ち人を樹る眞の手段であるから、これこそ誠に國家百年の計を立て、文神の國の爲に永遠の奉仕をするものに外ならない。お互に益々奮發して、此うした不朽の大事業の爲に、身を盡し心を盡さうではないか。(一三、一三、一四)

◎彼は續いて、『播く時路の傍らに落ちし種あり、鳥來りて啄む』といひ。其の意味を解いて、これは『聞く時直にサタン來りて、其の播かれたる御言を奪ふ』ものであると仰せられた。或男が言ふには、『私は二十年間教會に出席したが、説教の始まる頃

には、いつでも商賣上の事など考へ込んで、一度も満足に説教を聞いたことがない。』とのことであつた。此の如く油断すると、説教者が講壇に叫んで居る最中、悪魔は勝手に、聴衆の耳元に囁いて居る如きこともあり得るゆゑ。私共は折角播かれた御言の種を、悪魔に奪ひ去られぬ注意が、極めて大切である。(四、五、一五)

◎彼は又『土薄き礮地に落ちし種あり、土深からぬによりて、速に萌え出でたれど、日出でてやけ、根なき故に枯る』といひ。其の意味を解いて、これは『御言を聞きて直ちに喜び受くれども、其の中に根なければ唯暫し保つのみ。御言の爲に患難又は迫害に遭ふ時、直ちに躓く』ものであると宣ふた。彼等は耳に教を聴き、口に之を受賣するか知らねど、それが心の奥に根をおろして居らぬ故、一寸した患難迫害にも直に患を取失ふのである。即ち昔の人が『小人の學は耳に入りて口に出づ、口と耳との間は四寸のみ、曷んど七尺の體を美にするに足んや』といふたのは、其の事ではないか。それ故私共は何よりも先づ、心の奥に横はる罪の頑石を取除き、御言の種をして、其の根を深く胸の底におろさしめる様でなくてはならぬ。(五、六、一六、一七)

◎次に『茨の中に落ちし種あり、茨そだち塞ぎたれば實を結ばず』といひ。其の意味を解いて、これは『御言をきけど、世の心勞、財貨の惑、各様の慾入り來り、御言を塞ぐによりて遂に實らざる』ものであると、教へ給ふた。然るに聖書の他の部分には、『又諸般の心勞を神に委ねよ、神汝等の爲に慮り給へば也。』(ペテ前五。七)などいふ御約束もあれば。私共は無益なる心勞をすべきものでない。使徒パウロは又『金を愛するは諸般の悪しき事の根なり。』(テモ前六。一〇)といふて居る。私共は財貨の惑に御言を蔽はれてはならぬ。將又肉慾の戒むべき事に就いては、古人も『情慾を制せよ、然らざれば情慾に制せられん。』(ホレース)『死を避くるよりも罪を避くるは善し。』(トマス、ア、ケンピス)などいふて居れば。私共は此等各種の茨の爲に、其の心の畠に於ける、御言の成長を妨げらるる様なことがあつてはならぬ。(七、一八、一九)

◎最後に彼は、『良き地に落ちし種あり、生え出でて茂り、實を結ぶこと三十倍、六十倍、百倍せり』といひ。これは『御言を聴きて受け、三十倍、六十倍、百倍の實を結ぶ』ものであると、説明し給ふた。ヘロドタスの言ふ所によれば、アラビヤの野にて

は、一粒の麥から二百粒の實がとれるのは常の事にて、時としては三百粒に達する例さへ、少くないとのことである。歌に『數萬石つみかさねたる米俵、もとは一粒の種にぞありける。』其の如く一人の眞面目な基督者は、神に用ゐられて、能く三十人、六十人、百人は愚か、更に多くの靈魂を救に導き得るものであれば、それにつけても、私共は銘々、先づ御言の種を、心の良き地に播かれ度ものである。(八、九、二〇)

◎『心ここにあらざれば視れども見えず、聴けども聞えず、食へども其の味を知らず』と、いふて。耶蘇が幾ら手近い譬喩を以て、わかり易く神の眞理を説き給ふても、聞く者に之を受け入れる用意がなければ、更に益する所がないばかりか、反つて其の爲に前よりも心を頑固にするくらゐのことである。これは彼等が『見る時見ゆとも認めず、聴く時聞ゆとも悟らぬ』が故である。アウグスチヌスの言に、『黄金をふきわくる火は、埃を焚き。穀物をこなす杵は、殻を碎き。油を搾る器械は、粕を吐き出す』といふてある如く。同じ神の御言も、之を聞く人の心柄によりて、祝福とはならないで、反つて呪詛となる如き恐もあれば、私共は敬虔の念を以て、眞理を學ぶことが肝要

である。(一〇—一二)

(七) 一粒の芥種

【マルコ傳福音書第四章二一—四一】

二一 また言ひたまふ『升のした、寢臺の下におかんとて、燈火をもち來るが、燈臺の上におく爲ならずや。二三 それ顯はるる爲ならで、隠るるものなく、明かにせらるる爲ならで、秘めらるるものなし。二三 聴く耳ある者は聴くべし』二四 また言ひ給ふ『なんぢら聴くことに心せよ、汝らが量る量にて量られ、更に増し加へらるべし。二五 それ有てる人はなほ與へられ、有たぬ人は、有てる物をも取らるべし。』

播くが如し、二七 日夜起臥するほどに、種はえ出て育てども、その故を知らず。二八 地はおのづから實を結ぶものにして、初には苗、つぎに穂、つひに穂の中に充ち足れる穀なる。二九 實、熟れば直ちに鎌を入れる、收穫時の到れるなり』  
三〇 また言ひ給ふ『われら神の國を何になすらへ、如何なる譬をもて示さん。三一 一粒の芥種のごとし、地に播く時は、世にある萬の種よりも小けれど、三三 既に播きて生え出づれば、萬の野菜よりは大きく、かつ大なる枝を出して、空の鳥その蔭に

棲み得るほどになるなり」

三三 斯のごとき数多の譬をもて、人々の聴きうる力に随ひて、御言を語り、三四 譬ならでは語り給はず、弟子たちには、人なき時に凡ての事を釋き給へり。

三五 その日、夕になりて言ひ給ふ『いざ彼方に往かん』  
三六 弟子たち群衆を離れ、イエスの舟に給ふまま共に乗り出づ、他の舟も從ひゆく。三七 時に烈しき颪風おこり、浪うち込みて、舟に滿つるば

三六 かりなり。三八 イエスは船の方に茵を枕として寢れたまふ。弟子たち呼び起して言ふ『師よ、我らの亡ぶるを顧み給はぬか』  
三九 イエス起きて風をいましめ、海に言ひたまふ『黙せ、鎮れ』乃ち風やみて大なる風となりぬ。四〇 斯て弟子たちに言ひ給ふ『なに故かく應ずるか、信仰なきは何ぞ』  
四一 かれら甚く懼れて互に言ふ『こは誰ぞ、風も海も順ふとは』

◎基督者は『光の子供、晝の子供』である。(テサ前五。六) それ故私共は其の光を升の下、又は寢臺の陰に隠すことなく、燈臺の上に置きて周圍の人々を照さねばならぬ。それが幾百燭光のアークライトであると、又糸心の蠟燭ほどの光であるとは、自ら別問題である。要は銘々その天分相應に、暗に住む人々を照し導いて居れば可いのである。それには唯言語にのみよらず、殊に其の實行により、又其の人格によりて、光を輝かすことが大事である。他の場合に耶蘇が『汝等の光を人の前に輝かせ、これ人

の汝等が善き行爲を見て、天に在す汝等の父を崇めん爲なり。』(マタ五。一六) と仰せられたのは、其の意味を教へられたものである。(二二―二三)

◎私共は聴く所に注意せねばならぬ。アダムとエバとは、惡魔の言ふ事を聞きいれて墮落し。ノアの時代の人民は、ノアを通じて語り給ふ神の御聲を聞かない爲に、滅された。使徒パウロの言に『信仰は聞くにより、聞くは基督の言による』(ロー一〇。一七)とあり。私共は基督の御言を聞くことによりて、其の心靈上の成長進歩を助けねばならぬ。或人がグラッドストーンにむかひ、『貴君のやうに聖書に明い方は、説教を聴聞する時、往々これはつまらぬと、感ぜらるることはありませぬか』と尋ねると。彼は答へて、『どんな説教でも謹聴すれば、必ず何等か得る所がある。よくよくつまらぬ説教でも、じつと辛抱して聴いて居れば、忍耐力が養へる』と、いふたさうである。それ故私共は『集會をやむる或人の習慣の如くせず。』(ヘブ一〇。二五) 反つて規律正しく、それぞれの集會に出席し、且謙遜つて道を學ぶべきものである。(二四、二五)

◎神の國は地に播かれた種の、初には苗、次に穂、穂の中に充ち足れる穀結る如き、



順序ある成長發育を遂ぐるものぞとの御教である。之を一箇人に就いて言へば、救を受けるのは瞬間の事だが、人格を完成するのは永久の業である。誰やらが『一箇の基督者たるは一生の事業である』といふたのは、間違のない話であると思ふ、神の國の建設に就いては、尙更此の御言の眞實なる事を感じざるを得ない。即ち『ロマは一日に成らず』といふ諺もある通、神の政事の普く地上に布かる迄には、随分の歳月を要するものと見てかからねばならぬ、ポリカ、プスの弟子の一人が、或時迫害の爲に信仰を墮す基督者の少からぬを悲み、榲樹に倚りかかつて泣いて居ると。ポリカ、プスは之を慰め勵まして言ふた、『神の國は、今汝が倚りかかつて居る其の榲樹と同じく、成長に多くの歳月を要する、初の間は周圍を取巻く雜草と荆棘とに苦められ、それを凌いで少し育てば、今度は暴風に搖ぶられたり、狂雨に打たれたりして、各様の試験を経たる後、始めて雲を衝くほどの大木となるのである。それ故汝も随分氣長に、忍耐せねばならぬ』と。これは兎角性急短慮に陥り易き私共にとつても、亦極めて適切な教訓であるといはねばならぬ。(二六一—二九)

◎耶蘇は又『神の國は一粒の芥種の如し、地に播く時は世にある萬の種よりも少けれど、既に播きて生え出れば萬の野菜よりは大きく云々』と、仰せられた。あるとき一人の婦人が途上に落して一部の小冊子を、當時青年であつたバックスターが拾ふて讀んだ爲に信仰に志し、後年『未信者への警告』といふ書を著した。其のバックスターの書を読んで悔改めた者の多くある中に、ドッドリッチといふ人がある。後年『宗教の勃興及び進歩』といふ書を著した。其のドッドリッチの書を読んで救を求めた多數の中に、有名なるウィ、バ、フ、オ、オ、スがあり、一生の間奴隷廢止の爲に盡瘁し、かつ『實際的基督教觀』といふ書を著した。其のウィ、バ、フ、オ、オ、スの書を読んで、救主を求めた者の數多ある中に、リッチモンドなるものがある。彼は後に『牛乳屋の娘』といふ書を著したが、これが又無數の人々に祝福をわかつに至つたのである。『誰か小さな事の日を藐視するものぞ。』(ゼカ四。一〇) 神の國は此うして案外小いところから、大な發展を遂げるものであるから、私共は神の御力に信頼して、銘々其の身に及ぶべきりの奉仕を勵まねばならぬ。(三〇—三四)

◎耶蘇は海の浪を鎮め、風をいまして後、弟子達にむかひ、『何故斯く臆するか、信仰なきは何ぞ』と仰せられた。ジョン、ウエスレーは學校を出てから間もなく、アメリカの土人に傳道せんとて其の國に渡航する際、海が荒れ船が揺いて安き心もない折柄。同船して居るモラヴィア派の人達ばかりは、婦人小兒迄、一人として死を懼るるものなく、安心して一切を神に任せ居れる状を見て感じ入り。それから其の宗教上の經驗に、著しき進境を見たといふことである。『汝水の中を過ぐる時は我偕に在らん、河の中を過ぐる時は水汝の上に溢れし。』(イザ四三・二)とあり。私共は狂瀾怒濤の中にも、神によりて自若たるの信仰を有ちたきものである。(三五―四一)

(八) 一聯隊の悪鬼

【マルコ傳福音書第五章一一一〇】

一斯て海の彼方なるゲラセネ人の地に到る。二イエスの舟より上り給ふとき、穢れし靈に憑かれたる人

墓より出でて、直ちに遇ふ。三この人、墓を住處とす、鎖にてすら今は誰も繋ぎ得ず。四彼はしばしば足械と鎖とにて繋かれたれど、鎖をちぎり、足械をくだきたり、誰も之を制する力なかりしなり。五夜も晝も、絶えず墓あるひは山にて叫び、己が身を石にて傷けるたり。六かれ遙にイエスを見て、走りきたり、御前に平伏し、七大聲に叫びて言ふ、『いと高き神の子イエスよ、我は汝と何の關係あらん、神によりて願ふ、我を苦しめ給ふな』これはイエス『穢れし靈よ、この人より出で往け』と言ひ給ひしに因るなり。九イエスマた『なんぢの名は何か』と問ひ給へば『わが名はレギオン、我ら多きが故なり』と答へ、十また己らをして、此地の外に逐ひやり給はざらんことを切に求む。十一彼處の山邊に豚の大なる群、食しぬたり。十二悪鬼どもイエスに求めて言ふ、『われらを遣して豚に入らしめ給へ』十三イエス許したまふ。穢れし靈いでて、豚に入りたれば、二千

匹ばかりの群、海に向ひて、崖を駆けくだり、海に溺れたり。十四飼ふ者ども逃げ往きて、町にも里にも告げたれば、人々何事の起りしかを見んとて出づ。十五斯てイエスに來り、悪鬼に憑かれたりし者、即ちレギオンをもちたりし者の、衣服をつけ、慥なる心にて坐しをるを見て、懼れあへり。十六かの悪鬼に憑かれたる者の上にありし事と、豚の事とを見し者ども、之を具に告げたれば、十七人々イエスにその境を去り給はん事を求む。十八イエス舟に乘らんとし給ふとき、悪鬼に憑かれたりしもの偕に在らん事を願ひたれど、十九許さずして言ひ給ふ、『なんぢの家に、親しき者に歸りて、主がいかに大なる事を汝に爲し、いかに汝を憫み給ひしかを告げよ』二十彼ゆきてイエスの如何に大なる事を己になし給ひしかをテカボリスに言ひ弘めたれば、人々みな怪しめり。

◎ガリラヤ湖の東南に當るゲラセネ人の地にて、耶蘇がレギオン、即ち一聯隊の惡鬼に憑れた者を醫し給ふた事實は、彼が世の極惡非道の人を救ひ給ふ御力の、極めて適切なる比喩とも見ることが出來やう。此の男は平生家に居ないで、墓を住所として居たとある。ソロモンの箴言に、『其の家を離れて彷徨ふ人は、其の巢を離れて彷徨ふ鳥の如し』（箴二七・八）とあり。兎角家庭に居つかない、浮浪性を帯びた人間が、悪い事をして易いものである。ジャック、ストーカーといふ男は放蕩飲酒等の惡癖に陥り、幾度となく家をつぶし、果ては寝る所がなくて、犬の箱の中に夜を明して居つたものであるが。それが救世軍に救はれて、立派な聖徒、有力なる救靈者となり、後にはストーカー少佐として、知らるる程の人物となつた。耶蘇は今も斯る浮浪性を帯びた無頼の徒さへ、救ふ力を有つて在し給ふ。（一―三）

◎彼は其の繋がれた足械や、鎖を斷ち切り、誰も之を制し得る者がなかつたとある。これは父兄の訓戒も、友人の忠告も、社會の制裁も、法律の處分も、其の甲斐なき者の身の上とも、見ることが出來やう。スロツス爺といふは、其の以前稀なる大賊にて、

度々ポートランドの重罪犯のみ容るる監獄に出入し、英國の泥捧仲間では『ポートランドの公爵』と綽名せられた男である。それが救世軍の安宿に一泊したのが縁にて悔改め、耶蘇の救を受けて後、自筆にて『鐵の鎖も、懲役も、四百度の刑も、四十年の監獄生活も、いかんともなし得ざりし私を、神は數分間に救ふて心を入れかへ、新しき人とならせ、しかもそれを今日迄持續させて居給ふ。有難いではないか』と、書いて居るのを見たことがある。（四）

◎彼は又夜晝絶えず墓や山にて叫び、己が身を石にて傷けて居つたとある。其の如く、罪人は何人を害するよりも先に、己を害するものである。罪人は皆、一種の自殺者であるといふことも出來やう。スポルジョンの譬喩談に、或暴君が鐵工に命じて長い鎖を造らせ、それが出來たら、用ゐて其の鐵工を縛らせた。惡魔が人をして罪を犯さしめ、自分で自分を苦しめしむる状態が、亦之と似て居るといふてある。けれども聖書に『基督は自由を得させん爲に我等を釋き放ち給へり。されば堅く立ちて再び奴隷の軛に繋がるな』（ガラ五・一）とある。唯耶蘇によりてのみ、私共は解放せられて、眞の自

由を樂しむことが出来るのである。(五一八)

◎耶蘇が惡鬼に其の名を問ひ給ふと、答へて、『我が名はレギオン(一聯隊)我等多きが故なり』といふた。其の如く人が墮落して、一箇の目立つた罪人となるまでには、亦概ね極めて複雑にして多様な原因がある。即ち個人的原因あり、自然的の原因あり、社會的原因がある。個人的原因といふ中には、惡しき遺傳も、良らぬ習慣も、能力の缺乏も、意志の薄弱も、疾病も、怠慢も、飲酒も、放蕩も含んで居り。自然的原因といふ中には、氣候風土の影響も、農作物の豊凶も、天然資源の多寡等も含んで居り。社會的原因といふ中には、宗教、教育、經濟、衛生、風俗、その他一切の社會状態の關係を含んで居る。それ故一個の罪人は、一個のレギオンである。とても數へ切れぬ程多種多様な原因によりて、斯くなつたのではあれど、耶蘇は能く其のレギオンに憑れた者をも醫したまふ。『すべて彼を信するもの』(ヨハ三。一六)の救はれざりし例は、曾てないのである。(九一—一三)

◎惡鬼を逐ひ出されて後の彼の男は、『衣服をつけ、慥なる心にて坐し居る』のを見て、人々は驚いたとある。西洋の諺に『新しき心を得るものは、新しき上着を得る』といふことがあり。人の心の變化は、直ちに其の外部の生活上に迄、影響するものである。すなはちブリス大將(ウィリアム)が『先づ人を造れ、さらば彼等は其の住居するに適する境遇を造らん』といふたのは、此の點に於て、其の意味極めて深長の言であると思ふ。(二四—一七)

◎耶蘇は惡鬼を逐ひ出された男が、之に隨行せんことを求めるのを許さず、其の儘留りて、家族、親戚、友人の間に、救の證言を立つべきことを命じ給ふた。蓋し『愛は家庭より始むべきもの』だからである。久しき以前、或人がハックスレー教授の、此の物語にもとづいて基督教を攻撃した論文を読み、甚く思ひ亂れて居ると。其の人の叔父にて、多年放蕩の結果、落魄して旅役者の群に投じ、各地を流浪した後、近頃彼に頼つて居るのが入り來り。『此の間から御忠告に従ひ、頻に新約聖書を読んで居りませう。今日讀んだ所に、何でも澤山の惡鬼が一人の男に入つて居るのを、耶蘇が助けておやりなされたといふ様な記事があり。あれはそつくり私の事だと思ひ、感謝の

至に堪へませぬ」といふのを聞いて。其の人は忽ち、ハックスレー教授が見出し得なかつた靈的の意味を、此の物語の中に發見し、今更の様に、救の御力に對する信念を篤うしたといふことである。此の如く耶穌は今も、一聯隊の惡鬼に憑れた者をさへ、救ふ力を有つて居給ふ。其の聖き御名を讃め奉れ。(一八一—二〇)

(九) 多くの醫者と耶穌

【マルコ傳福音書第五章二一—四三】

二一 イエス舟にて復かあなたに渡り給ひしに、大なる群衆みもとに集る、イエス海邊に在せり。二二 會堂司の一人、ヤイロといふ者きたり、イエスを見てその足下に伏し、二三 切に願ひて言ふ「わが稚なき娘、いまはの際なり、來りて手をおき給へ、さらば救はれて活くべし」二四 イエス彼と共にゆき給へば、大なる群衆したがひつつ御許に押迫る。

二五 爰に十二年、血漏を患ひたる女あり。二六 多くの醫者に多く苦しめられ、有てる物をことごとく費したれど、何の効なく、反つて増々悪しくなりたり。二七 イエスの事をききて、群衆にまじり、後に来りて、御衣にさはる、二八 「その衣にだに觸らば救はれん」と自ら謂へり。二九 斯て血の泉ただちに乾き、病のいえたるを身に覺えたり。三十

イエス直ちに能力の己より出でたるを自ら知り、群衆の中にて、振返り言ひたまふ「誰が私の衣に觸りしぞ」三一 弟子たち言ふ「群衆の押迫るを見て、誰が我に觸りしぞと言ひ給ふか」三二 イエスこの事を爲しし者を見回し給ふ。三三 女おそれ戦き、己か身になりし事を知り、來りて御前に平伏し、ありしままを告ぐ。三四 イエス言ひ給ふ「娘よ、なんぢの信仰なんぢを救へり、安らかに往け、病いえて健全になれ」

三五 かく語り給ふほどに、會堂司の家より人々きたりて言ふ「なんぢの娘は早や死にたり、争でなほ師を煩はすべき」三六 イエス其の告ぐる言を傍より聞きて、會堂司に言ひたまふ「懼るな、ただ信ぜよ」三七 斯てペテロ、ヤコブその兄弟ヨハネ

の他は、ともに往く事を誰にも許し給はず。三八 彼ら會堂司の家に来る。イエス多くの人の、甚く泣きつ叫びつする騒を見、三九 入りて言ひ給ふ「なんぞ騒ぎ、かつ泣くか、幼児は死にたるにあらず、寢れたるなり」四十 人々イエスを嘲笑ふ。イエス彼等をみな外に出し、幼児の父と母と己に伴へる者とな牽きつれて、幼児のなる處に入り、四一 幼児の手を執りて「タリタ、クミ」と言ひたまふ。少女よ、我なんぢに言ふ、起きよ、との意なり。四二 直ちに少女たちて歩む、その歳十二なりければなり。彼ら直ちに甚く驚きおどろけり。四三 イエス此の事を誰にも知れぬやうにせよと、堅く彼らを戒め、また食物を屢に與ふることを命じ給ふ。

◎孔子の言に、「父母は唯其の疾をこれ憂ふ」とあり。昔赤染衛門は其の子の大患に際し、身を以て之に代らんことを祈りつつ、「かはらむと祈る命は惜しからで、さても

別れむことを悲しき』と歌ふた。病氣の子を有つ親の心は、往々にして此の如きものがある。今會堂司ヤイロが、其の病める少女の爲に、來つて耶蘇の御助を求めた有様を見るに、彼は『耶蘇を見て其の足下に伏し』たとひへば、其の謙遜の態度がわかり。『切に願ひ言ふ』たとあれば、其の熱心が察せられる。しかも彼が『我が稚なき娘いまはの際なり』と語りつつ、尙『來りて手をあき給へ、さらば救はれて活くべし』と訴へたのを見れば、其の信仰の篤さに驚かざるを得ない。彼は慈愛の父たると共に、亦珍しき篤信の人であつたことが、知られるではないか。(二二—二四)

◎十二年血漏を患ひたる女あり、多くの醫者に多く苦しめられ、有てる物を悉く費したれど、何の効なく、反つて増々悪しくなつて居つたが。竊と來て耶蘇の御衣に觸り、病が忽ち癒えたとある。其の當時ユダヤの醫者は、狼の鬍髯、鹿の角、鼠の頭、蟹の眼球、木兎の腦、蛙の肝臓、蝮の油身、蝗、蝙蝠等を黒焼とし、其の灰を萬病皆息の妙藥として、患者に服用させたなどいへば。藥價は恐ろしく高かつたらうが、其の効能の毫も見るべきものがなかつたのは、不思議もないことである。それと同じ様

に、今も罪の病が原因となり、各様の禍に苦しむ人々を、酒や、放蕩や、物見遊山や、虚飾や、金錢や、名譽や、權勢や、法律の制裁や、生活改善や、修養法や、諸種の社會運動等によりて、之を醫さうと試みても。唯それだけでは、到底多くの醫者に多く苦しめらるる如き結果に終る他はない。人は唯其の罪を悔いて耶蘇に來り、信仰の手を伸べて彼の御衣に觸るにより、心の病を醫され、靈魂の健康を得て、眞の安心と幸福とを樂むことが出来る。『他の者によりては救を得ることなし、天の下には我等の頼りて救はるべき他の名を、人に賜ひし事なければ也。』(使四。一二)とある通である。(二五—二九)

◎血漏を患ひたる婦人は、醫されて後、其の身に經驗した恵を、公に證言すべきことを命ぜられた。他の場合に『夫れ人は心に信じて義とせられ、口に言ひあらはして救はるるなり。』(ロー一〇。一〇)又『暗黒にて我が告ぐることを光明にて言へ。耳を當てて聽くことを、屋の上にて宣べよ。』(マタ一〇。二七)などあり。神の恵を證言することは、聽く者を益するのみならず、其の語る者を祝福するところ、最も多きものと思は

ねばならぬ。(三〇—三三)

◎耶蘇は彼女に對ひ、『娘よ、汝の信仰汝を救へり、安らかに往け』といひ、之をいはつて歸らせ給ふた。アウグスチヌスは、此の物語に就いて言ふたことがある。『今も世の人が、基督の體なる其の教會に對する態度が之と似て。多數の者は唯ざわざわと群集する間に、極めて少數の者のみ、信仰の手を伸べて之に觸るのである』と。ライル博士は又、此の婦人の信仰の事に關して言ふた。『一體新約聖書に、信仰くらゐしはしば説かれ、又推薦せられた徳はない。私共は信仰によりて始め、信仰によりて生き、信仰によりて立ち。見る所によらず、信仰によりて歩み。信仰によりて勝利を得、信仰によりて安心を保ち、又信仰によりて安息に入るのである。それ故私共はしばしば自らを省み、私には果して實際の信仰があるか、私の信仰は果して、眞實、純粹にして、神より賜りたるものであるかと、問ひ試みねばならぬ』と。如何にも大切なる忠告であると思ふ。(三四)

◎會堂司の家に着せらるる前に、少女は死んだ。けれども耶蘇は『懼るな、唯信ぜよ』といふて内に入り。少女の手を執りて、アラム語にて『タリタ、クミ』(我汝に言ふ起きよの義)といふ一言の下に、之を甦らせ給ふた。ムーデーは或人の爲に、吊説教をなさんとするに當り、一體耶蘇はそれに就いて、どんな模範を遺して居給ふかと、聖書を探つて見た處が。彼が死人の傍に近づいた時には、いつでも之を甦らせて居給ふた故、絶えて一度も吊説教をせられたことがないのに、氣がついたといふてある。即ち耶蘇の御言に、『我は復活なり、生命なり、我を信するものは死ぬとも生きん。凡そ生きて我を信する者は永遠に死なざるべし』(ヨハ一。二六、二七)とあり。私共は此の死んでも死なぬ、永遠の生命を與へたまふ耶蘇の御力を、銘々その身に經驗せねばならぬ。(三五—四二)

◎耶蘇はヤイロの娘を甦らせたる後、之に食物を與ふべきことを命じ給ふた。それと同じ様に、新に罪より救はれて生命に入りたる者には亦、引續き之に靈魂上の滋養分を供給し、日増に強壯になりゆくやう、其の世話を怠つてはならぬ。『人の生くるはパンのみによるにあらず、神の口より出づる凡ての言による』(マタ四。四)とは、いつ

までも變らぬ、貴き御教である。(四三)

(一〇) 田舎大工

【マルコ傳福音書第六章一一二九】

一 斯て其處をいで、己が郷に到り給ひしに、弟子たちも從へり。ニ安息日になりて、會堂にて教へ始め給ひしに、聞きたる多くのもの驚きて言ふ「この人は此等のことを何處より得しぞ、此の人の授けられたる知慧は何ぞ、その手にて爲す斯の如き能力あるわざは何ぞ。此の人は木匠にして、三マリヤの子、またヤコブ、ヨセ、ユダ、シモンの兄弟ならずや、其の姉妹も此處に我らと共にをるに非ずや」終に彼に顯けり、曰イエス彼らに言ひたまふ「豫言者は、おのが郷、おのが親族、おのが家の外にて尊ばれざる事なし」五 彼處にては、何の能力あるを

も行ひ給ふこと能はず、ただ少數の病める者に、手をおきて醫し給ひしのみ。六 彼らの信仰なきを怪しみ給へり。

七 斯て村々を歴巡りて教へ給ふ。また十二弟子を召し、二人づつ遣しはじめ、穢れし靈を制する權威を與へ、かつ旅のために、杖一つの他は、何をも持たず、糧も囊も帶の中に入れて持たず。九 ただ草鞋ばかりをはきて、二つの下衣をも着ざること命給へり。十 斯て言ひたまふ「何處にても人の家に入らば、その地 去るまで其處に留れ。十一 何處にても汝らを受けず、汝らに聽かずば、其處を

出づるとき、證のために足の裏の塵を拂へ」十二 爰に弟子たち出て往きて、悔改むべきことを宣傳へ十三 多くの惡鬼を逐ひだし、多くの病める者に油をぬりて醫せり。

十四 斯てイエスの名顯れたれば、ヘロデ王ききて言ふ「バプテスマのヨハネ、死人の中より甦へりたり。この故に此等の能力その中に働くなり」十五 或人は「エリヤなり」といひ、或人は「豫言者、いにしへの豫言者のことき者なり」といふ。十六 ヘロデ聞きて言ふ「わが首斬りしヨハネ、かれ甦へりたるなり」十七 ヘロデ先に、その娶りたる己が兄弟ピロポの妻ヘロデヤの爲に、みづから人を遣し、ヨハネを捕へて獄に繋けり、十八 ヨハネ、ヘロデに「その兄弟の妻を納るるは、宜しからず」と言へるに因る。十九 ヘロデヤ、ヨハネを怨みて殺さんと思へど能はず。二十 それはヘロデ、ヨハネの義にして聖なる人たるを知りて、之を畏れ、之を護り、かつその教なき

きて、大に惱みつつも、なほ喜びて聽きたる故なり。二一 然るに機よき日來れり。ヘロデ己が誕生日に大臣・將校・ガリラヤの貴人たちを招きて饗宴せしに、二二 かのヘロデヤの娘いり來りて、舞をまひ、ヘロデと其の席に列れる者とを喜ばしむ。王、少女に言ふ「何にても欲しく思ふものを求めよ、我があたへん」二三 また誓ひて言ふ「なんぢ求めば、我が國の牛までも與へん」二四 娘いでて母にいふ「何を求むべきか」母いふ「バプテスマのヨハネの首を」二五 娘ただちに急ぎて王の許に入りきたり、求めて言ふ「れがはくば、バプテスマのヨハネの首を盆に載せて速かに賜はれ」二六 王いたく憂ひたれど、その誓と席に在る者とに對して拒むことを好まず、二七 直ちに衛兵を遣し、之にヨハネの首を持ち來ることを命ず、衛兵ゆきて獄にて、ヨハネの首を斬り、二八 その首を盆にのせ、持ち來りて少女に與ふ、少女これを母に與ふ。二九 ヨハネの弟子たち聞きて



來り、その屍體を取りて墓に納めたり。

◎耶蘇は久々にて郷里ナザレに歸り、安息日に會堂にて教をなし給ふと。人々は驚き怪んで、『此の人は此等の事を何處より得しぞ、此の人に授けられたる智慧は何ぞ、其の手にてなす斯の如き能力ある業は何ぞ。此の人は木匠にして、マリヤの子、又ヤコブ、ヨセ、ユダ、シモンの兄弟ならずや云々』といふて、之に躓いた。耶蘇の智慧と能力とは、特に神より出でたもの故、それが彼等の目に不思議と見えたるは、當然の事である。彼が『木匠』と呼ばれ給ふた事に就いては、元來ユダヤ人は勞働を重んずる國民にて。即ち耶蘇御降誕の數年前に死んだラビ、ヒレルは、『勞働を愛せよ』といひ。他のラビは『大なる哉、勞働は神を崇む』と説いて居る。それにしても神の獨子、世の救主たる耶蘇が、自ら鋸や鉋をとりて、木をきつたり、板をけづつたりして、勞働の模範を示されたのは、勞働神聖の主義、又勞働生活の重んずべき道理を、私共に教ふる上に於て、限なく尊きことと言はねばならぬ。(一一四)

◎ナザレの人民の不信仰なりし爲に、耶蘇も其の地にては、何の能力ある業をも行ふこと能はず、唯少數の病人を醫したる後に去り給ふたとある。古語に『奇蹟は信仰の寵兒なり』といひ。信仰のなき所に奇蹟は行はれないのである。不信仰の恐るべき事に就いて、ライル博士の言に、『不信仰は世界最古の罪である。エバがエデンの園にて惡魔の言ふ所を聽き、神の御言を疑ふたのは、不信仰の始である。不信仰くらゐ人を墮落に至らしむるものはない。不信仰は又死を誘致する。イスラエル人民は、不信仰の爲にカナンに入りそこなひ、四十年荒野に彷徨ふ間に、其の大部分は其處にて死んだではないか。不信仰の罪は地獄に夥多しい植民をし續けて居る。殊に最も惡しきは、此の罪が世界人類の間に最も普及して居ることである』と、いふてある。私共は不信仰の爲に、神の御業を妨ぐる如きことがあつてはならぬ。耶蘇も曾て、『若し信せば神の榮光を見ん』(ヨハ一四〇)と、宣ふたではないか。(五、六)

◎十二弟子は杖一本の他に何も持たず、二人宛打連れて、出でて各地に悔改を宣傳した。斯く彼等が二人宛一緒に出かけた事は、其の互に相助け相勵ます上に、大なる便宜を與へたことであらう。『二人は一人に愈る』(傳四九)と、ソロモンが言ふた通で

ある。弟子達は杖一本を携へたばかりで、大膽に神の御國を潰めん爲に出で行いた。昔神は杖一本を携へてヨルダン河を渉りたるヤコブを祝み、終に妻子眷族等二隊をなすに至らせ給ふ。〔創三二。一〇〕後に又同じく杖一本を手にして起ちたるモーセを用ひ、能くイスラエル人民を、埃及の奴隷たる境涯より救はせ給ふた如き事がある。〔出四。二〕其の同じ神がここに又、杖一本を持つて出で立ちたる弟子達を祝み、之を用ひて神の國に多大の貢献をなすに至らせ給ふたことを見れば。今日の私共も亦徒手空拳、以て世の罪惡と戦ふことを憚つてはならぬ。神と偕なる一人は、神なき千萬人よりも強いからである。〔七一―一三〕

◎ヘロデ、アンテバスは耶蘇の評判を聞いて、これは曩に我が首斬りたるバプテスマのヨハネが、甦つたのであらうといふて、心を痛めた。彼が其の事のあつて以來、どんなに良心の苛責を経験して居つたか、之によりても想像せられる。昔マクベスは野心に驅られて蘇格蘭の王ダンカンを弑し、自ら代つて王となつたが、其の時から彼は全く安眠を失ひ、夜は夢、晝は幻の中に怨靈に責められて、懊惱煩悶を極めたといふ話がある。ヘロデの場合が亦恐らく、之と似て居つたのではあるまいか。コレリツチは曾て良心のことを『理性の脈搏』と名づけ、バイロンは『神の宣託』と稱へ、ホゼア、バラウは『唯一の誤らざる裁判官』と呼んで居る。私共は平生、力めて良心の責なき毎日を過さねばならぬ。なぜかといふに、良心の苛責を受くる生活は此の世ながらの地獄、又良心の賞讃を受くる生活は、此の世ながらの天國だからである。〔二四―一六〕

◎ヘロデヤは曩に其の夫を棄ててヘロデに奔り、之と同棲するに至つた事をヨハネから諫められ。之を悔改むる心はなくして反つて深く彼を恨み、機會があつたら彼を亡き者にせんと待構へて居つた。使徒ヨハネの言に『凡そ兄弟を憎む者は、即ち人を殺すもの也』〔ヨハ壹三。一五〕とあり。ヘロデヤは此の意味に於て、既に久しくヨハネに對して、殺人罪を犯して居つたのである。それがヘロデの誕生日に實際の事實となつて現れたのは、長い間暗中には行はれて居つた罪惡が、偶々明みに暴露せられたものに過ぎない。加之彼女の惡心は其の娘を驅つて殺人罪の共謀者たらしめ、其の不義の夫をして、亦心ならずも義人の血を流すの狂暴を敢てするに至らしめた。實に『一人の惡人

は許多の善き業を壞ふ』(傳九。一八)ものである(一七—二九)

(一一) パンの奇跡

【マルコ傳福音書第六章三〇—五六】

三十 使徒たちイエスの許に集りて、その爲ししこと、  
教へし事なごとく告ぐ。三一 イエス言ひ給ふ『な  
んぢら人を避け、寂しき處に、いざ來りて暫し息へ』  
これは往來の人おほくして、食する暇だになかりし  
故なり。三二 斯て人を避け、舟にて寂しき處にゆ  
く。三三 其の往くを見て、多くの人それと知り、そ  
の處を指して、町々より徒歩にてともに走り、彼等  
よりも先に往けり。三四 イエス出でて、大なる群  
衆を見、その牧ふ者なき羊の如くなるを長く憫  
みて、多くの事を教へはじめ給ふ。三五 時すでに晚  
くなりたれば、弟子たち御許に來りていふ『ここは

寂しき處、はや時と晩し。三六 人々を去らしめ、周  
圍の里また村に往き、己がために食物を買はせ  
給へ』三七 答へて言ひ給ふ『なんぢら食物を與へ  
よ』弟子たち言ふ『われら往きて二百デナリのパン  
を買ひ、これに與へて食はすべきか』三八 イエス言  
ひ給ふ『パン幾つあるか往きて見よ』彼ら見ていふ  
『五つ、また魚二つあり』三九 イエス凡て人の紐々  
となりて、青草の上に座することを命じ給へば、四十  
或は百人、あるひは五十人、畝のごとく列びて  
座す。四一 斯てイエス五つのパンと二つの魚とを取  
り、天を仰ぎて祝しパンをさき、弟子たちに付して

人々の前に置かしめ、二つの魚をも人毎に分け給ふ。  
四二 凡ての人、食ひて飽きたれば、四三 パンの餘、  
魚の残を集めしに、十二の筐に滿ちたり。四四 パ  
ンを食ひたる男は五千人なりき。

四五 イエス直ちに、弟子たちを強ひて舟に乗らせ、  
自ら群衆を返す間に、彼方なるベツサイイダに先  
に往かしむ。四六 群衆に別れてのち、祈らんさて  
山にゆき給ふ。四七 夕なりて、舟は海の真中にあ  
り、イエスはひとり陸に在す。四八 風逆ふに因り  
て、弟子たちの漕ぎ煩ふを見て、夜明の四時ころ、  
海の上を歩み、その許に到りて、往き過ぎんとし給  
ふ。四九 弟子たち其の海の上を歩み給ふを見、變化  
の者ならんと思ひて叫ぶ。五十 皆これを見て心騒

ぎたるに因る。イエス直ちに彼らに語りて言ひ給ふ  
『心安かれ、我なり、懼るな』五一 斯て弟子たち  
の許にゆき、舟に登り給へば、風やみたり。弟子た  
ち心の中にて甚く驚く、五二 彼ら先のパンの事  
なきを知らず、反つて其の心鈍くなりしなり。  
五三 遂に渡りてゲネサレの地に着き、舟がかりす。  
五四 舟より上りしに、人々ただちにイエスを認めて、  
五五 偏くあたりを馳せまはり、その在すと聞く處  
處に、患ふ者を床のままつれ來る。五六 その到り  
たまふ處には、村にても、町にても、里にても、病  
める者を市場におきて、御衣の總にだに觸らしめ給  
はんことを願ふ。觸りし者は、みな醫されたり。

◎使徒達は耶蘇の御許に集りて、其の各地に於ける傳道事情を逐一報告に及んだ。『人情は悲哀を人に訴ふれば、其の悲哀が半減し。喜悅を人に語れば、其の喜悅が倍加するものである。』これは私共お互の間でさへ然うであるから、況して耶蘇に對して、

胸中の喜悅悲哀を打ちあくる場合には、亦格別の事と思はねばならぬ。耶蘇は彼等が食する暇もなき程多忙なるを見て、人を避けて暫く寂しき所に退き、休息すべきことを命じ給ふた。傳説によれば、使徒ヨハネが百歳に近き頃、或人が彼を訪問して、其の幼兒を相手に戯れて居るのを見。『基督の使徒たるものが、そんな眞似をせられて可いのですか』と問ふと。彼は答へて、『君の手に持たるる弓でも、折々弦を外さねば弾力が失せて用をしない如く。人も時々其の張りつめた氣を緩めて、無邪氣に安息する必要があるものぞ』と、いふたさうである。それ故私共は、平生神と偕に働く如く、亦折々神と偕に休息するの必要あることを知らねばならぬ。(三〇一—三二)

◎耶蘇は出でて大なる群衆を見、其の牧ふ者なき羊の如くなるを甚く憫み、多くの事を教へ給ふたのである。昔一休和尚は酒を飲んで大騒をする者を見て、『彼處に骸骨が踊つて居る』といひ。ブリス大將(ウィリアム)は、又名利の爲に狂奔する人々の靴音を聞いて、『あれは其の儘地獄に急ぐ足音ではないか』といふた。此の如く靈魂の眼を擧げて眺むれば、望なく神なく、浮世の衢に彷徨ふ人々の狀が、それこそ迷へる羊とも、

踊り狂ふ骸骨とも、又は地獄に急ぐ行列とも觀て取られ、ちつとして居られないのが、眞に耶蘇を知る者の心事でなくてはならぬ。それ故にいふ、『若し福音を傳へずば、我は禍なる哉』と。(コリ前九。一六) 私共は罪に亡ぶる世の人を見殺にする如きことがあつてはならぬ。(三三三、三四)

◎二百デナリ(我が七十八圓)のバンも、足り無さうに見ゆる五千人の大衆を、耶蘇は僅五つのバンと、二つの魚とにて養ひ給ふた。それが大なる奇跡であつたのは、申す迄もない。しかも私共は此の大なる奇跡の半面に、亦幾多の貴き教訓を見出すことを忘れてはならぬ。即ち第一、耶蘇が斯くパンの世話までなし給ふたのは、彼が私共の靈魂上のみならず、亦肉體上、生活上の事に迄、興味を有ち給ふ證據である事。第二、彼が五千人の大衆を、百人、五十人と、順序正しく坐らせて之を養ひ給ふたのは、其の組織的、事務的の手段を嘉し給ふ徴である事。第三、彼が神に感謝してパンを裂き給ふたのは、其の何事にも榮光を神に歸する御精神の顯現である事。第四、彼が又氣をつけて殘の屑を拾はせ給ふたのは、其の天物を暴殄せざる周到なる用意を示

す事等は、其の重なるものであらう。昔水戸烈公は農人形といふものを作り、食事の都度に之を眺めて、農民の粒々辛苦を感佩したといふことであるが。私共は又箸とるたびに、日毎の糧を授け給ふ神の恵を感謝し。如何にもして其の御鴻恩の萬が一にも、酬い奉らんことを心がけねばならぬ。(三五―四四)

◎耶蘇は弟子達を舟に乗せ、群衆を返して後、獨り山中に退いて神に祈り給ふた。クラウス、ヘームスは獨逸の有名なる宗教家であるが。或時其の間斷なしに説教ばかりして居る様子を、友人に話すと。友人から、「君はそんなに人にのみ語つて居て、いつ神から語つて戴くのか」と反問せられ。大に思ひ當る所ありて、以來彼の心靈上に一段の進境を見たといふことである。上手に髻を剃る床屋は、しばしば剃刀をとぐ如く、大に神に用ゐられんと欲する者は、亦度々神の御前に出で、其の指導と能力とを求めて、靈魂に磨をかける必要あるものである。(四五、四六)

◎弟子達は逆風に漂され、徹宵苦んで居る處へ、耶蘇が海の上を歩んで來られたのを見て、變化の物ならんかと、驚き懼れた。マルチン、ルーテルが苦學して居た少年の時代に、其の國の風として折々人の門前に讚美歌をうたひ、若干の喜捨を受けて學資の補足にして居ると。一日或家から大の男が現れて、何事か大な聲で怒鳴る故。叱られたのであらうと思ひ、逸散に逃げ出した後にて、案外にもそれは彼に同情する親切な後援者であつたことが知れ、其の人から大層の便宜を得た。そこで彼は後、此の事實にもとづき、世の人が往々神の慈愛を憤怒と取違へ、恩恵を災禍と誤解する状が、亦之と似て居るのを戒めたことがある。耶蘇は近寄りて、『心安かれ、我なり、懼るな』といひ、共に舟に乗り給ふと、風は忽ちやみて、海も亦静まつた。新島襄氏の句に『むら雲に磨かれて輝る秋の月』とあり。患難と逆境とは、畢竟神が私共を練磨せん爲の、恵の賜に外ならぬのである。(四七―五六)

(一三) 形式家

【マルコ傳福音書第七章一一―一三】

一パリサイ人と或る學者らとエルサレムより來りて  
イエスの許に集る。ニ而して、その弟子たちの中  
に、潔からぬ手、即ち洗はぬ手にて食事する者の  
あるを見たり。三パリサイ人および凡てのユダヤ人  
は、古への人の言傳を固く執りて、懇ろに手を洗は  
れば食はず。四また市場より歸りては、まづ襖がざ  
れば食はず、このほか酒杯・鉢・銅の器を濯ぐな  
ど多くの傳を承けて固く執りたり、五パリサイ人お  
よび學者らイエスに問ひ「なにゆゑ汝の弟子たちは、  
古への言傳に違ひて歩まず、潔からぬ手にて食  
事するか」六イエス言ひ給ふ「イザヤは、汝ら偽  
善者につきて能く豫言せり、「この民は口唇にて我  
を敬ふ、然れど、その心は我に遠かる、七ただ徒

◎歌に『人のことを我にむかひていふ人は、さぞわがことも人にいふらむ。』又『よし  
あしのうつる姿の影法師、よくく見ればわが姿なり』などとあり。好んで人の落度  
を探し、之を吹聴し歩く如き者は、いづれ感心出來難い人物に相違ない。パリサイ人

六四  
らに我を拜む、人の訓誡を教さし教へて」と録した  
り、八汝らは神の誠命を離れて人の言傳を固く執  
る」九また言ひたまふ「汝等はおのれの言傳を守  
らんとて、能く神の誠命を棄つ、十即ちモーセは、  
「なんぢの父、なんぢの母を敬へ」といひ「父また母  
の罵る者は、必ず殺さるべし」といへり、十一然る  
に汝らは「人もし父また母にむかひ我が汝に對して  
負ふ所のものは、コルバン即ち供物なりと言はば  
可し」と言ひて、十二そののち人をして、父また母  
に事ふること勿らしむ、十三かく汝らの傳へたる言  
傳によりて、神の言を空しうし、又おほく此の  
類の事をなしたるなり」

と學者とは耶蘇と其の弟子との落度を探して、之を非難せん爲に、態々エルサレムか  
ら下つて來た。どういふ淺間しき人達であつたらうか。或反對家が年中基督者の缺點  
や、弱點のみ探して、之を吹聴して居るのを見て。或人が君は『聖書にある、ラザロ  
といふ乞食の話（ルカ一六・一九―三二）を知つて居るか。彼は全身に腫物が出來て膿が  
滴るのを、犬が來て嘗めて居つたとある。失禮ながら君は其の犬と同じ様に、毎日、  
基督者に出來た腫物の膿を嘗めて、喜んで居るのではないか』と、いふたさうである。  
戒むべきことではないか。（二、二）

◎昔イスラエル人がベリシテ人と戦争する時、神の櫃を携へて出たなら、屹度軍に勝  
てるであらうといふて、之を擔ぎ出したが。櫃は彼等と偕に在つても、神は彼等と偕  
に在し給はぬ故、忽ち非常な敗北を招いたのみならず、肝心な神の櫃まで敵に奪れて、  
當惑したといふことがある。（サム前四章）今パリサイ人及び多數のユダヤ人は、その物  
語と同じ様に、徒に宗教上の形骸を過重し、そんなものを擔ぎまはつて居る間に、  
反つて肝心の精神を取失ふたものである。其の結果、彼等は古い言傳によりて、手を

洗はねば食せぬとか。市場から歸つて身を潔めねば食卓に就かぬとか。其の他杯鉢、銅の器を濯ふ等の事に就いて、種々面倒なる規則を作り。果ては『手を洗ふ事を怠る者は死罪に當る』の、『手を洗ふ事を怠る者は、此の世にても後の世にても罰を受ける』のと、いひ出すほどになつた。彼等は『敬虔の貌をとりて、其の徳を捨つる者』

(テモ後三。五) となり了つたのである。(三、四)

◎彼等は然うした煩瑣なる言傳を、自分で墨守するのみならず、之を以て他人を律せんとした。リンコルンは或時彼を中傷する政敵に應へて、次の寓言を語つたことがある。『或人が朝早く裏の木の枝に栗鼠が居るのを見、銃をとつて之を射つたが落ちないから、更に一發射たうすると。子供が来て「お父さん、栗鼠なんか何處にも、居ないではありませんか」といふ。不思議に思ひ、目をこすつたら、其の拍子に目脂が落ちて、栗鼠も亦居なくなつた。多分己が目脂を栗鼠と見違へて居たのであらう』と。今パリサイ人と學者とが弟子達を非難した状を見るに、亦何となく己が目脂を栗鼠と取違へた様な趣があるではないか。彼等は己が誤りたる標準を、強ひて他人に擬せ

んとするものであつた。彼等は己が目梁木のあるに、兄弟の目の塵をとらんとする者であつた。けれ共耶蘇は言ふて居られる、『偽善者よ、先づ己が目より梁木を取除け、さらば明かに見えて、兄弟の目より塵を取除き得ん』と。(マテ七。五) 注意すべきことである。(五)

◎耶蘇は又預言者イザヤの、『此の民は唇にて我を敬ふ、されど其の心は我に遠かる云々』(イザ二九。一三)といふ言を引いて、彼等の宗教が實生活に伴はぬ、唯口舌のものであることを指摘し給ふた。二宮尊徳は或時理屈ばかりいふ學者に、『豆』といふ字を大書させ、それを馬に持つて行つて食べさせたが、もとより嘗めて見やうともしない。そこで今度は自分が作つた豆を一握り、持つて行つて食べさせ、馬は喜んで之を食べるのを示して、其の學者に、『幾ら机上の空論に長けて居つても、實際に行はれないことは、皆此の紙上の豆の字の如きものである』といふて、懇に説諭したといふ話がある。私共の宗教は、どうか唯口舌のものでなく、其の心に、生活に、深き根據を有するやうでありたい。(六一九)

◎又彼等が人の言傳を重んずるの餘、反つて神の誠命を棄つることを戒め。其の例證として、彼等が當然父母に捧ぐべき品物をも、神への供物だといふて之を私、故意に孝養を怠る事實を擧げて、之を譴責し給ふた。一體神に眞實を盡す者が、親を粗末にし得べき道理がない。既に目に見ゆる地上の父母を大事にせずして、目に見えぬ天の父を、いかで愛せらるゝ筈があらう。それ故眞の基督者は、必ず親孝行の人でなくてはならぬ。ロングフェラウの言に、『我等の爲に十字架に死に給ふた主が、今にも息を引取らうといふ間に、尙母の身の上を憂ひて、其の行末の方法を立て給ふたのを見れば。これは私共が亦、兩親に對して、聖き愛情を表すべきことを、事實に示されたものである』と、いふてある。眞に至言であると思ふ。(一〇一—一三)

(一三) 祈禱する母

【マルコ傳福音書第七章一四—三七】

十四 更に群衆を呼び寄せて言ひ給ふ『なんぢら皆われに聽きて悟れ。十五 外より人に入りて、人を汚し得るものなし、然れど人より出づるものは、これを人汚すなり』〔十六〕十七 イエス群衆を離れて家に入り給ひしに、弟子たち其の譬を問ふ。十八 彼らに言ひ給ふ『なんぢらも然か悟なきか、外より人に入る物の、人を汚しえぬを悟らぬか、十九 これ心には入らず、腹に入りて、割におつるなり』かく凡ての食物を潔しとし給へり。二十 また言ひたまふ『人より出づるものは、これを人汚すなり。二一 それ内より、人の心より、悪しき念いづ、即ち淫行・竊盜・殺人、二二 姦淫・慳貪・邪曲・詭計・好色・嫉妬・誹謗・傲慢・愚痴。二三 すべて此等の悪しき事は内より出でて人を汚すなり』

なき娘をもてる女、直ちにイエスの事をきき、來りて御足の許に平伏す。二六 この女はギリヤ人にて、スロ・フェニキヤの生なり。その娘より悪鬼を追ひ出し給はんことを請ふ。二七 イエス言ひ給ふ『まづ子供に飽かしむべく、子供のパンをとりて小犬に投げ與ふるは善からず』二八 女こたへて言ふ『然り主よ、食卓の下の小犬も子供の食屑を食ふなり』二九 イエス言ひ給ふ『なんぢ此の言によりて(安んじ)往け、悪鬼は既に娘より出でたり』三十 女、家に歸りて見るに、子は寢臺の上に臥し、悪鬼は既に出でたり。

三一 イエス又ツロの地方を去りて、シドンを過ぎテカボリスの地方を経て、ガリラヤの地に來り給ふ。三二 人々、耳聾にして物言ふこと難き者を連れ來りて、之に手をおき給はんことを願ふ。三三 イエス群衆の中より、彼をひとり連れ出し、その兩耳に指をさし入れ、また唾して其の舌に觸り、三四 天を



あふきて嘆じ、その人に對ひて『エバタ』と言ひ給ふ、  
ひらけよとの意なり。三五 斯てその耳ひらけ、舌の  
縫 ただちに解け、正しく物いへり。三六 イエス誰  
にも告ぐなと人々を戒めたまふ。然れど戒むるは

七〇  
ど反つて愈々言ひ弘めたり。三七 また甚だしく打  
驚きて言ふ『かれの爲しし事は皆よし、罪者をも  
聞えしめ、啞者をも物いはしむ』

◎夕食の席に就いた子供が、皿の上の大な馬鈴薯を二つに割ると、外の見かけの立派なるに似ず、内部は腐つて黒くなつて居つた。之を見た子供は、『お母さん、此の薯は基督者ぢやありませんね』と、言ふたさうである。成程外の見かけのみ立派で、中身の腐敗したものは基督者であり得ない。眞の基督者は其の心を潔められ、衷に基督の靈を宿して居るものでなくてはならぬ。耶蘇はこれに『外より人に入りて人を汚し得るものなし。されど人より出づるものは是人を汚すなり。』又『内より、人の心より悲しき念出づ云々』といふて。私共が何よりも先づ、其の心を潔められねばならぬことを、高調し給ふた。『私共は古の詩人と共に、『嗚呼神よ、我が爲に清き心を造り、わが衷に直き靈を新に起し給へ』(詩五一・二〇)と、祈り求めねばならぬ。(二四―二三)

◎耶蘇はガリラヤ湖から西北へ、三十五哩を隔る、海邊のツロの地方に赴き給ふた。これは其の當時、パリサイ人や學者等の反對運動が追々劇しくなつて來たので、暫く彼等を避けて、息をつき給ふたのかも知れない。彼は家に入りて人に知られじとし給ふたが、隠るゝことが出来なかつた。古語に『桃李言はず、下自ら蹊を成す』といふて、桃や李の在る所にはいつしか人が寄つて來て、下に蹊を成すが如く。賢明にして慈仁なる人格者の在る所には、黙つて居つても人が慕ふて集るものである。即ち耶蘇の往き給ふ所、靈に、肉に、彼の恩恵と憐憫とを求むる者が、群集したといふのは、然らなくてはならぬ筈のことである。(二四)

◎爰にギリシヤ人なる一婦人が、穢れし靈に憑れたる稚き娘の爲に、來りて耶蘇の御助を求めた。西洋の諺に『小さい子は頭を痛めしめ、大い子は心を痛めしめる』とあり。古歌に又『子を思ふ親の重荷の四手籠、しばしも休む息杖はなし』とある通、親の子に於ける、年中何等かの苦勞の絶間はないものである。今此の婦人は其の娘の爲に、大なる心配を抱いて居つた。けれども彼女は、それを耶蘇に御相談申上ぐるこ

とを知つて居つた。子供に取つて、最も有難いものは、祈禱する母である。それ故モ  
ニカが祈つた結果は、道樂者のアウグスチヌスが聖徒となり。スザンナが祈つた應驗  
として、ウエスレー兄弟は世に出づるに至つたではないか。人の親たる者は、何より  
も先づ、祈禱を以て其の子の爲に盡すことを知らねばならぬ。(二五、二六)

◎彼女は根氣好く耶蘇に縋つた。何と言はれても屈せず、辛抱強く願ひ求めて、其の  
祈禱が終に聽かれたのである。此の如く神は私共が忍耐を以て、彼に依頼することを  
喜び給ふ。耶蘇も曾て、『落膽せずして常に祈るべきこと』(ルカ一八)を、其の弟子  
に教へ給ふたことがある。『約束の途に立つて待て、神は必ず其の途に立戻り給ふであ  
らう。』『耶蘇を當にする習慣は、安心の基である。』私共は神の約束を信じて、根氣  
好く祈禱を續けたいものである。(二七、二八)

◎彼女は終に耶蘇から、『往け、惡鬼は既に娘より出でたり』との御言を戴き。また其  
の事實を目に見たわけではないけれども、耶蘇が然う仰せられるからには、屹度然う  
なつて居る事と、信じて家に歸ると。案の錠娘は癒えて、安らかに寢床に居るのを  
見出したとある。此の如きものが即ち、『見ゆる所によらず、信仰によりて歩む』(コリ  
後五、七)とも。又『望む所を確信し、見えぬ物を眞實とする』(ヘブ一、一)とも、いふ  
所の實驗である。もつと此うした信仰の歩を、經驗することを得せしめよ。(二九、三〇)

◎耶蘇はツロからシドンに出で、やがてデカボリスの地方を經、再びガリラヤの湖邊  
に歸り給ふた。こゝにて彼は聾の啞者を見、アラム語にて『エバタ』即ち『開けよ』と  
宣ふと。彼の耳は直ちに聞え、其の舌の縛はとけて、正しく物言ふことが出来る者と  
なつた。それと同じ様に、耶蘇は今も、凡て神の御聲を聞き分けられない靈魂上の聾  
者、又其の御旨に適ふことを語り得ない啞者に對ひ、『開けよ』といふて之を醫し給ふ。  
唯問題は私共の耳が常に神の御聲を聞き、私共の口が斷えず御旨を語る様にせら  
れて居るか、否やの一事である。(三一、三五)

◎人々は甚だしく驚いて、『彼の爲し、事は皆善』といふたとある。神は天地創造の始  
に、其の日其の日の成蹟をしらべて、自ら之を『善』と觀給ひ。一切り其の業を完成  
して後には、之を『甚だ善』と觀給ふたといふ事もあれば。どうか私共も、其の日

其の日に、行ふ所を點檢して、人からではない、主耶蘇から、『彼の爲し、事は皆善』と、嘉納せらるゝやうに、勤めたいものである。(三六、三七)

七四

### (一四) 耶蘇の奇蹟

#### 【マルコ傳福音書第八章一一一二】

一 その頃また大なる群衆にて食ふべきものなかりしかば、イエス弟子たちを召して言ひ給ふ、「二」われ此の群衆を憫む、既に三日われと偕にをりて食ふべき物なし。三 飢ゑしなまにて、其の家に歸らしめば、途にて疲れ果てん。其の中には遠くより來れる者あり。四 弟子たち答へ、言ふ、「この寂しき地にては、何處よりパンを得て、この人々を飽かしむべき」五 イエス問ひ給ふ、「パン幾個あるか」答へて、「七つ」といふ。六 イエス群衆に命じて地に坐せしめ、

七つのパンを取り、謝して之を裂き、弟子たちに與へて群衆の前におかしむ。弟子たち乃ちその前におく。七また小魚すこしばかりあり、祝して之をも、その前におけと言ひ給ふ。人々、食ひて飽き、擧きたる餘を拾ひしに、七つの籃に滿ちたり。九その人おほよそ四千人なりき。イエス彼らを歸し、十直ちに弟子たちと共に舟に乗りて、ダルマヌタの地方に往き給へり。十一 パリサイ人いで來りて、イエスと論じはじめ、

之を試みて天よりの徴をもとむ。十二 イエス心に憐れみ歎じて言ひ給ふ、「なにゆゑ今の代は徴を求むるか、誠に汝らに告ぐ、徴は今の代に絶えて與へられじ」十三 斯て彼らを離れ、また舟に乗りて彼方に往き給ふ。十四 弟子たちパンを携ふることを忘れ、舟には唯一の他パンなかりき。十五 イエス彼らを戒めて言ひたまふ、「慎みてパリサイ人のパンだねと、ヘロデのパンだねとに心せよ」十六 弟子たち互に、これはパン

無き故ならんと語り合ふ。十七 イエス知りて言ひたまふ、「何ぞパン無き故ならんと語り合ふか、未だ知らぬか、悟らぬか、汝らの心なほ鈍きか。十八 目ありて見ぬか、耳ありて聽かぬか。又なんぢら思ひ出でぬか、十九 五つのパンを擧きて、五千人に與へし時、その餘を幾筐ひろひしか」弟子たち言ふ、「十二」二十 「七つのパンを擧きて、千人に與へし時、その餘を幾筐ひろひしか」弟子たち言ふ、「七つ」二十一 イエス、言ひたまふ、「未だ悟らぬか」

◎『人は其の食ふ所のパンである。』又『饑ゑたる民は怒りたる民である。』などいふこともありて、生活の問題は靈魂の問題に次ぎ、最も緊要なるものである。耶蘇は野中にて空腹に迫れる數千人を見渡し、『我此の群衆を憫む。既に三日、我と偕に居りて食ふべき物なし。飢ゑし儘にて其の家に歸らしめなば、途にて疲れ果てん』といひ。その不思議を行ふ御手を伸べて、彼等を養ひ給ふことゝなつた。其の如く今日の私共も亦、くふ物に困る同胞を思ひやり、及ぶ限個人的にも、社會的にも、之が濟度に盡瘁

七五

する所がなくはならぬ。羅馬法王グレゴリーは毎夕食の時、十二人宛の貧民を招き、一緒に食事する習であつたが。或時一人の招かぬ客が入り来りて、都合十三人となつたのを見て。食事終りて後、其の人に『貴君は誰か』と尋ねると、『我は富める者なりしが、汝等の爲に貧き者となりし彼である』といふた儘、其の姿が見えなくなつた。さては主耶蘇御自身であつたかと、後で氣が付いたといふ様な傳説がある。『誠に汝等に告ぐ、我が兄弟なる此等の最と小き者の一人になしたるは、即ち我になしたる也』(マタ二五。四〇)とは、其の事ではないか。(一一四)

◎耶蘇は七つのパンと小き魚とを以て、四千人の多數を養ひ給ふた。『若き獅は乏しくして饑ることあり、されどエホバを尋ねる者は嘉き物に缺ることあらず。』(詩三四。一〇)又『先づ神の國と神の義とを求めよ、さらば凡て此等の物は汝等に加へらるべし。』(マタ六。三三) といふ御約束もあり。神は其の御名を呼ぶ者を、故なく飢饉の中に棄て置き給ふものでない。それ故荒野に彷徨へるイスラエル人民の爲には、天からマナを降らせ。(出一六。三五) ケリテ川の邊に身を隠せる豫言者の爲には、鴉にパンを運ば

せて、之を養ひ給ふた例もある。(列上一七。六) 此うした大能至愛の神を父上と呼ぶ身は、眞に心強いではないか。(五一七)

◎僅か七つのパンにて四千人を養ひ給ふた後、殘の屑を拾ひ集めると、それが七つの籠に一ぱいになつた。其の如く神の國の法則は、他人に恩恵を分つほど、自分の有つた恩恵が増すのである。即ち他人の爲に祝福を祈れば、自分にも祝福を受け。他人の救の爲に戦へば、それだけ自分の救を強くせられる。『與ふるは受くるよりも幸福なり』(使二〇。三五) とは、間違のない眞理である。(八一〇)

◎耶蘇がダルマヌタの地方に往き給ふた時、パリサイ人が來つて、天よりの徴を求めたが、彼は一も二もなく之を拒絶し給ふた。彼の奇蹟は徒に人目を驚かす爲の奇術ではなくて、全く唯愛と能力との發露であつた。大監督トムソンの言ふ所によれば、耶蘇の奇蹟は之を分類して、愛の奇蹟、能力の奇蹟の二つとなすべく。愛の奇蹟に屬するものは、死人を甦へらする件三、精神上の疾病を醫す件六、肉躰上の疾病を醫す件十八。能力の奇蹟に屬するものは、物を創造し給ふ件二、(即ちパンの奇蹟である) 物を破

壊し給ふ件一、(無花果の樹を枯らし給ふたのが其れである)天然を征服し給ふ件七、(海を歩み、暴風を鎮め、大漁を獲、魚の口より金を得たる等)而して人の意志に逆行し給ひし件三、(宮殿、ロマ兵の後に倒れたる等)であるとのことである。しかも耶蘇は、今も昔と同じく、必要に應じて、其の愛と能力とを私共の間に顯し給ふ。『耶蘇基督は昨日も、今日も、永遠までも變り給ふことがない。』(ヘブ一三〇。八)或人の言に、『唯患難に遭ふたことなきもののみ、奇蹟の時代は過ぎ去つたと言ふ』とあり。如何にも意味深き言であると思ふ。(一一一三)

◎パリサイ人は宗教上に於て、ヘロデ黨は政治上に於て、共に偽善者の標本と見るべき輩であつた。タルムド(ユダヤの古書)にパリサイ人に七種あることを記し。第一、シケム、パリサイ。これは創世記第三十四章にあるシケムの如く、勝手な時だけ律法を守るもの。第二、轉がるパリサイ。これは謙遜を装ふて、足を高く擧げぬ故、しばしば石に躓いて轉がるもの。第三、血の出るパリサイ。これは異性の顔を見ぬ爲として、目をつぶつて歩き、物にぶつかつて血を出すもの。第四、摺鉢パリサイ。これは不律

の物を見ぬ爲として、摺鉢形の帽子を目深に冠ぶる者。第五、其の次はパリサイ。これは律法に暗いため、年中其の次は、其の次はと尋ねるもの。第六、恐がるパリサイ。これはいつも神の審判を恐れ、びくびくしながら日を過すもの。第七、愛のパリサイ。これは眞に神を愛して之に奉仕するもの。しかし此の第七の如きは甚だ稀だといふてある。耶蘇は此うした形式的偽善的の生活を戒め、『慎みてパリサイ人のパン種と、ヘロデのパン種とに心せよ』とは、宣ふたのである。私共は一切の偽善を蛇蝎の如くに忌み嫌ふて、之に遠ざからねばならぬ。(一四一二)

(一五) 人格の尊貴

【マルコ傳福音書第八章三三—三八】

三三 彼ら遂にマツサイダに到る、人々盲人をイエスに連れ來りて、觸り給はんことを願ふ。三三 イエス盲人の手をとりて、村の外に連れ往き、その目に唾

し、御手をあてて『なにか見ゆるか』と問ひ給へば、三四 見上げて言ふ『人を見る、それは樹の如き物が歩くが見ゆ』三五 また御手をその目にあて給へば、

視認めたるに、癒えて凡てのもの明かに見えたり。  
二六 斯て「村にも入るな」と言ひて、その家に歸し給へり。

二七 イエ、其の弟子たちとピリボ・カイザリヤの村に出でゆき、途にて弟子たちに問ひて言ひたまふ「人々は我を誰と言ふか」二八 答へて言ふ「バプテスマのヨハネ、或人はエリヤ、或人は豫言者の一人」二九 また問ひ給ふ「なんぢらは我を誰と言ふか」ペテロ答へて言ふ「なんぢはキリストなり」三〇 イエ、己がことを誰にも告ぐなと彼らを戒め給ふ。三一 斯て人の子の必ず多くの苦難をうけ、長老・祭司長・學者らに棄てられ、かつ殺され、三日の後に甦へるべき事を教へ始め、三二 此の事をあらはに語り給ふ。爰にペテロ、イエスを傍にひきて戒め出でたれば、三三

◎こゝに耶蘇が盲入の手をとりて、村の外に連れゆき、其の目に唾し、之に御手を觸れ給ふと、それ迄何も見えなかつた目に、人の姿が樹の歩く如く見え出した。二た

八〇  
イエス振返りて弟子たちを見、ペテロを戒めて言ひ給ふ「サタンよ、わが後に退け、汝は神のことを思はず、反つて人のことを思ふ」三四 斯て群衆を弟子たちと共に呼び寄せて言ひたまふ「人もし我に従ひ来らんと思はば、己をすて、己が十字架を負ひて我に従へ。三五 己が生命を救はんと思ふ者はこれを失ひ、我が爲また福音の爲に己が生命をうしなふ者は、之を救はん。三六 人、全世界を贏くとも、己が生命を損せば、何の益あらん、三七 人その生命の代に何を與へんや。三八 不義なる、罪深き今の代にて、我または我が言を耻づる者なば、人の子もまた、父の榮光をもて、聖なる御使たちと共に來らん時に耻づべし」

び之に御手を觸れ給ふと、今度は人が人として認めらるゝに至つたといふのは、暗示に富んだ物語ではないが。此の如く私共の靈魂の目が未だ十分開けぬ前は、人を見ても兎角内部の人格を認め得ず。反つて彼等の貧富、貴賤、智慧、美醜といふ如き、外部の輪廓のみ、朦朧として目に映ずる。つまり人の姿が、樹の歩く位にしか見分らない。しかし乍ら私共の靈魂の目が全く開けると、以來人を人として認め得る様になる。即ち労働者にも、貧民にも、凡ての弱者にも、悉く其の人格を認めて、之を尊敬し得る様になる。耶蘇が他の場合に「汝等慎みて、此の小さい者の一人をも悔るな」又「此の小さい者の一人の亡ぶるは、天に在す汝等の父の御意にあらず。」(マタ一八・一〇、一四)など宣ふた意味も、こゝに至つて眞に身に味ふことが出来るのである。(二二―二六)  
◎ピリボ、カイザリヤの村々に往かるゝ途中、耶蘇は弟子達に對ひ、「汝等は我を誰と言ふか」とも尋になると。ペテロは答へて、「汝は基督なり」といふた。「基督」とは「油注がれた者」といふ意味のギリシヤ語にて。つまり彼が神から任命せられて、萬民の救の爲に遣された、神の獨子であるとの意に外ならない。大將ブラムエル、ブリスが

米國に出征中、舊友カムベル、モルガンが彼に出會ひ、『大將よ、あなたは今の諸教會をどう觀察せられますか』と問ふと。答へて『若し議論に於ては、少く共事實に於て、耶穌基督の神性と、其の能力とに對する不信仰に陥つて居るのが、今の基督教會最大の危険であると思ふ』と、いふことであつた。それにつけても私共は、『耶穌は基督なり』てふ堅き信仰の上に立つて、其の血によれる、自由にして、全き、即座の救を、愈々熱心に世に宣傳せねばならぬ。(二七—三〇)

◎其の時から耶穌は、彼が程なく多くの苦難を受け、長老、祭司長、學者等に棄てられ、且殺されて、三日目に甦へるべき事を教へ始められた。するとペテロが驚いて、之を諫めやうとするから、耶穌は叱つて、『サタンよ、我が後に退け、汝は神の事を思はず、反つて人の事を思ふ』と、仰せられたのである。神の獨子が非業の最後を遂げ給ふなどは、人間の側から考へては、到底想像にも及ばぬことである。しかし乍ら神は斯して、罪人を救ふことを善と認め給ふた。『神は罪を知り給はざりし者を、我等の代に罪となし給へり。これ我等が彼に在りて、神の義となるを得ん爲なり。』(コリ後

五。二一)とあるのは、其の謂である。(三一—三三)

◎斯て後、耶穌は、『人若し我に従ひ來らんと思はば、己を棄て、己が十字架を負ひて我に従へ』と宣ふた。此の己に克ちて十字架を負ふべき事に就いては、前後四回ほど、繰返し教へて居給ふのを見れば、それがどんなに大切な御教訓であつたか知られる。(註を見よ)モノツドの言に、『影を厭ふては形を捉へ得ぬ如く、十字架を避けては十字架の主を受入れることが出来ない。然も十字架なき基督教は、基督なき基督教ではないか』とあり。ルーサーフォードの言には又、『基督の十字架は最も心地好き負擔である。これは鳥の羽か、又は船の帆と同じく、我等を促して目的地に直前せしむるものである』と、いふてある。共に味ある言ではないか。(三四、三五)

〔註〕此の御教訓は、第一、マタ一六。二五、ルカ九。二四にあり。此等はどちらもマル八。三四と同じ場合であつたらしい。第二はマタ一〇。三九。第三はルカ一七。三三。第四はヨハ二。二五に出て居るのである。

◎耶穌は又、人の靈魂の如何に貴きものかを教へて、『人全世界を贏くとも己が生命を損せば、何の益あらん。人其の生命の代に何を與へんや』と、いひ給ふた。耶穌會の開祖ロヨラは巴里在學中、自分より十五歳も年少なるザヴェイエーを見て、有望の青年

なりと思ひ、折々訪ねて行つて四方山の話となし、歸る前にはいつでも、『人全世界を  
 贏くとも己が生命を損せば、何の益あらん』といふ聖句を唱へて、別れて居ると。ザ  
 ヴイエーは之によりて感奮し、後身を献げて救靈の戦争に従ふ者となり。天文年中、  
 我が日本にも渡來し、短日月の間ではあつたが、九州、中國から、近畿にかけて、盛  
 に耶穌の御名を證言した。彼の言に『一人の靈魂の救はるゝ爲ならば、私は一千  
 度の苦難をも厭はない』といふてある。彼は基督教を日本に宣傳したる第一人者であ  
 つた。それであるから私共も、一人一人の靈魂は、全世界よりも貴きことを知つて、  
 極力これが救の爲に奮闘せねばならぬ。『又多數の人を義に導ける者は、星の如くな  
 りて永遠に至らん。』(ダニ二二三) といふ様な、御約束の言もあるではないか。(三六一  
 三八)

(一六) 祈禱の山

【マルコ傳福音書第九章一一二九】

一また言ひ給ふ『まことに汝らに告ぐ、此處に立つ  
 者のうちに、神の國の、權能をもて來るを見るまで  
 は、死を味ははぬ者どもあり』  
 二六日の後、イエスタだベテロ、ヤコブ、ヨハネの  
 みを牽きつれ、人を避けて高き山に登りたまふ。斯  
 て彼らの前にて其の狀かはり、三その衣かがやきて  
 甚だ白くなりぬ、世の晒布者も爲し得ぬほど白し。  
 四エリヤ、モーセともに彼らに現れて、イエスと  
 語りあたり。五ベテロ差出でてイエスに言ふ『ラビ、  
 我らの此處に居るは善し。われら三つの廬を造り、  
 一つを汝のため、一つをモーセのため、一つをエリ  
 ヤのためにせん』六彼等いたく懼れたれば、ベテロ  
 何と言ふべきを知らざりしなり。七斯て雲おこり、  
 彼らを覆ふ。雲より聲出づ『これは我が愛しむ子な  
 り、汝ら之に聽け』八弟子たち急ぎ見回すに、イエ  
 スと己らとの他には、はや誰も見えざりき。九山を  
 くだる時、イエス彼らに、人の子の、死人の中より

甦へるまでは、見しことを誰にも語るなと戒め給  
 ふ。十彼ら此の言を心にさめ『死人の中より甦  
 へる』とは、如何なる事ぞ互に論じ合ふ。十一斯  
 てイエスに問ひて言ふ『學者たちは、何故エリヤま  
 づ來るべしと言ふか』十二イエス言ひ給ふ『實に  
 リヤ先づ來りて、萬の事をあらたむ。然らば人の  
 子につき、多くの苦難を受け、かつ蔑せらるる事の  
 録されたるは何ぞや。十三されど我なんぢらに告ぐ、  
 エリヤは既に來れり。然るに彼に就きて録されたる  
 如く、人々心のままに之を待へり』  
 十四相共に弟子たちの許に來りて、大なる群衆の  
 之を環り、學者たちの之を論じみたるを見給ふ。十  
 五群衆みなイエスを見るや否や、いたく驚き、  
 御許に走り往きて禮をなせり。十六イエス問ひ給ふ  
 『なんぢら何を彼らと論ずるか』十七群衆のうちの一  
 人こたふ『師よ、啞の靈に憑かれたる我が子を御許  
 に連れ來れり。十八靈いづこにても彼に憑けば、瘧



攀け泡をふき、齒をくひしほり、而して瘦せ衰ふ。御弟子たちに之を逐ひ出すことを請ひたれど能はざりき」十九 爰に彼らに言ひ給ふ「ああ信なき代なるかな、我いつまで汝らと併にならん、何時まで汝らを忍ばん。その子を我が許に連れきたれ」二十 乃ち連れきたる。彼イエスを見しとき、驚ただちに之を痙攣けたれば、地に倒れ泡をふきて轉び廻る。二一 イエスその父に問ひ給ふ「いつの頃より斯くなりしか」父いふ「なまなき時よりなり。二三 靈しはしば彼を火のなか水の中に投げ入れて亡さんとせり。然れど汝なにか爲し得ば、我らを憫みて助け給へ」二三 イエス言ひたまふ「爲し得ばと言ふか、信する者に

は、凡ての事なし得らるるなり」二四 その子の父ただちに叫びて言ふ「われ信ず、信仰なき我を助け給へ」二五 イエス群衆の走り集るを見て、穢れし靈を禁めて言ひたまふ「噫にて耳聾なる靈よ、我なんちに命ず、この子より出でよ、重ねて入るな」二六 靈さけびて甚だしく痙攣けさせて出でしに、その子、死人の如くなりたれば、多くの者これを死にたりと言ふ。二七 イエスその手を執りて起し給へば立てり。二八 イエス家に入り給ひしとき、弟子たち密に問ふ「我等いかなれば逐ひ出し得ざりしか」二九 答へ給ふ「この類は祈に由らざれば、如何にすとも出でざるなり」

ル監督は曾て言ふた、「凡そ神の最も莊重なる御業は、多く山岳に於て行はれた。即ち律法はシナイ山にて授けられ、イサクはモリア山にて犠牲に献げられた。モーセがレビデム山に手を舉げて祈れば、山下のヨシユアは戦に勝ち。エリヤがカルメル山に雨を呼び下せば、バアルの豫言者は顔色を失ふた。若夫れラマとギベアとの山上には、豫言者の學校が設けられ。シオン山には神の宮が建てられ居つた事など、人の皆知る通である」と。乃ち耶蘇がしばしば人を避け、山に登りて祈禱し給ふたのも、まことに故あること、謂はねばならぬ。(一、二)

◎彼が山にて祈禱し給ふ間に、其の御姿が變り、御衣は白く輝き、此の世の人とも思はれぬ御威光が顯れた。マシユ、ヘンリーの説に、「モーセが山にて神に見え、下りて來た時には其の顔が輝いたといへど、それは月が太陽の光を反射するのと同じく、他から借りて來た光輝であつた。然るに耶蘇の榮光は太陽の光と同じく、己に備はれる徳が、自然と外に顯れたのであるから、殊更に貴い」とのことである。それ故私共は此の點に於て、耶蘇を其の儘に眞似ることは不可能であれど、それにも拘らず、

私共も亦少くともモーセと同じ様に、神と親しく交ることによりて、或程度迄其の御光を身に反射することは出来る。即ちブシネルが『大なる品性とは神の品性に化されたものをいふ。我等は祈禱によりて信仰を養ひ、神に近づき、又神の御徳に化することが出来る』といふたのは、其の意味に外ならない。(二二三)

◎律法を代表するモーセと、預言者を代表するエリヤとが現れて、耶蘇と物語る状が如何にも神々しいのを見て、ペテロは其處に三つの廬を建て、いつ迄も斯てあらんとを願ひ求めたのであるが。それに對する應答はなくて、忽ち光れる雲が周圍を覆ひ、雲の中より聲ありて、『これは我が愛しむ子なり、汝等之に聽け』とのとに、驚いて目を擧ぐれば、早や耶蘇の他に誰をも見なかつたのである。此の如くモーセや、エリヤや、釋迦や、孔子や、昔から聖人賢人と呼ばるゝ人は多くあれど。萬國萬民が齊しく仰いで其の教と救とを求むべきものは、唯耶蘇基督の他にない。なぜかといふに、彼は律法をも、預言者をも、他の一切の宗教道徳をも大成し、それらに欠けて居つた實行力を吹込んだお方だからである。(マタ五。一七) 『汝等の導師は一人、即ち基督也。』

(マタ二二三。一〇)とは、即ち其の事である。(四一三)

◎御留守の間に、後に残された弟子達は、鬼に憑れた一少年を醫さうとして不成功に終り、當惑し切つて居る處へ、耶蘇が山から下りて來て、之を始末しておやりなされた。彼等は何故そんな失敗をしたかといふに、それは耶蘇の御不在であつたことも、兄弟子三人の居なかつたことも、少年の容體の甚だしく悪しかつたことも、皆それぞれの理由ではあつたらうが。しかし乍ら今一つ、彼等が失敗の最も大なる原因は其の不信仰であつた。即ち耶蘇が『嗚呼信なき代なる哉』と歎息し給ふたのは、之が爲である。ミルトンの句に、『不信仰は盲目である。』又メーソンの言に、『不信仰に原因せざる罪惡はない。』といふ様なこともあれば、私共は不信仰ゆゑに神の御名を穢すことなきやう、十分注意せねばならぬ。(二四二〇)

◎耶蘇は少年の父にむかひて、『信する者には凡ての事なし得らるゝなり』といひ。後又弟子達に對ひては、『此の類は祈によらざれば、如何にすとも出でざるなり』と告げ給ふた。それにつけても大切なるは、信仰の祈禱であることが解る。古人の言にも

「信仰がなくば祈禱が唱へられない、祈禱がなくば信仰が維持されない。」又「祈禱によりて恩寵の門を叩き、信仰によりて其の應答を待つ。」など、あり。スボルジョンは又「農夫が種を蒔いて收穫を待つのは信仰である。商人が金を銀行に預けるのは信仰である。鑛業者が金屬を火中に投じ、それがふきわけられて出て来るのを待つのは信仰である。航海者が磁石一つをたよりに、幾日となく大海原を渡るのは信仰である。それ故見ずして信ずる者は幸福である」といふて居る。私共は兼てから堅固なる信仰を神に置き、其の御約束をしつかり捉へて、力ある祈禱を續けて居たいものである。「凡て求むる者は得る」(マテ七。八)といふのが、耶蘇の御啓示だからである。(二二—二九)

(一七) 誰か大ならん

【マルコ傳福音書第九章三〇—五〇】

三十 此處を去りて、ガラリヤを過ぐ。イエス人の此の事を知るを欲し給はず。三一 これは弟子たちに教

をなし、かつ「人の子は人々の手にわたされ、人々これを殺し、殺されて、三日のち甦へるべし」と

言ひ給ふが故なり。二三 弟子たちは、その言を悟らず、また問ふ事を恐れたり。三三 斯てカペナウムに到る。イエス家に入りて、弟子たちに問ひ給ふ「なんぢら途すがら何を論ぜしか」三四 弟子たち默然たり、これは途すがら、誰か大ならんと、互に争ひたるに因る。三五 イエス坐して、十二弟子を呼び、之に言ひたまふ「人もし頭たらんと思はば、凡ての人の後となり、凡ての人の役者となるべし」三六 斯てイエス幼児をとりて、彼らの中におき、之を抱きて言ひ給ふ、三七「おほよそ我が名のために斯る幼児の一人を受くる者は、我を受くるなり。我を受くる者は、我を受くるにあらず、我を遣しし者を受くるなり」三八 ヨハネ言ふ「師よ、我らに従はぬ者の、御名によりて、鬼を逐ひ出すを見しが、我らに従はぬ故に、之を止めたり」三九 イエス言ひたまふ「止むな、我が名のために能力ある業をおこなひ、俄に我を

誤り得る者なし。四〇 我らに逆はぬ者は、我らに附く者なり。四一 キリストの者たるによりて、汝らに一杯の水を飲ます者は、我まことに汝らに告ぐ、必ずその報を失はざるべし。四二 また我信ずる此の小き者の一人を踏かす者は、寧ろ大なる挽臼を頸に懸けられて、海に投げ入れられんかた後れり。四三 もし汝の手なんぢを踏かせば、之を切り去れ、不具にて生命に入るは、兩手ありてゲヘナの消えぬ火に往くよりも勝るなり。四四 もし汝の足を踏かせば、之を抜き出だせ、片眼にて神の國に入るは、兩眼ありてゲヘナに投げ入れらるるよりも勝るなり。四五 彼は善きものなり、然れど鹽もし其の

靈氣を失はば、何をもて、之に味つけん。汝ら心

の中に靈を保ち、かつ互に和ぐべし。」

◎歌に『かゝる時こそ命の惜しからめ、かねてなき身と思ひしらずば』とあり。ブルタークは『死を懼れぬ者に何の苦痛かあらん』といふて居る。耶穌は生涯の終に十字架のあること、しかもそれが目睫の間に迫つて居ることを、百も承知の上、一歩一歩、其の運命に向ふて直前し給ふた。どういふ雄々しいことであらう。それと同時に、彼は我が世を去りたる後の、弟子達の上が、案じられる故、復しても彼がやがて人人の手に付され、殺されて三日の後に甦へるべきことを、豫告し給ふたのである。どこ迄も行届いた、思遣に富んだ、御心盡と謂はねばならぬ。(三〇—三二)

◎弟子達はカペナウムに往く途中にて、お互に『誰か大ならん』と争論した。此の種の大望野心くらゐ、いついつ迄も聖徒に附纏ふて其の品性を毀け、又同志の間の一致協力を妨ぐるものは少い。即ちシセロが『最も高尚なる精神を有する者も、しばしば大望野心の爲に、其の心を動かされる』といふたのは、眞實の事である。それ故私共は力めて謙遜の徳を養ひ、人を己よりも優れりとするの修行をせねばならぬ。アウ

ガスチヌスは『宗教に第一大切なものは謙遜である、第二も謙遜である、第三も亦謙遜である』と、説いて居るのである。(三三、三四)

◎耶穌は十二弟子に告げ給ふた、『人若し頭たらんと思はゞ、凡ての人の後となり、凡ての人の役者となるべし』と。斯て幼兒を彼等の中に置き、『凡そ我が名の爲に、斯る幼兒の一人を受くるは我を受くるなり云々』と、示し給ふたのである。眞の大人豪傑とは、多人數を臆で指圖する人の事ではなくて、反つて一人でも多くの人に、何等かの奉仕をする人をいふのである。傳説によれば、昔オフェロといふ大力無雙の男があり。或大河の邊に住み、旅人を負ふて河を渡すことを、神への奉仕のつもりで勤めて居ると。或夜一人の童子が來て、『向の岸へ渡して呉れ』といふ。負ふて渡る間に段々目方が重くなつて、殆ど倒れさうな處を、それでも漸く彼岸に渡して。扱『あなたは、どうして、そんなに目方が重いのですか』と尋ねると、『我は萬民の罪を負ふて居る故重いのである。我が名は基督。その基督を負ふた汝は、今からキリストファと改名せよ』と、いひ置きて、姿が見えなくなつたといふてある。其の如く私共も世の人の

罪と苦とを少しでも餘計に負ふて、彼等の救の爲に奉仕せねばならぬ。(三五―三七)  
 ◎こゝに耶蘇の御名にて悪鬼を逐ひ出しながら、弟子達の仲間に加はらぬ者があるのを見て、之を止めたことを、ヨハネが報告に及ぶと。耶蘇は答へて、『それを止むな、我等に逆らはぬ者は我等に附く者なり』と、仰せられた。目下米國だけでも、基督教の分派が百八十六あるといへば、全世界では更に幾百の多きに達するであらう。それが銘々内に闘いで、所謂蝸牛角上の争を續けて居つたのでは果てしがない。私共は寧ろ寛大なる度量を以て他人を容れ、其の所信に敬意を拂ひ。無駄な内輪争をする暇には、少しでも多く、私共の共同の敵なる罪惡に對ふて、軍をしかける様でなくてはならぬ。モーセが其の部下に豫言する者のあることを聞き、『エホバの民の皆豫言者とならんこと、又エホバの靈を之に降し給はんことこそ願はしけれ』(民二二・二九)といふたのは、私共に最も好き雅量の模範を示したものと考へる。(三八―四二)  
 ◎耶蘇は又私共が、よしや手足を切り去り、又は片眼ぬいて棄て、不具になつて生命に入るとも、満足な身軀を以てゲヘナ(地獄)に墮つるには勝るべき由を、教へ給ふ

た。昔監督クラムマーはメリー女皇から迫害を蒙り、心弱くも一度變説の誓約書に記名したのであるが。後之を悔い、飽迄も最初の信仰を守るべき旨告白に及んだ爲に、火刑に處せらるゝことゝなつた。そこで彼は先づ前に變説の誓約書に記名した右の手を火中に投じ、『神よ、此の右の手にて犯し、罪を赦し給へ』と、祈りたる後、快く焚殺されて、殉教者の最後を遂げたといふことである。私共は肉軀上に如何なる缺陷があつても、すくなくとも靈魂の上には、神の子たるに相應しき、うるはしき姿を備へたきものである。(四三―四八)

◎古のローマ人は『太陽と鹽とに越えて必要のものなし』といひ。ブリニーは又『鹽なれば、人の生命は維持せられない』といふて居る。こゝに耶蘇が『鹽は善き物なり』又『汝等心の中に鹽を有て』と仰せられたのは、私共が基督者の獨得の精神と、生活と、事業とを以て、人類世界に無くて叶ふまじき貢献をなすべきことを、教へられたものである。私共は『地の鹽』又『世の光』(マタ五・一三、一四)たる本分を行ふものでなくてはならぬ。(四九、五〇)

(一八) 尙一つを缺ぐ

【マルコ傳福音書第一〇章一—三一】

一 イエス此處をたちて、ユダヤ地方およびヨルダンの彼方に來り給ひしに、群衆もまた御許に集ひたれば、常のごとく教へ給ふ。二 時にバリサイ人ら來り試みて問ふ『人その妻を出すはよきか』三 答へて言ひ給ふ『モーセ汝らに何と命ぜしか』四 彼ら言ふ『モーセは離縁状を書きて出すことを許せり』五 イエス言ひ給ふ『なんぢらの心、無情によりて、此の誠命を録ししなり。六 然れど開闢の初より人を男と女とに造り給へり』一斯る故に人はその父母を離れて、二人のもの一體となるべし』然ればは二人にはあらず、一體なり。九 この故に神の合はせ給ふものは、人これを離すべからず』十 家

に入りて弟子たち復この事を問ふ。十一 イエス言ひ給ふ『おほよそ其の妻を出して、他に娶る者は、その妻に對して姦淫を行ふなり。十二 また妻もし其の夫を棄てて他に嫁がば、姦淫を行ふなり。』十三 イエスの觸り給はんことを望みて人々、幼児ら連れ來りしに、弟子たち禁めたれば、十四 イエスを此を見、いきどほりて言ひたまふ『幼児らの我に來るを許せ、止むな、神の國は斯のごとき者の國なり。十五 誠に汝らに告ぐ、凡そ幼児の如くに神の國をうくる者ならずば、之に入ること能はず』十六 斯て幼児を抱き、手をその上におきて、祝し給へり。十七 イエス途に出て給ひしに、一人はしり來り跪

づきて問ふ『善き師よ、永遠の生命を嗣ぐためには、我なにを爲すべきか』十八 イエス言ひ給ふ『なにゆゑ我を善しと言ふか、神ひさりの他に善き者なし。十九 誠命は汝が知るところなり』殺すなかれ』一姦淫するなかれ』一盜むなかれ』一偽證を立つるなかれ』一欺き取るなかれ』汝の父と母とを敬へ』二十 彼いふ『師よ、われ幼き時より皆これを守れり』二二 イエス彼に目をとめ、愛しみて言ひ給ふ『なんぢ尙ほ一つを缺ぐ、往きて汝の有てる物を、ことごとく賣りて、貧しき者に施せ、さらば財寶を天に得ん。且きたりて我に従へ』二三 この言によりて、彼は憂を催し、悲しみつつ去りぬ、大なる資産をもてる故なり。二四 イエス見回して弟子たちに言ひたまふ『富ある者の神の國に入るは如何に難いかな』二五 弟子たち此の御言に驚く。イエスマた答へて言ひ給ふ『子

たちよ、神の國に入るは、如何に難いかな、一 富める者の神の國に入るよりは、駱駝の針の孔を通るかた、反つて易し』二六 弟子たち甚く驚きて互に言ふ『さらば誰か救はるる事を得ん』二七 イエス彼らに目を注めて言ひたまふ『人には能はねど、神には然らず、夫れ神は凡ての事をなし得るなり』二八 ベテロ、イエスに對ひて『我らは一切をすてて汝に従ひたり』と言ひ出でたれば、二九 イエス言ひ給ふ『まことに汝らに告ぐ、我がため、福音のために、或は家、或は兄弟、あるひは姉妹、或は父、或は母、或は子、或は田畑をすつる者は、三十 誰にても、今の時に百倍を受けぬはなし。即ち家、兄弟、姉妹、母、子、田畑を迫害と共に受け、また後の世にては、永遠の生命を受けぬはなし。三一 然れど多くの先なる者は後に、後なる者は先になるべし』

◎耶蘇は去三年間、活動の舞臺であつたガリラヤを去つて、ユダヤの地方に入り給ふこととなつた。時にバリサイ人が來りて彼を試み、離婚の是非に就いて尋ねると、彼は舊約聖書を引いて、(創一。二七、同二。二四) 一夫一婦が、神の最初からの規定であることとを説き。一旦結婚したる男女は早や二人にはあらず、一體である故、決して離婚すべきものにあらざることを示し給ふた。それであるから私共は、飽迄一夫一婦の倫常を重んじ、又其の主義に違反する一切の惡風陋習を廓清する爲に、健闘せねばならぬ。或人の教へた基督者たる夫婦の心得三箇條に、次の如く云ふてある。第一、祈禱によりて神の指導を求め、主に在りて結婚すべき事。第二、お互に不完全なる人間にて、天の使が一緒になつたのでないことを記憶し、配偶者に過度の期待をせぬ事。第三、聖き家庭が、最も幸福の家庭であることを知りて、互に聖き生活を獎勵すべき事。以上。これは至つて簡單ではあれど、極めて要領を得た忠告であると、考へられる。(一一二)

◎幼兒を連れ來りて、耶蘇に祝福せられんことを求めるものがあると、弟子達がそれを妨げ様とした。すると、耶蘇は『幼兒らの我に來るを許せ、止むな、神の國は斯の如き者の國なり』といふて、彼等を抱き、手を其の上において祝福しておやりなされた。これは私共が特に幼年少年に注意を拂ひ、彼等を主に連れ來らねばならぬことを教ふるものである。古來大に神に用ゐられた人々は、概して少年時代から早く信仰に志した者が多い。モーセは母の乳と共に、眞の信仰をすひ込みたるものにて。サムエルは幼い時から、神の宮に奉仕を始めた人である。バプテスマのヨハネは『母の胎を出づるや聖靈にて滿され』(ルカ一。一五) たとあり。殉教者ポリカルプスは、九歳の時、身を耶蘇に献げた。ジンゼンドルフは幼少の時、其の友人と共に『芥種會』なるものを起し。バックスターと、ジョナサン、エドワードと、フレッチャーとは、何れも七歳にして救を経験した人々である。(二三一―一六)

◎こゝに財産あり身分ある、一壯年紳士があり、耶蘇に來つて『永遠の生命を嗣ぐ爲には、我何を爲すべきか』と尋ねた。それと共に、彼は『殺す勿れ、姦淫する勿れ、盜む勿れ、偽證を立つる勿れ』などいふ律法を、幼い時から皆守つて來たと、告白し

て居るのを見れば、彼が餘程の道徳家であつたことが、想像せられる。耶蘇は彼に目をとめ、愛しみて言ひ給ふた『汝尙一つを缺く、往きて汝の有てる物を賣りて貧しき者に施せ、さらば財寶を天に得ん。かつ來りて我に従へ』と。彼は多分の財産を所有する者であつた故、それを聞いて甚く憂へ、悲みつゝ去つたとある。それであるから、今日の私共も亦、此の壯年紳士と同じく、平生道徳的倫理的の生活を營むからといふて、そんなことに満足するのではなく。是非共進んで、其の財産をも、富をも、身をも、靈魂をも、残らず神の有として聖別し。以來唯御意の儘により、又御意の儘をなすの生活に入らねばならぬ『地とそれに充つるもの、世界と其の中に住む者とは、皆エホバの有なり。』(詩二四。一) 私共は神からの委託物件である財産を、我が有のやうに思違へて、飛んだ横領罪を犯すものとなつてはならぬ。(一七一―一二二)

◎彼が去りて後、耶蘇は『富ある者の神の國に入るは如何に難い哉』『富める者の神の國に入るよりも、駱駝の針の孔を通るかた反つて易し』など、仰せられるのを聞き。弟子達は驚いて、『さらば誰か救はるゝことを得ん』と尋ねると。答へて、『人には能は

ねど神には然らず、夫れ神は凡ての事を爲し得るなり』と宣ふたのである。此の如く金錢はいつの代にも、兎角人の心を惑亂し、其の私慾を増長して、神の御旨に背かしめんとする。パウロが『金を愛するは諸般の悪しき事の根なり』(テモ前六。七)といひ。セネカが『大なる財産は大なる奴隸を意味する』といふたのは、共に間違のない眞理である。けれども大能の神は私共を救ふて、能く貪婪の罪を免れしめ給ふ。私共は金錢の爲に罪を犯さないばかりか、反つて金錢を善用して、神の御軍を助け奉ること出来る。アダム、クラークは『金のかゝらない宗教は本物でない』といふて居る。宜しく死金を活かして使ひ、神の御國の擴張を圖るべきものである。(二三―二七)

◎耶蘇は又仰せられた『我がため、福音の爲に、或は家、或は兄弟、或は姉妹、或は父、或は母、或は子、或は田畑を棄る者は、此の世にては百倍を受け、後の世にては永遠の生命を受けぬはなし』と。或人の説に『ジョージ、ミューラーが一生の間に、能く八百萬圓を與へられ、又能く八千人の孤兒を養育し得たわけは、唯此の耶蘇の我がため』といふ一言を、事實に行ふた結果に外ならない』といふてある。主の名の爲に



苦勞し得るものは、幸福なる哉。(二八―三二)

(一九) 凡ての者の僕

【マルコ傳福音書第一〇章三二―三五】

三二 エルサレムに上る途にて、イエス先だち往き給ひしかば、弟子たち驚き、隨ひ往く者ども懼れたり。イエス再び十二弟子を近づけて、己が身に起らんとする事どもを語り出で給ふ、三三「視よ、我らエルサレムに上る。人の子は祭司長。學者らに付されん。彼ら死に定めて、異邦人に付さん。三四 異邦人は嘲弄し、唾し、鞭ち、遂に殺さん、斯て彼は三日の後に甦へるべし」三五 爰にゼベダイの子ヤコブ、ヨハネ御許に來りて言ふ「師よ、願くば我らが何にても求むる所を爲したまへ」三六 イエス言ひ給ふ「わが汝らに何を爲さんことを望むか」三七 彼ら

言ふ「なんぢの榮光の中にて、一人をその右に、一人をその左に坐せしめ給へ」三八 イエス言ひ給ふ「なんぢら 求むる所を知らず、汝等わが飲む酒杯を飲み、我が受くるバプテスマを受け得るか」三九 彼等いふ「得るなり」イエス言ひ給ふ「なんぢら我が飲む酒杯を飲み、また我が受くるバプテスマを受くべし。四十 然れど我が右左に坐することは、我の與ふべきものならず、ただ備へられたる人こそ與へらるるなれ」四一 十人の弟子これを聞き、ヤコブとヨハネとの事により憤り出でたれば、四二 イエス彼らを呼びて言ひたまふ「異邦人、君と認めらるる

者の、その民を辛どり、大なる者の、民の上に權を執ることは、汝らの知る所なり。四三 然れど汝らの中にては然らず、反つて大ならんと思ふ者は、汝らの役者となり、四四 頭たらんと思ふ者は、凡ての者の僕となるべし。四五 人の子の來れるも、事へらるる爲にあらず、反つて事ふることをなし、又おほくの人の贖償として己が生命を與へん爲なり」四六 斯て彼らエリコに到る。イエスその弟子たち及び大なる群衆と共に、エリコを出でたまふ時、テマイの子バルテマイといふ盲目の乞食、路の傍に坐しをりしが、四七 ナザレのイエスなりと聞き、叫び出して言ふ「ダビデの子イエスよ、我を憐れみたま

まへ」四八 多くの人かれを禁めて黙さしめんとしたれど、増々叫びて「ダビデの子よ、我を憐れみたまへ」四九 イエス立ち止りて「かれを呼べ」と言ひ給へば、人々盲人を呼びて言ふ「心安かれ、起て、なんぢを呼びたまふ」五十 盲人うはぎを脱ぎ捨て、躍り上りて、イエスの許に來りしに、五一 イエス答へて言ひ給ふ「わが 汝に何を爲さんことを望むか」盲人いふ「わが師よ、見えんことなり」五二 イエス彼に「ゆけ、汝の信仰なんぢを救へり」と言ひ給へば、直ちに見ることを得、イエスに従ひて途を往けり。

◎ 耶蘇は此度の上京が、一步一步、死地に近づくものであることを承知の上にて、堅い決心の歩を進め、弟子達の先に立つて行き給へば、彼等は驚き懼れつゝ之に従ふた。こゝに於て彼は三たび、其の受難の日の差迫れることを説き、「視よ、我等エルサ

レムに上る。人の子は祭司長、學者等に付されん。彼等死に定めて異邦人に付さん云云』と仰せられたのである。私共はこゝに今一度、耶蘇の道徳的勇氣の模範を見出し得るではないか。昔二宮尊徳は『善人は兎角臆病なるものなり』といふたが、そんな臆病で、引込思案の善人に、どうして救世済民の大業が勤まるものであらう。眞正の善人は、善を以て悪と戦ふものでなくてはならぬ。若し必要ならば、神と世の救との爲に、潔く一身を犠牲にし得るほど、勇取なるものでなくてはならぬ。マジニの言に、『神は勇者に與す。』又アルガーの言に、『勇氣は人をして彼以上の者とならしめる。即ち彼十勇氣の人とならしめる』などもあれば。私共は如何にもして、勇敢なる神の戰士、又奮闘的の善人たらんことを心がけねばならぬ。(三二―三四)

◎ゼベダイの子なるヤコブとヨハネとは、耶蘇に來り、他日彼が志を得給はん時、其の右と左とに坐する榮譽を與へられんことを願ひ出た。彼等は今に耶蘇が、此の世の王者とでもなり給ふものゝ如く、取違へて居つたらしい。耶蘇は答へて、『汝等は求むる所を知らず』といふて、之を却け給ふた。或人の言に『神の我等に對する愛は、

しばしば其の聽き給はざりし祈禱の中に見出さるゝ』とあり。私共が往々神に對して、愚にもつかぬ、身勝手な願などする時『汝等は求むる所を知らず』といふて、之を拒絶し給ふ處に、反つて神の大なる御慈愛が見えるといふの意味である。耶蘇は又兩人に、『汝等わが飲む杯を飲み、又わが受くるバプテスマを受け得るか』と反問し給ふた。これは彼等が耶蘇と共に、苦勞し得るかといふの御尋である。それ故私共も、耶蘇の光榮に與らんよりは、むしろ其の苦難に與るの覺悟が、もつとも大事なことを知らねばならぬ。(三五―四〇)

◎十人の弟子が、ヤコブとヨハネとを憤ほつて居るのを見て、耶蘇は彼等に告げ給ふた。『異邦人の君と認めらるゝ者の其の民を宰どり、大なる者の民の上に權を執ること汝等の知る所なり。されど汝等の中には然らず。反つて大ならんと思ふ者は汝等の役者となり、頭たらんと思ふ者は凡ての者の僕となるべし』と。斯て後、彼は此等の教訓を其の身の上に當て箴め、『人の子の來れるも事へらるゝ爲にあらず、反つて事ふることをなし。又多くの人の贖償として己が生命を與へん爲なり』と、宣ふたので

ある。それ故神の御前に貴きは、事へらるゝ者ではなくて、事ふる者である。取る者ではなくて與ふる者である。又多くの人に手敷をかける者ではなくて、反つて凡ての者の僕となり、一人でも多くの人の爲に、苦勞し得る人物であることが解る。舊い教訓畫に、一頭の牛を犁と祭壇との間に立たせ、其の下に『奉仕になりとも、犠牲になりとも』と題したのがある。つまり生きて犁を曳いて奉仕するとも、死して祭壇に犠牲として献げらるゝとも、唯御意の儘にといふの寓意であらう。しかも唯此の心ありてこそ、私共は眞に『凡ての者の僕』たることを得るのである。(四一―四下)

◎バルテマイが其の目を開かれた記事は、亦多くの暗示を與ふる物語である。第一、彼は耶蘇が其處を通り給ふ時、機會を失はず、其の御助を求めた。私共は機會を失はず、神の恵と力とを求めねばならぬ。第二、彼は周圍の人々の妨害を排して、耶蘇に呼はつた。其の如く私共も、他人の思惑など頓着せず、神に近づく決心が大事である。第三、彼は愈々耶蘇が自分を召し給ふと聞いた時、上着を脱ぎ棄て、踊り上つて御前に出た。其の通私共も、惜氣なく罪惡の舊き衣を脱ぎ棄て、耶蘇に往か

ねばならぬ。『汝等は既に舊き人と其の行爲とを脱ぎて、新しき人を着たればなり』(コロ三。九) 又『汝等主耶蘇基督を衣よ。』(ロマ。一三。一四)などいふやうな御教もあるではないか。(四六一―五二)

◎私共は又バルテマイが肉の眼を開かれたる如く、銘々耶蘇によりて、其の心の眼を開かれねばならぬ。心の眼が開けた人は、これ迄にない程明かに、己が罪を見るものである。豫言者イザヤが天の使の飛び翔りつゝ、『聖なる哉、聖なる哉』と歌ふのを聞いて、『禍なる哉我亡びん、我は穢れたる唇の民の中に住みて、穢れたる唇の者なるに云々』(イザ六。五)と、いふたのは、其れである。心の眼の開けた人は、神を見るものである。『幸福なる哉、心の清き者。其の人は神を見ん。』(マタ五。八)と、あるのはそれである。心の眼の開けた人は、罪人の悲惨な状態が、見て居られなくなる。昔の人が『人汝の法を守らざるによりて、我が眼の涙河の如く流る。』(詩一一九。一三六)といふた通である。心の眼の開けた人は神の御保護を見る。それ故エリシヤは幻に、天の使の群が、我を取巻いて守るのを見たといふではないか。(列上六。一八) 心の眼の開

けた人は又永遠の光榮を見る。それ故ステパノは石にて撃れつゝ、神の右に立てる人の子の御姿を仰ぎ見たといふのである。(使七。五六) 神が私共の心の眼を開き給はんことを祈らねばならぬ。(四六一五二)

(110) ホサナ、ホサナ

【マルコ傳福音書第二章一一八】

一 彼らエルサレムに近づき、オリア山の麓なるベテサケ及びベタニヤに到りし時、イエス二人の弟子を遣さんとして言ひ給ふ、二『むかひの村にゆけ、其處に入らば、頓て人の未だ乗りたるこなき驢馬の子の繋ぎあるを見ん、それを解きて牽き來れ。三誰かもし汝らに「なにゆゑ然するか」と言はば「主の用なり、彼ただちに返さん」といへ』四 弟子たち往きて、門の外に驢馬の子の繋ぎあるを見て解きたれば、五其處に立つ人々のうちの或者『なんぢら驢馬の子を解きて何とするか』と言ふ。六 弟子たちイエスの告げ給ひし如く言ひしに、彼ら許せり。七 斯て弟子たち驢馬の子をイエスの許に牽ききたり、己が衣をその上に置きたれば、イエス之に乗り給ふ。八 多くの人は己が衣を、或人は野より伐り取りたる樹の枝を途に敷く。九 且前に往き後に從ふ者共呼はりて言ふ、『ホサナ、讃むべきかな、主の御名

開けり。

によりて來る者』十 讃むべきかな、今し來る我らの父ダビデの國。いと高き處にてホサナ』十一 遂にエルサレムに到りて宮に入り、凡ての物を見回し、時はや暮に及びたれば、十二 弟子と共にベタニヤに出で往きたまふ。  
十二 あくさ日かれらベタニヤより出で來りし時、イエス飢ゑ給ふ。十三 遂に葉ある無花果の樹を見て、果をや得んと其のもこに到り給ひしに、葉のほかは何をも見出し給はず、是は無花果の時ならぬに因る。  
十四 イエスその樹に對ひて言ひたまふ『今より後いつまでも、人なんぢの果を食はざれ』弟子たち之を恐れしなり。

◎受難週の第一日、即ち耶蘇が地上に過し給ふべき最後の日曜日の事である。彼はオリブ山麓のベテバゲ、及びベタニヤに到りし時、二人の弟子を向の村に遣し、『主の用なり』といふて、そこに繋いである驢馬の子を牽き來らせ。それに乗つてエルサレムに入り給ふことゝなつた。マシユ一、ヘンリーの言に、『彼は借りた舟にてガリラ

ヤの湖水を渡り、借りた驢馬にてエルサレムに入り、死んでは借りた墓に葬られ給ふた』といふてある。『汝等是我等の主耶穌基督の恩恵を知る。即ち富める者にて在したれど、汝等の爲に貧しき者となり給へり。これ汝等が彼の貧窮によりて富める者とならん爲なり。』(コリ後八。九)とは其の謂ではないか。とはいへ、此うして迄、世の救の爲に御苦勞下さる耶穌に、驢馬の子を提供して、多少でも御便宜を圖ることの出来た人は、どういふ仕合者であつたらうか。私共も亦主の御用の爲とならば、何物をも惜まず、何時にても、之を献げ得るやうでありたい(二一六)

◎彼が驢馬の子に乗つて都に入り給ふ時、多くの人々は、己が衣や又は樹の枝など途にしき、彼をして其の上を過ぎしめ、かつ前に行き後に従ふて『ホサナ、ホサナ』と呼ばつた。これは『萬歳、萬歳』といふやうな語である。其の癡數日の後には、同じ彼等の口から、『十字架につけよ、十字架につけよ』と罵らるゝに至つたかと思へば、眞に人情反覆の甚だしきに驚かざるを得ない。ナポレオンは埃伊兩國に打勝つて歸つた時、佛國人が狂喜して之を迎へる状を、冷眼に見つゝ、『他日私が若し斷頭臺に擧げら

るゝとがあつたなら、彼等は亦此の通喝采するであらう』といふた。彼は冷熱定りなき世間の人情を知つて居つた故、斯は言ふたのであらう。聖書の他の部分に『耶穌己を彼等に任せ給はざりき。それは凡ての人を知り、又人の衷にある事を知り給へば、人に就いて證する者を要せざる故なり』(ヨハ二。二四、二五)とあり。如何にも味ある言ではないか。(七一)

◎其の翌日、即ち月曜日にベタニヤより出で來る時、耶穌は飢ゑ給ふたとある。嘗て僅のパンと魚とを以て、數千人を養ひ給ふた彼が、今は己が食物に事を缺いで、飢ゑ給ふたといふのは、如何に彼が他人に厚うして、自ら奉ずること薄き、克己の生活をなし給ふたかを示すものである。その事に就いて、マシュー、ヘンリーは言ふた、『基督の學校に於ける、第一の課程は克己である』と。スケツプアは又言ふた、『克己は耶穌基督が、特に身を以て模範を示し給ふた徳である』と。それ故彼の僕たる私共は、亦平生克己の徳を身に行はんことを心がけねばならぬ。『人若し我に従ひ來らんとせば、己をすて、日々己が十字架を負ひて我に従へ。』(ルカ九。二三)とあるではないか。

◎こゝに葉のみ茂りて、實のない無花果の樹があり、耶蘇が其の下に来て之を誣ひ給ふと、忽ちに枯れたとある。これは一面には、當時ユダヤの宗教が形式や、議論の枝葉に墮して、其の中に生命がなく、随つて何等の果實をも結ばない状態を、無花果に寓して戒められたものと見るべく。他の一面には、後世の基督者が亦、葉のみ茂りて實のない連中にならぬ様にと、之を警戒せられたものとも受取れる。それにつけても私共は、『悔改に相應しき果』（ルカ三。八）を結ばねばならぬ。又『御霊の果』（ガラ五。二二）即ち愛、喜悅、平和、寛容、仁慈、善良、忠信、柔和、節制等の諸徳を具備する、聖徒となるべき必要がある。（一三三、一四）

◎耶蘇はエルサレムの宮に入り、其の庭にて賣買する者を逐ひ出し、兩替する者の腰掛を倒し、又器物を持ちて宮の内を過ぐることを免し給はず。且教へて言ひ給ふた、『我が父の家は諸々の國人の祈の家と稱へらるべし』と、録されたるに非ずや。（イザ五六。七）然るに汝等は之を「強盜の巢」となせりと。人々は胸に疚しい所があるから、

氣後がして誰一人、彼に抵抗ひ得るものもなく。反つて何れも彼の尋常ならぬ威嚴に打れ、そこらに散つた金銀什器を拾ひ收めつゝ、右往左往に逃げ惑ふた様子である。『良心は人をして臆病ならしめる』とは、之をいふたのではないか。しかし乍ら復考へて見れば、私共の肉體は『神の宮』だと教へてある。『汝等知らずや、汝等は神の宮にして、神の御靈汝等の中に住み給ふを。』（コリ前三。一六）などゝあるのは、其れである。私共は果して、其の神の宮なる肉體を穢し、之を強盜の巢として居る如きことはないか。果して奇麗に胸の奥を潔め、そこに聖靈を宿し奉つて居るであらうか。アウグスチヌスの言に『靈魂は肉體の生命である如く、神は靈魂の生命である。靈魂が肉體を離るれば死ぬる如く、神が靈魂を去り給へば亡びるのである』と、いふてある。それ故私共は、何時も其の肉體てふ神の宮を聖別し、そこに神の御靈を宿らせ奉つらねばならぬ。（一五一―一八）

(二二) 信仰の祈禱

【マルコ傳福音書第一章一九—三三】

十九 夕ゆふべになる毎ごとに、イエス弟子でしたちと共ともに都みやこに出いでて  
ゆき給たまふ。

二十 彼かれら朝あさ早く路みちをすぎしに、無花果いちじくの樹きの根ねより  
枯かれたるを見る。三一 ペテロ思おもひ出して、イエスに  
言いふ「ラビ見み給たまへ、呪のろひ給たまひし無花果いちじくの樹きは枯かれた  
り」三二 イエス答こたへて言いひ給たまふ『神かみを信まことぜよ。三三  
誠まことに汝なんぢらに告つぐ、人もし此この山やまに「移うつりて海うみに  
入いれ」と言いふとも、其その言ことふところ必かならず成なるべしと  
信しんじて、心こころに疑うたがはずば、その如ごとく成なるべし。三四  
この故ゆゑに汝なんぢらに告つぐ、凡すべて祈いのりて願ねがふ事は、すでに  
得えたりと信しんぜよ、然さらば得えべし。三五 また立ちて祈いの  
るとき、人ひとを怨うらむる事ことあらば免ゆるせ、これは天てんに在あす

〔二六〕 汝なんぢらの父ちちの、汝なんぢらの過あやまち失ゆるを免ゆるし給たまはん爲ためなり』

二七 かれら又またエルサレムエルサレムに到いたる。イエス宮みやの内うちを歩ある  
み給たまふとき、祭さい司し長ちやう・學がく者しや・長ちやう老らうたち御みもと許もとに來きたり  
て、二八 『何なにの權けん威ゐをもて此これ等の事ことをなすか、誰たが此  
等の事ことを爲なすべき權けん威ゐを授さづけしか』と云いふ。二九 イ  
エス言いひ給たまふ『われ一言ひとこと、なんぢらに問とはん、答こた  
へよ、然さらば我われも何なにの權けん威ゐをもて、此これ等の事ことを爲なすか  
を告つげん。三十 ヨハネのバプテスマバプテスマは、天てんよりか、  
人ひとよりか、我われに答こたへよ』三一 彼かれら互たがひに論ろんじて言いふ  
『もし天てんよりと言いはば、何なに故ゆゑかれを信しんぜざりし』と云い  
はん。三二 然されど人ひとよりと言いはんか……』彼かれら群ぐん衆しゆ

を恐おそれたり、人ひとみなヨハネを實じつに豫よげん言げん者しやと認まめたれ  
ばなり。三三 遂つひにイエスに答こたへて『知しらば』と云いふ。

イエス言いひ給たまふ『われも何なにの權けん威ゐをもて此これ等の事ことを  
爲なすか、汝なんぢらに告つげじ』

◎ パットラーの詩うたに『夜よるは肉體にくたいと精神せいしんとを休やすむる爲ために、人ひとに與あたへられたる安息日やすみであ  
る』といふ句くがあり。これは六日むいかの勞働らうどうの後のちに、一日いちにちの安息日やすみが來きたる如ごとく、一日いちにちの次つぎ  
に、一夜いよの休息きゆうそくを與あたへられるといふの意味いみであらう。耶蘇イエスは最後さいごの上京じやうきやう中ちゆう、夕方ゆふかたに  
はいつも、弟子達でしと共ともに都みやこを出いでてゆき給たまふた。多分たぶんペタニヤペタニヤのマルタマルタ、マリヤマリヤ、ラザ  
ロラザロの三人さんにん同胞どうぱうの家いへに宿やどり、(ヨハ一・一) 疲つかれた心身しんしんを息やすめ給たまふたのであらう。詩篇しへんに  
『我われ臥ふして寝いね、又また目めさめたり。エホバ我われを支さへ給たまへばなり。』(詩三〇・五) 又『エホバ其そ  
の愛いしみ給たまふ者に寝いねをあたへ給たまふ。』(詩一二七・二) など、あり。眞まことに心地好こころよき睡眠すいみんは、  
唯ただ潔きよき良心りやうしんを有いうする者に對たいして、神かみより賜たまはる所ところの恩賞おんしょうである。(二九)  
◎ 火曜日くわつらびの早朝さうてう、弟子達でしは途みち中ちゆうにて、前日ぜんじつ耶蘇イエスに誼のろはれた無花果いちじくの、今日けふは早はやや根ねか  
ら枯かれて居をるのを見みて驚おどろいた。耶蘇イエスはそれを機き會かいに彼等かれらを教おしへて、『神かみを信しんぜよ。誠まことに  
汝等なんぢらに告つぐ、人ひと若わかし此この山やまに移うつりて海うみに入いれといふとも、其その言ことふ所ところは必かならず成なるべし

と信じて心に疑はずば、其の如くなるべし」といひ、信仰の力の如何に偉大なるかを説示し給ふた。昔からノアも、アブラハムも、モーセも、ダビデも、ダニエルも、凡て大に神に用ゐられた人々は、皆大なる信仰の人であつた。ヘブル書第十一章を讀む人は、誰も此の明白なる事實を認めざるを得ない。耶蘇が他の場合に「我を信する者は、我がなす業をなさん、且之よりも大なる業をなすべし。」(ヨハ二四。一二)と仰せられたなども、思ひ合さるゝことである。(二〇—二三)

◎彼は尙續いて、信仰によれる祈禱の大切なることを示し、「凡て祈りて願ふ事は、すでに得たりと信せよ、さらば得べし」と、宣ふたのである。同じ道理に就いてツランバルの言に、「信仰なければ祈禱なく、祈禱なければ信仰がない。しかし乍ら信仰と祈禱と相伴ふ時には、能く心靈上の賜物と恩恵とを償ひ得る」とあり。サルターの言には又「祈禱の弓に約束の箭をつがへ、信仰の手を以て放てば、之を天まで達せしむることが出来る」と、いふてある。それ故マルチン、ルーテルは、或時親友メランヒトンの大患に際し、其の枕頭にて約一時間ばかり、信仰を籠めて熱心なる祈禱をささ

げ、歸りて後其の妻に對ひ、「神は必ず我が祈禱を應へ、兄弟メランヒトンを今一度達者になし給ふに相違ない」といふたが。果して其の言の如く、その時から彼の病は不思議に快方にむかひ、やがて起ち上つてルーテルと共に、ひきつゞき宗教改革の事業に盡瘁し、其の貢献する所大なるものがあつたと、傳へられて居る。(二四)

◎同時に必要なるは、他人の罪を赦すことである。又立ちて祈る時、人を怨むることあらば免せ。これは天に在す汝等の父の、汝等の過失を免し給はん爲なり」とは、其の事を教へられたのである。中世紀の頃、或大名が隣國の大名を暗討にせんとする計畫があり。其の事を先づ附添の説教者に相談すると、彼は大名を伴ふて共に禮拜堂にゆき、跪いて一緒に「主の祈」を唱へんことを求めた。段々唱へて、「我等に負債ある者を、我等の免したる如く、我等の負債をも免し給へ」(マタ六。一二)といふ一節に至り、大名は急に口を噤んだ。そこで説教者は、「なぜ續いて唱へませぬか」と問ふと。答へて、「それを唱へては暗討が出来なくなる」といふ。「しかしそれを唱へられぬやうでは、貴下の負債が神から免されませぬ」といはれて、大名は恐れ入り。乃ち其の祈を



唱へ、隣國の大名をだまし討にする計畫は、之を思ひ止つたといふ話がある。(二五)

◎都に入りたる後、耶蘇が宮の内を歩いて居給ふと、そこへ祭司長、學者、長老等が来て、彼に『何の權威を以て此等の行動をなすか』と尋ねた。そこで耶蘇は彼等に『ヨハネのバプテスマは天よりか、人よりか』と反問し。之によりて彼の權威が亦ヨハネのと同じく、神より與へられたものにて、人より授けられたものでないことを、言外に告示し給ふた。それに就いて思ひ出すのは、英國王ヘンリー八世の時、ラチマーといふ宗教家が、其の説教中、正面から王の罪を戒めて、悔改を促がした故、王は機嫌を損じ、次の日曜日に今一度説教し直すべきことを命じた。斯て愈々其の當日になると、ラチマーは王の前に立ち、開口一番『さてラチマーよ、汝は今日威權赫々たる王者の前に立つことを記憶し、失態のない様に物を言へ。それと同時に、汝は又王の王、主の主なる神の前に在つて、御旨を語るものであることを記憶し、大膽率直に眞理に語れ』と。斯くいひ終りて後、彼は前の日曜日よりも一層猛烈に、王の悔改を促したものであるから。流石のヘンリー八世も全く恐れ入つて、頭が擧らなかつた

といふことがある。即ちラチマーは人よりにあらず、天よりの權威によりて、勇敢に其の使命を行ふた人物であることが、知られるではないか。(二七一三三)

### (二二) 葡萄園の主

#### 【マルコ傳福音書第二章一七】

一 イエス響をもて、彼らに語り出て給ふある人、葡萄園を造り、籬を環らし、酒槽の穴を掘り、櫓をたて、農夫どもに貸して、遠く旅立せり。二 時いたりて農夫より葡萄園の所得を受取らんとて、僕をその許に遣ししに、三 彼ら之を執へて打ちたたき、空手にて歸らしめたり。四 又他の僕を遣ししに、その首に傷つけ、かつ辱しめたり。五 また他の者を遣ししに、之を殺したり。又ほかの多くの僕をも或は打ち、或は殺したり。なほ一人あり、即ち其

の愛しむ子なり、わが子は敬ふならんと言ひて、最後に之を遣ししに、七かの農夫ども互に言ふ、これは世嗣なり、いざ之を殺さん、然らばその嗣業は我らのものとなるべし。八乃ち執へて之を殺し、葡萄園の外に投げ棄てたり。九 然らば葡萄園の主、なを爲さんか、來りて農夫どもを亡ぼし、葡萄園を他の者どもに與ふべし。十 汝ら聖書に、一遺家者らの棄てたる石は、これぞ隅の首石となれる。七一 これ主によりて成れるにて、我らの目には奇しきなり

とある句をすら讀まぬか」十二ここに彼等イエスを執へんと思ひたれど、群衆を恐れたり。この聲の已ら指して言ひ給へるを悟りしに因る。遂にイエスを離れて去り往けり。

十三かくて彼らイエスの言尾をとらへて陥入れん爲に、パリサイ人とヘロデ黨との中より、數人を御許に遣す。十四その者ども來りて言ふ「師よ、我らは知る、汝は眞にして、誰をも憚りたまふ事なし、人の外貌を見ず、眞をもて神の道を教へ給へばなり。我ら貢をカイザルに納むるは、宜きか、惡しきか、納めんか、納めざらんか」十五イエス其の詐偽なるを知りて「なんぞ我を試むるか、デナリを持ち來りて我に見せよ」と言ひ給へば、十六彼ら持ち來る。イエス言ひ給「これは誰の像、たれの號なるか」『カイザルのなり』と答ふ。十七イエス言「給ふ『カイザルの物はカイザルに、神の物は神に納めよ』彼らイエスに就きて甚だ怪しめり。

十八また復活なしと云ふサドカイ人ら、イエスに來り問ひて言ふ、十九「師よ、モーセは、人の兄弟も子なく妻を遺して死なば、その兄弟、かれの妻を娶りて、兄弟のために嗣子を擧ぐべしと、我らに書き遺したり。二十爰に七人の兄弟ありて兄、妻を娶り、嗣なくして死に、二一第二の者その妻を娶り、また嗣子なくして死に、第三の者もまた然なし、二二七人とも嗣子なくして死に、終には其の女も死にたり。二三復活のとき彼らみな甦へらん、この女は誰の妻たるべきか、七人これを妻としたればなり」二四イエス言ひ給ふ「なんぢらの誤れるは、聖書をも、神の能力をも、知らぬ故ならずや。二五人、死人の中より甦へる時は、娶らず、嫁がず、天に在る御使たちの如くなるなり、二六死にたる者の甦へる事に就きては、モーセの書の中なる柴の條に、神モーセに「われはアブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神なり」と告げ給ひし事あるを、

未だ讀まぬか。二七神は死にたる者の神にあらず、

生ける者の神なり。なんぢら大に誤れり」

◎此の世は神の葡萄園にて、人は其の農夫である。それ故私共は、葡萄園の主人なる神に對して義務を負ふことを知り、日頃から忠實に之を履行して居らねばならぬ。ネルソン提督は彼の艦隊に對し、「英國は今日各人が其の職分を行ふことを期待す」といふ、有名な記號を發したことがある。それと同じやうに、神は私共各人が其の職分を行ふことを期待し給ふ。或人がダニエル、ウエブスターに對ひ、貴君の一生を支配し、且最も多く其の成功を助けた思想は、何であつたか」と尋ねると。彼は答へて「それは神に對する、個人的責任の念であつた」と、いふたさうである。私共も亦銘々、神の前に責任を知るの人となりたきものである。(一)

◎葡萄園の主人は、幾度か其の僕等を農夫の許に遣したるに、彼等は寄つてたかつて之を毆打し、其の或者は辱めて後殺した。最後に其の愛子を遣すと、「彼は世嗣であるから、彼さへ殺せば葡萄園は最早、我等の所有に歸するであらう」といふて、亦之を殺害したとある。これは神が昔から、幾多の聖人賢人を起して、世を警め、民を誨

へさせ給ふたにも拘らず、彼等は一尙之をうけつけず。最後に其の獨子を遣し給ふた時には、之を殺害するといふことを、譬喩を以て豫め告げ給ふたのである。けれども『造家者等の棄てたる石は、反つて隅の首石となる』(詩一八。二二)とある通。耶蘇は當時、其の道の人々から棄てられながら、反つて其の以來、億兆の民の救主となり給ふたのである。(二一一)

◎パリサイ人とヘロデ黨との中から數人の者が來り、『我等貢をカイザルに納むるは宜きか、惡しきか』といふて耶蘇を試みた。これは當時、ユダヤはロマの屬國となつて居つた故。耶蘇が若し貢をカイザルに納めよと言はゞ、彼は愛國心なきものとして、パリサイ人が攻撃すべく。若し又之を納むるに及ばずといはゞ、彼を反逆者として、ヘロデ黨が告發せんとする。何れにしても、極めて陰險なる計略であつた。此の如く卑怯未練なる基督教の反對者は、いつの代にも基督者を誣ひ、之を賣國奴とか、不忠不臣の輩とかいふことにして、陥れやうとする。しかし乍ら眞の基督者は、最も眞實なる愛國者である。神を敬ふて道を行ふ人民位、國家の柱石となるものは、他にないの

である。なせかといふに、『義は國を高くし、罪は民を辱しむ』(箴一四。三四)る故である。(一一三、一四)

◎耶蘇は餘計の辯論を避けて、唯貢に用ゆるデナリ(貨幣の名)一つを持來らせ、それにカイザルの像を鑄てあるのを示しつゝ、極めて簡單明瞭に『カイザルの物はカイザルに神の物は神に納めよ』とのみ、答へ給ふた。これは國民としての義務は國家に盡し、人としての責任は神に盡せとの御教訓である。更に進んで言へば、カイザルの像を帶ぶる貨幣は、之をカイザルに納むる如く。神の御姿を宿せる人の心は、之を神に献げよといふの、意味にも取れる。箴言に『我が子よ、汝の心を我に與へよ』(箴二三。二六)とあり。私共は心をも、身をも、神に献げて、只管其の奉仕を勵むものとならねばならぬ。(一一五―一七)

◎復活を信ぜざるサドカイ人が來りて、此の世で順ぐり、兄弟七人の妻となつた婦人は、あの世では誰の妻となるべきかと、いふ様なお尋をした。耶蘇は答へて、天國は愛の支配する、靈の王國であるから、そこには娶嫁などいふことなく、何れも天に在

る御使達の如き生活をするのであると、仰せられた。後にパウロが『死人の復活も亦斯の如し。朽つる物にて播かれ、朽ちぬ物に甦へらせられ、卑しき物にて播かれ、光榮ある物に甦へらせられ、弱き物にて播かれ、強き物に甦へらせられ、血氣の體にて播かれ、靈の體に甦へらせられん。』(コリ前一五。四二―四四)といふたのも、思ひ合されて、貴きことの至である。(一八一―二五)

◎耶蘇は更に舊約聖書に『我はアブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神なり』(出三。六)と、あるのを引いて。これは神が曾てアブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神で在し給ふたといふのでなく、今現に彼等の神にて在すといふの意味である。『神は死にたる者の神にあらず、生ける者の神也』と説いて、大に靈魂不滅の眞理を高調し給ふた。傳へ言ふ、ソクラテスの毒杯を仰いで死なんとするや、彼は傍人に告げていふた。『君等は此の憫れな肉體を、ソクラテスと呼んではならぬ。ソクラテスは間もなく君等と別れて、祝福せられた者の喜に入るであらう。君等は後にて葬儀を行ふに當り、彼を墓に葬むるもの、如く、悲み歎いてはならぬ。宜しく氣を勵まして言へ、こゝに葬むる

ものは、唯彼の遺骸のみである』と。『彼も亦深く靈魂の不滅を信じ、永遠の希望を抱いて死んだものと、見えるのである。(二六、二七)

### (二三) 大なる誠命

#### 【マルコ傳福音書第二章二八一―四四】

二八 學者の一人、かれらの論じをるを聞き、イエスの善く答へ給へるを知り、進み出でて問ふ『すべての誠命のうち、何か第一なる』二九 イエス答へたまふ『第一は是なり』イスラエルも聽け、主なる我らの神は唯一の主なり。三十 なんぢ心を盡し、精神を盡し、思を盡し、力を盡して、主なる汝の神を愛すべし』三一 第二は是なり『おのれの如く汝の隣人を愛すべし』此の二つより大なる誠命はなし』三二 學者いふ『善きかな師よ』神は唯一にして他に神なし、と言ひ給へるは眞なり。三三 『こころを盡し、智慧を盡し、力を盡して神を愛し、また己のごとく隣人を愛する』は、もろもろの燔祭及び犠牲に勝るなり』三四 イエスその聽く答へしを見て言ひ給ふ『なんぢ神の國に遠からず』此の後たれも敢てイエスに問ふ者なかりき。三五 イエス宮にて教ふるとき、答へて言ひ給ふ『なにゆゑ學者らはキリストをダビデの子と言ふか。』三六 ダビデ聖靈に感じて自らいへり、主わが主に言ひ給ふ、なんぢの敵を汝の足の下に置く

までは、我が右に坐せよ」と。三七 ダビデ自ら彼を  
主と言ふ、されば争てその子ならんや」  
大なる群衆は喜びてイエスに聽きたり。三八 イ  
エスその教のうちに言ひたまふ「學者らに心せよ、  
彼らは長き衣を着て歩むこと、市場にての敬禮、三五  
會堂の上座、饗宴の上席を好み、四十 また寡婦  
らの家を呑み、外見をつくりて長き祈をなす。その  
受くる審判は更に厳しからん」  
四一 イエス賽錢函に對ひて坐し、群衆の錢を賽

一二六  
錢函に投げ入るを見給ふ。富める多くの者は、多  
く投げ入れしが、四二 一人の貧しき寡婦きたりて、  
レプタ二つを投げ入れたり、即ち五厘ほどなり。四三  
イエス弟子たちを呼び寄せて言ひ給ふ「まことに汝  
らに告ぐ、この貧しき寡婦は、賽錢函に投げ入る  
る凡ての人よりも多く投げ入れたり、四四 凡ての者  
は、その豊なる内よりなげ入れ、この寡婦は其の乏  
しき中より、凡ての所有、即ち己が生命の料なこと  
ごさく投げ入れたればなり」

◎或學者が來りて「凡ての誠命の中何か第一なる」と尋ねると。耶蘇は答へて、  
「第一はこれなり、汝心を盡し、精神を盡し、思を盡し、力を盡して、主なる汝の  
神を愛すべし。」(申六、四、五)と仰せられた。之を今日の語で言へば、汝が智、情、意  
の全部を盡して、神を愛すべしとの御旨に外ならない。ブリス大將(ウィリアム)は或時、  
此の神を愛する生活を説明して、次の如く言ふたことがある。(一)人は其の愛する者

のことを且暮考へるもの故、私共も始終神の事を思ふて居らねばならぬ。(二)人は  
其の愛する者の爲に苦勞することを厭はない。それ故私共も神の爲に苦勞を甘んぜ  
ねばならぬ。(三)人は其の愛する者を喜ばさんことを欲する。それ故私共も神を喜ば  
せ、之に御満足を與ふるの生活を營むべく。(四)人は其の愛する者と打ち語らうことを  
好む。それ故私共も神との交通を楽しまねばならぬと。如何にも適切なる、實際的  
の教訓であると思ふ。(二八—三〇)

◎耶蘇は尙續いて、今一つの大きな誠命を説き、「第二はこれなり、  
愛すべし。」(利一九、一八)と仰せられた。然らば隣とは何かといふ  
ゴメリの詩に、次の如き句がある。「汝の隣とは、汝が之を援助し、祝福するの力を  
有する者ぞ、其の人なる。汝の慰藉の手を彼の痛める頭、熱き額の上におけ。汝の隣  
とは、貧に窶れて眼かすみ、飢ゑて門から門へとよるめく者ぞ、其の人なる。汝は往  
きて彼を救護せよ。何時にても、汝より天惠薄き人に出あひたる時は、記憶せよ。それこ  
そ正しく、汝の隣、汝の兄弟、又は汝の子なることを」と。往いて己の如く、隣を愛

することを得せしめよ。(三一)

◎耶蘇は其の學者の、比較的事理を辨へたるを見て、『汝神の國より遠からず』と仰せられた。彼が今一步で、神の國に入り得べき境界線に立つて居つたことが、想像せられるではないか。しかし乍らジョン、パンヤンが言ふた様に、『天國の門前にも尙地獄に通ふ路がある。』古語に『九仞の功、一簣を虧ぐ』といふこともあれば、人は其の今一步といふ處に、油斷してはならぬ。『バプテスマのヨハネの時より今に至る迄、天國は烈しく攻めらる。烈しく攻むる者は之を奪ふ。』(マター二・一三) 私共は勇猛精進神の國を攻め奪ふ覺悟が、何より大事である。(三一―三四)

◎耶蘇は宮にて人々を教ふる時、彼自らの神性に論及し。兎角學者等は世に来るべき救主の事を、唯ダビデの裔より生るべき、尋常一樣の人間のやうに説けど。ダビデが聖靈に感じていふた所にも、『主(神)わが主(基督)に言ひ給ふ、我汝の敵を汝の足の下に置くまでは、我が右に坐せよ』(詩一〇・一)とあり。ダビデ自身が既に之を主と呼ぶからには、彼はもとより普通の意味にて、ダビデの子と見らるべきものでない。彼

は神の子である。即ち神が人の姿をとりて世に現れたものであると、説示し給ふたのである。斯る救主を世に賜ひたる、神の御名を讃め奉れ。(三五―三七)

◎孔子は『紫の朱を奪ふを惡む』といふた。つまり姦人が正人君子を装ふことを惡むといふの意である。耶蘇は宗教的偽善者の、殊に最も厭ふべきことを教へて、『學者等に心せよ、彼等は長き衣を着て歩むこと、市場にての敬禮、會堂の上座、饗宴の上座を好み、又寡婦等の家を呑み、外見をつくりて長き祈をなす。其の受くる審判は更に嚴しからん』と仰せられた。げに『偽善者は天の使の聲を有つた蛇である。』(ボロツク) 此の世に偽善にまざる罪惡はないのである。(三七―四〇)

◎古語に『長者の萬燈より貧女の一燈』といふことがある。耶蘇は賽錢函の側に立ちて、一人の貧しき寡婦が、レプタ二つ(約金五厘)を其の中に投ずるのを見、弟子達に宣ふた『この貧しき寡婦は、賽錢函に投げ入るゝ凡ての人よりも、多く投げ入れたる。凡ての者は其の豊なる内より投げ入れ、この寡婦は其の乏しき中より、凡ての所有、即ち己が生命の料を悉く投げ入れたればなり』と。或金持が傳道資金の内へ、僅か

五十錢ばかりを出し、『これは私のレプタです』といふと。之を取扱ふ者が答へて、『昔レプタを献げた寡婦は、其の凡ての所有を献げたのです。それ故貴君が若し同じ意味でレプタを献げらるゝといふなら、貴君は其の巨萬の富を残らず、神の御用の爲に献げらるべき筈であります』といふて、之に警告を加へたさうである。『金錢を以て盡すことを要しないほどの宗教は、之を信ずる甲斐のない宗教である。』それ故身を献げ、心を献げて神に仕へるといふ私共は、亦其の所有を神の有として献げ、世の救の爲に盡す所がなくてはならぬ。(四一―四四)

(二四) 産の苦難

【マルコ傳福音書第一三章一―三】

一 イエス宮を出て給ふとき、弟子の一人いふ『師よ、見給へ、これらの石、これらの建造物、いかに盛ならずや』ニイエス言ひ給ふ『なんぢ此等の大なる

建造物を見るか、一つの石も崩されずしては石の上に残らじ』  
三 オリーブ山にて宮の方に對ひて坐し給へるに、ペテ

ロ、ヤコブ、ヨハネ、アンデレ、彼に問ふ、曰『われらに告げ給へ、これらの事は何時あるか、又すべて此等の事の成し遂げられんとする時は、如何なる兆あるか』  
五 イエス語り出で給ふ『なんぢら人に惑されぬやうに心せよ。多くの者が名を冒し來り、われは夫なり』  
七 言ひて多くの人を惑さん。七 戦争と戦争の噂とを聞くとき懼るな、斯る事はあるべきなり、然れど未だ終にはあらず。八 即ち『民は民に、國は國に逆ひて起たん』また處々に地震あり、飢饉あらん、これらは産の苦難の始なり。』  
九 『汝等みづから心せよ、人々なんぢらを衆議所

に付さん。なんぢら會堂に曳かれて打たれ、目わが故によりて、司たち及び王たちの前に立てられん、これは證をなさん爲なり。十 斯て福音は先もろろの國人に宣傳へらるべし。十一 人々なんぢらを曳きて付さんとき、何を言はんぞ豫じめ思ひ煩ふな、唯そのとき授けらるることを言へ、これ言ふ者は汝等にあなず聖靈なり。十二 兄弟は兄弟を、父は子を死をにわたし、子らは親たちに逆ひ立ちて死なしめん。十三 又なんぢら我が名の故に凡ての人に憎まれん、然れど終まで耐へ忍ぶ者は救はるべし。』

◎エルサレムの宮は、其の初ソロモン王が之を建立したのであるが、それはバビロン王ネブカデネザルの爲に破壊せられた。次にエズラ、ネヘミヤ等が之を再建したので、今度は耶蘇御降誕の頃、ヘロデ王がユダヤ人民の歡心を買はん爲に、多くの年月を費し、巨額の金錢を投じて之を建直し、規模も前とは餘程擴張せられた。其の或場所

には長七十尺、幅十二尺、厚八尺の大なる石を用ゐてあつたといへば。耶蘇の弟子が『師よ、見給へ、此等の石、此等の建造物、如何に盛ならずや』といふたのも、尤の事と思はれる。耶蘇はそれに答へ給ふた。『汝此等の大なる建造物を見るか、一つの石も崩されずしては、石の上に残らず』と。これは形骸のみ幾ら立派でも、生命の脱けた宗教は、早晩かならず崩壊するの目あるべきことを、豫め告げ示されたものである。(一、二)

◎數刻の後、耶蘇がオリブ山上、宮の方角に對して坐して居給ふ所へ、ペテロ、ヤコブ、ヨハネ、アンデレの四人の弟子が來て、竊に彼に尋ねた。『先程仰せになつたエルサレムの宮の没落は、何時頃起ることか。又其の前兆は如何なるものでありませうか』と。耶蘇の御答に『汝等人に惑されぬやうに心せよ。多くの者、我が名を冒し來り、我は基督なりといふて多くの人を惑すであらう。其のうちに民は民に、國は國に逆ひて、戦争が起り、又地震あり、饑饉あり、それらが産の苦難の始にて、終にエルサレムの滅亡を見るであらう。』とのことであつた。しかも歴史の傳ふる所によれば、

此の時耶蘇が宣ふた通のことが、悉くユダヤの國に起り、終に四十年を経て、エルサレムはロマ兵の爲に荒され、没落を遂ぐるに至つたのである。而してこれは、専らユダヤ人民の積惡重罪の報であつたとすれば、罪惡ほど世を禍し、國を毒するものはないことを、知らねばならぬ。(三一八)

◎耶蘇は又基督者の上に、迫害の襲來すべきことを豫言し、『汝等自ら心せよ、人々汝等を衆議所に付さん。汝等會堂に曳れて打たれ、且我が故によりて、司たち、及び王達の前に立てられん。これは證をなさん爲なり』と仰せられた。パアンスの説に、『凡て此等の御言は、程なく顯著なる應驗を事實の上に見た。即ちペテロとヨハネとは刑務所に投せられ、(使四。三)パウロとシラスとは幽囚の身となり、(使一六。二三)殊にパウロは後、ガリオ(使一八。二三)ペリクス(使二四。二四)アグリッパ(使五。二三)等の前に立ちて、大膽に主を證するの機會を得たる如き、何れも耶蘇の豫言に符へるものである』といふてある。此の如く古の基督者は皆其の身を以て、耶蘇の活ける證人となりたるものである。(九、一〇)



◎『人々汝等を曳きて付さん時、何を言はんと預め思ひ煩ふな。唯其の時授けらる、ことを言へ。これ言ふ者は汝等にあらざ、聖靈なり。』神の御靈は私共の裏に働いて、まさかの時に言ふべき言を授け給ふ。後日人々が起ちてステバノと論じたる時、彼等は、『その語る所の智慧と、御靈とに敵する能はざりし。』使六。一〇とある如きは、其の一例に過ぎない。私共は聖靈にみちびかれて、神の眞理を語るものとならねばならぬ。(一一)

◎初代の基督者は又、『兄弟は兄弟を、父は子を死に付し、子等は親達に逆ひて死なしむる』といふ如き、非道の待遇を受けたものである。即ちドミチヤヌス帝は、其の姪が基督者になつたからといふて之を殺し、マキシミヌス帝は同じ理由を以て、其の姉妹を殺し、デオクレチャヌス帝は其の妻と、他の縁者とを殺し、聖バルバラは其の父から殺害せられた。私共は斯く、信仰の主義と人情との間に板狹になつて、苦心した古人に鑑むる所ありたきものである。(一二)

◎こゝに又『汝等我が名の故に凡ての人に憎まれん、されど終まで耐へ忍ぶ者は救はるべし』との、御言がある。信仰生活に忍耐の必要なことに就いては『汝等神の御意を行ひて、約束のものを受けん爲に、必要なるは忍耐なり。』(ヘブ一〇。三六)『忍耐をして全き活動をなさしめよ、是汝等が全く且備りて欠くる所なからん爲なり。』(ヤコ一。四)又『汝死に至る迄忠實なれ、さらば我汝に生命の冠を與へん。』(黙二。一〇)など、聖書の他の部分にも教へてあり。古人の言には又『忍耐は徳の冠である。』(ラウエル)『能く忍ぶ者は勝つ。』(ホルシアス)『忍耐と時間とは、萬物を征服する。』(コルネイル)などいふてある。私共も亦堪忍んで、最後迄神に忠義を盡さねばならぬ。歌に『雨露にうたればこそ道芝の、錦をかざる時はありけれ。』(一三)

(一三五) 目を覺しをれ

【マルコ傳福音書第一三章一四一三七】

十ヨ『荒す惡むへき者』の立つべからざる所に立つを

見ば(讀むもの悟れ)その時エダヤにをる者どもは、

山に通れよ。十五 屋の上を走る者は、内に下るな。また家の物を取り出さんとて内に入るな。十六 畑に

をる者は上衣を取らんとて歸るな。十七 其の日に

孕りたる女と、乳を哺する女とは禍害なるかな。十八 この事の、冬おこらぬやうに祈れ、十九 その日

は患難の日なればなり。神の萬物を造り給ひし開闢より今に至るまで、斯る患難はなく、また後にもなからん。二十 主その目を少くし給はずば、救はるる者、一人だになからん、然れど其の選ひ給ひし選民の爲に、その目を少くし給へり。二一 其の時なんぢらに「視よ、キリスト此處にあり」視よ、彼處にあり」と言ふ者ありとも信ずな。二二 偽キリスト・偽豫言者ら起りて、徴と不思議とを行ひ、爲し得べくば、選民をも惑さんとするなり。二三 汝らは心せよ、豫じめの之を皆なんぢらに告げおくなり。二四 其の時その患難のち、日は暗く、月は光を發たず。二六 星は空より限ち、天にある萬象、震

ひ動かん。二六 其のとき人々、人の子の大なる能力と榮光をもて、雲に乗り來るを見ん。二七 その時かれは使者たちを遣して、地の極より天の極まで、四方より、其の選民をあつめん。二八 「無花果の樹よりの譬を學べ、その枝すてに柔くなりて葉芽めば、夏の近きを知る。二九 斯のごとく此等のことの起るを見ば、人の子すてに近づきて門邊にいたるを知れ。三十 誠に汝らに告ぐ、これらの事ごとく成るまで、今の代は過ぎ逝くことなし。三一 天地は過ぎゆかん、然れど我が言は過ぎ逝くことなし。三二 その日その時を知る者なし。天にある使者たちも知らず、子も知らず、ただ父のみ知り給ふ。三三 心して目を覺しをれ、汝等その時の何時なるかを知らぬ故なり。三四 例へば家を出づる時その僕どもに權を委ねて、各自の務を定め、更に門守に、目を覺しをれと、命じ置きて遠く旅立したる人のごとし。三五 この故に目を覺しをれ、家の主

人の歸るは、夕か、夜半か、鶏鳴くころか、夜明か、いづれの時なるかを知らねばなり。三六 恐らく

◎耶蘇は四十年後に起り來るべき、エルサレムの滅亡に就いて豫言し、「荒す惡むべき者」の立つべからざる所に立つを見ば、其の時ユダヤに居る者どもは山に通れよ云」と仰せられた。所謂「荒す惡むべき者」とは、ロマ兵の事である。其のロマ兵が後にエルサレムを包圍した時には、市民は飢ゑて街頭の塵を喰ふほどの窮境に陥り、親子夫婦、一片の食物を爭奪し、中には幼兒を殺し、煮て之を食ふた者さへある。捕虜とせられし者九萬七千、死者百十萬を數へ、葬る者なき死骸は途に横はつて、到る處惡臭鼻をついた。『彼等の災厄が極度に達した如く、其の惡虐も亦極度に達して居つた』とは、當時の歴史家ヨセホスの傳ふる所にて、『神の萬物を造り給ひし開闢より今に到るまで、斯る患難はなく、又後にもなからん』と、耶蘇が宣ふたのは、眞實の事であつた。それにも拘らず、兼々彼の御言を記憶して居つた少數の基督者は、其の際早く身の處置をしたお蔭にて、さいはひに大難を免れた者も、少くなかつたといふこ

は俄に歸りて、汝らの眠れるを見ん。三七 わが汝らに告ぐるは、凡ての人に告ぐるなり。目を覺しをれ」

一三七

とである。(一四一三)

◎彼は又末の代に、彼が再び世に臨み給ふ時の状況を豫言し、『其の時、其の患難の後日は暗く、月は光を發たず、星は空より墮ち、天に在る萬象震ひ動かん。其の時人々の子の大なる能力と榮光とを以て、雲に乗り來るを見ん。其の時彼は使者たちを遣して、地の極より天の極まで、四方より其の選民を集めん』と仰せられた。神は大洪水の昔、ノアと其の家族とを憶えて之を救ひ給ふた如く。又ソドム、ゴモラの亡ぼされた日に、ロトとその娘とを憫んで之を助け給ふた如く。主の再臨の時にも亦、其の選民を記憶して、『地の極より天の極まで、四方より』一人も漏れなく、彼等と呼び集め給ふのである。忝けないことではないか。(二四一三六)

◎『歴史は攝理の啓示である』と、コースツは言ふた。神は其の時代時代の出來事を通して、御旨を人に啓示し給ふものである。それ故耶蘇は仰せられた、『無花果の樹より譬を學べ、その枝すでに柔かくなりて葉芽めば、夏の近きを知る。斯の如く此等のことの起るを見ば、人の子すでに近づきて門邊に至るを知れ』と。然る後彼は又宣ふ

た、『天地は過ぎゆかん、されど我が言は過ぎ逝くとなし』と。此の變轉極まりなき世の中に、少くとも一つ、動くことのない神の御言を有するのは、如何にも心強いことではないか。『人は皆草なり、其の榮華は凡て野の花の如し。草は枯れ、花は凋む、されど我等の神の言は永遠に立たん。』(イザ四〇・六、七)とイザヤが言ふたのも、之と同じ意味を教へたものである。(二八一三一)

◎耶蘇の再臨は何時あることか。それに就いては、『天にある使者たちも知らず、子も知らず、唯父のみ知り給ふ』といふてある。それ故私共に大切なるは、『其の來らざるを待むなく、我が待つあるを待む』やうに、平生から心がくることである。即ち耶蘇が何時來り給ふとも、少しも狼狽することなき様、兼々其の御旨に適ふ世渡をして居ることが、大事である。豫言者アモスが、『イスラエルよ、汝の神に會ふ準備せよ。』(アモ四・一三)といふたのは、今日の私共にも、甚だ適切なる警告であるといはねばならぬ。(三三三)

◎こゝに僅々數行の間に、四度迄も『目を覺し居れ』といふ語があるのは、注意すべ

きことである。或時悪魔の評定の席にて、其の中の一人が『私は猛獸を放つて、荒野を旅行する基督者の一隊を嚙殺し、骨を砂上に晒させました』と報告すると。其の頭領ベルゼブルが、『けれども、其の靈魂が天國に入つたのでは、何の役にも立たない』といふた。次の悪魔が『私は暴風を起して、基督者の一隊をのせた大船を覆へし、彼等を魚腹に葬らせました』と報告すると。ベルゼブルが、『彼等も亦、残らず天國に入つてしまふたらう』といふて、甚だ不機嫌である。そこへ第三の悪魔が『私は彼これ十年もかゝつて、近頃漸く一基督者に活動を止めさせ、其の靈魂を眠らせてやりました』といふのを聞いて、ベルゼブルは横手をうち、『出来た。それでこそ、我が黨の、眞正の勝利であれ』とて、大に之を賞讃したといふ寓言がある。それ故私共は何時目も目を覺し居らねばならぬ。どんなことがあつても、靈魂上の惰眠を貪る者の群に墮る如きことがあつてはならぬ。(三三一—三七)

◎神は私共『各自の務を定め』銘々其の責任を完うせんことを期待し給ふ。それ故私共は心の目を覺すのみならず、進んで銘々の神から授けられた務を、忠實に行は

んことを心がけねばならぬ。或燈臺守に、『夜分眠くなつた時は、どうするか』と尋ねると、『其の時は眠氣さましに、ランプの掃除をする』と答へたさうである。其の如く私共も亦、心の目をさますことによつて、毎日の務を遺憾なく行ひ、毎日の務を遺憾なく行ふことによりて、斷えず心の目をさまして居たいものである。(三四)

(二六) 最後の晩餐

【マルコ傳福音書第四章一一—一五】

一 さて過越と除酵との祭の二日前となりぬ。祭司長・學者ら詭計をもてイエスを捕へ、かつ殺さんと企てて言ふ、二『祭の間は爲すべからず、恐らくは民の亂あるべし』

三 イエス、ベタニヤに在して、癩病人シモンの家にて食事の席につき居給ふとき、或女、價高き混なきナルドの香油の入りたる石膏の壺を持

も心のままに助け得べし、然れど我は常に汝らと僧にをらず。八 此の女は、なし得る限をなして、我がからだに香油をそそぎ、豫じめ葬りの備をなせり。九 誠に汝らに告ぐ、全世界、何處にても、福音の宣傳へらるる處には、この女の爲しし事も記念として語らるべし」

十 爰に十二弟子の一人なるイスカリオテのユダ、イエスを賣らんとて祭司長らの許にゆく。十一 彼等これを聞きて喜び、銀子與へんと約したれば、ユダ、如何にしてか機好くイエスを付さん謀る。十三 除酵祭の初の日、即ち過越の羔羊を屠るべき日、弟子たちイエスに言ふ『過越の食をなし給ふために、我らが何處に往きて備ふことを望み給ふか』十三 イエス二人の弟子を遣さんとして言ひたまふ『都に往け、然らば水をいれたる瓶を持つ人、なんぢらに遇ふべし。之に従ひ往き、十四 その入る所の家主に「師いふ、われ弟子らと共に過越の食を

爲すべき座敷は何處なるか」と言へ。十五 然らば調へ備へたる大なる二階座敷を見すべし。其處に我らのために備へよ。』十六 弟子たち出て往きて都に入り、イエスの言ひ給ひし如くなるを見て過越の設備をなせり。

十七 日暮れてイエス十二弟子とともに往き、十八 みな席に就きて食するまき言ひ給ふ『まことに汝らに告ぐ、我と共に食する汝らの中の一人、われを賣らん』十九 弟子たち憂ひて一人一人『われなるか』と言ひ出でしに、二十 イエス言ひたまふ『十二のうち一人にて我と共にパンを鉢に浸す者は夫なり。二一 實に人の子は己に就きて録されたる如く近くなり。然れど人の子を賣る者は禍害なるかな、その人は生れざりし方よりかりしものを』  
二二 彼ら食する時、イエス、パンを取り、祝してさき、弟子たちに與へて言ひたまふ『取れ、これは我が體なり』二三 また酒杯を取り、謝して彼らに與

へ給へば、皆この酒杯より飲めり。二四 また言ひ給ふ『これは契約の我が血、おほくの人の爲に流す所のものなり。二五 誠に彼らに告ぐ、神の國にて新

しきものを飲む日までは、われ葡萄の果より成るものを飲まじ』

◎ 耶蘇は受難週の日曜日に都に入りて以來、引續き火曜日まで忙しく人々を教へ、又は質問に對する應答に時を過し給ふたが。其の水曜日を如何に費されたかは、福音書の記事が聊か明瞭を缺いで居る。多分ベタニヤあたりで、靜に心身を休め給ふたのであらう。けれども彼を敵視する祭司長、學者等は、其の間も默坐として居なかつた。彼等は其の日に打寄つて評議をなし、彼を殺さんことを企てた。但彼等は過越祭を終へて後に、これを實行するつもりであつたが、案外にも其の以前、即ち幾百萬のユダヤ人が各地から都に集まつて居る真中にて、彼を十字架にかける様な始末となつたのは、全く神の攝理によるものであつた。此等の事は、片隅に行はるべきにあらざりし故である。(一一二)

◎ 價高き香料を持來りて、耶蘇の首に注いだ婦人といふは、死より甦へらされしラザロ

の姉妹なるマリヤであつた。(ヨハ二・三)『何故斯る濫費をするか。之を三百デナリ餘(約金百圓)に賣りて、貧民救助に用ゐたなら、其の方が優ではないか』と、咎むる者があると、耶蘇は答へて、『其の爲すに任せよ、何ぞ此の女を惱ますか。我に善き事をなせり。此の女は爲し得る限をなして我が體に香油を注ぎ、豫め葬の備をなせり』と、仰せられた。つまり彼女の感恩の情に溢れた、愛の誠を嘉で給ふたのである。又其の全心全力を打込んだ心盡が、冷い打算以上のものであることを、認め給ふたものらしい。或王子が桃の木に對ひ、『汝は何をなし得るか』と尋ねると。答へて『私は春先に花を開き、やがて美味い實を結びます』といふた。栗の木に同じ事を問ふと、『私は青葉の蔭に小禽を憩はせ、又秋には澤山の實を結びます』といふた。足下の青草に同じ事を問ふと、『私は牛や羊に喰はれて、乳だの、肉だの、供給させます』といふた。小き雛菊に同じ事を問ふと、『私は小禽を憩はすことも、實を結ぶことも、又は牛羊を養ふことも、何一つ出来ませぬ。唯身を細くして、雛菊に出来る精一杯の心盡をし乍ら、覺束ない日を過すばかりであります』といふのを、王子が聞いて。

『不憫の者よ、それが御身の最善の努力であるなら、それは誰にも負けないほごに貴いものではないか』といふて、之をいたはり、慰めてやつたといふ寓言がある。兎にも角にも、銘々各自の立場から、其の愛の誠を籠めたる、最善の努力を試みたいものである。(三一九)

◎ユダは祭司長から僅少の金を貰ひ、耶蘇を付さんことを約束した。彼は耶蘇よりも金錢を重しとしたのである。使徒パウロが『夫れ金を愛するは諸般の悪き事の根なり。或人々之を慕ひて信仰より迷ひ、各様の痛を以て自ら己を刺しとほせり』(テモ前六・一〇)といふたのは、其の儘彼の身の上に當ゆる言であつた。『金は世界最大の奴隷所有者である。』(ソングラス)『金は底なき海の如く、能く名譽をも、良心をも、眞理をも溺らす。』(コメレー)又『金は靈魂を殺し、及ば肉體を殺す。しかも前者の禍は後者より大。』(スコット)など、古人も戒めて居れば、お互に利慾の爲に身を誤らぬやう、注意せねばならぬ。(10・11)

◎除酵祭の初の日、即ち木曜日の夕方、耶蘇が其の弟子と、過越の食事を共にし給ふ

た二階座敷といふのは、使徒行傳の始にある『高樓』(使一・一三)と、同じであつたかも知れない。或は言ふ、これはマルコ傳の著者マルコの家であつたと。(使二・二一)何れにもせよ、斯して其の家を開放し、耶蘇を迎へ入れた主人は、仕合者である。唯それだけでも、どれ程神の國に大なる貢献をしたことか知れない。私共も亦銘々其の家庭に、耶蘇を迎へ入れ奉らねばならぬ。(二二一・一六)

◎日暮れて後、耶蘇は十二弟子と食事を共にしつゝ、『我と共に食する汝等の中の一人我を賣らん』と仰せられると。弟子達は憂ひ、一人一人『我なるか』と尋ねたとある。彼等が『彼の人なるか』此の人なるか』と問はずして『我なるか』と問ふたのは甚だ善い。私共も何卒此んな風に、いつも自らを省み度ものである。同時に之は反逆者ユダに、今一度悔改の機會を與へたものであるに、彼が空しくそれを取逃したのは、残念至極の事である。耶蘇は宣ふた、『實に人の子は己に就きて録されたる如く逝くなり。されど人の子を賣る者は禍なる哉。其の人は生れざりし方、よかりしものを』と。斯してユダは、眞直に滅亡の途に行いたのである。(二七一・二二)

◎耶蘇はパンを取り、祝して裂き、弟子に與へて、『これは我が體なり』といひ。やがて又杯をとり、謝して彼等に與へ、『これは契約の我が血、多くの人の爲に流す所のものなり』と、仰せられた。他の場合に彼が『我は生命のパンなり、我に來る者は飢えず、我を信する者はいつ迄も渴くことなからん。』(ヨハ六・三五)又『夫れ我が肉は眞の食物、我が血は眞の飲物なり。我が肉を食ひ、我が血を飲む者は我に居り、われも亦彼に居る。』(ヨハ六・五五、五六)と宣ふたのも、之と同じ意味にて、眞に有難き御惠の言である。(二二一・二五)

(二七) 御意のまゝに

【マルコ傳福音書第一四章二六一・五二】

二六 かれら讚美をうたひて後、オリブ山に出でゆく。  
二七 イエス弟子たちに言ひ給ふ『なんぢら皆蹟かん、それは「われ牧羊者を打たん、然らば羊、散る

べし』と録されたるなり。二八 然れど我よみがへりて後、なんぢらに先だちてガリラヤに往かん』二九 時にベテロ、イエスに言ふ『假令みな蹟くとも我は

然らじ』三十一 イエス言ひ給ふ『まことに汝に告ぐ、今日この夜、鷄ふたたび鳴く前に、なんぢ三たび我を否むべし』三二 『ペテロ力をこめて言ふ『われ汝とともに死ぬべき事ありとも汝を否まず』弟子たち皆かく言へり。

三三 彼らゲッセマネと名づくる處に到りし時、イエス弟子たちに言ひ給ふ『わが祈る間、ここに坐せよ』三三 斯てペテロ、ヤコブ、ヨハネを伴ひゆき、甚く驚き、かつ悲しみ出でて言ひ給ふ、三四 『わが心いたく憂ひて死ねるばかりなり、汝ら此處に留りて目を覺しをれ』三五 少し進みゆきて、地に平伏し、若しも得べくば此の時の己より過ぎ往かんことを祈りて言ひ給ふ、三六 『アバ父よ、父には能はぬ事なし、此の酒杯を我より取り去り給へ。されど我が意のままを成さんとあらず、御意のままを成し給へ』三七 來りて、その眠れるを見、ペテロに言ひ給ふ『シモンよ、なんぢ眠るか、一時も目を覺しをること能

はぬか。三八 なんぢら誘惑に陥らぬやう目を覺し、かつ祈れ。實に心は熱すれども肉體よわきなり』三九 再びゆき、同じ言にて祈り給ふ。四十 また來りて彼らの眠れるを見たまふ、是の目、いたく疲れたるなり、彼ら何と答ふべきかを知らざりき。四一 三度來りて言ひたまふ『今は眠りて休め、足れり、時きたれり。視よ、人の子は罪人らの手に付さるるなり、四二 起て、われら往くべし。視よ、我を賣る者ちかづけり』

四三 なる語り給ふほどに、十二弟子の一人なるユダ、やがて近づき來る、祭司長・學者・長老らより遣されたる群衆、劍と棒とをもちて之に伴ふ、四四 イエスを賣るもの、豫じめ合圖を示して言ふ『わが接吻する者はそれなり、之を捕へて確と引きゆけ』四五 斯て來りて直ちに御許に往き『ラビ』と言ひて接吻したれば、四六 人々イエスに手をかけて捕ふ。四七 傍らに立へ者のひとり、劍を抜き、大

祭司の僕を撃ちて、耳を切り落せり。四四 イエス人人に對ひて言ひ給ふ『なんぢら強盜にむかふ如く劍と棒とを持ち、我を捕へんと出て來るか。四九 我は日々なんぢらと併に宮にありて教へたりしに、我を執へざりき、然れども是は聖書の言の成就せん爲

なり』五十 其のとき弟子みなイエスを棄てて逃げ去る。五一 ある若者、素肌に亞麻布を纏ひて、イエスに従ひたりしに、人々これを捕へければ、五二 亞麻布を棄て裸にて逃げ去れり。

◎『讚美は直き者に適當しきなり』(詩三三。一)とあり。耶蘇と其の弟子とが、斯る暗澹たる境遇に身を置きながらも、尙讚美を歌ふて後、打連れてオリブ山に出で往かれたといふのは奥床しいではないか。マルチン、ルーテルは宗教改革の運動が、困難を極むる最中、しばしば同志メランヒトンに對ひ、『扱フィリップよ、一緒に詩篇第四十六篇を歌はうではないか。假令反對者は、如何に狂暴を逞しうするにもせよ』といふて居つた。私共も亦、神の御名を讚美しつゝ、如何なる險艱をも冒し得る様でなくてはならぬ。(二六)

◎血氣の勇は恃むに足りない。私共は唯上よりの御力によりてのみ、堅く立つこと



を得べきものである。ペテロは己を恃んで、『假令皆蹟くとも我は然らじ。』『我汝と共に死ぬべきことありとも、汝を否まじ。』などいふたが、問もなく三度までも主を否んだ。英國の女皇メリーの時代に、新教徒に對する劇しき迫害が起つた。其の頃ベンドルトンなる者が友人サウダルスに對ひ、『君は何をそんなに懼れるのか。僕は體も君より大きく、且肥つて居るから、焚かるゝにも、斬らるゝにも、それだけ苦痛が多い譯だが、しかし僕の覺悟は定つて居る。僕は全身灰となる迄、又は最後の血の一滴の瀝がるゝ迄、斷じて所信を變へないのだ』と廣言したが。さていよいよの場合になると、前に大なることを言ふたベンドルトンは、變節して羅馬教に改宗し。色着ざめて慄えて居つたサウダルスは、反つて美事に殉教者の死を遂げたといふことがある。使徒パウロが『我弱き時に強し』(コリ後二・一〇)といふたのも、思ひ合さるゝではないか。(二七一三)

◎耶蘇はオリブ山下の、ゲツセマネといふ園に入つて、神に祈り給ふた。『アバ父よ、父には能はぬ事なし。此の杯を我より取り去り給へ。されど我が意の儘を成さんとあらず、御意の儘に成し給へ』と。嗚呼これは彼が世界萬民の罪を、己が一身に擔ふての、大なる祈禱ではないか。『彼の靈魂には、其の肉體に於ける以上の、十字架を経験し給ふた』と、フアリンドンが言ふたのは、眞實の事である。昔聖ゲルトルト女は、主の祈を唱へる毎に、『御意の天の如く、地にも行はれん事を』といふ一節を、特に幾回となく繰返して居つたが、或日耶蘇が幻の中に彼女に現れ、右の手には健康、左の手には病苦を携へて、其の何れを擇び取るかをお尋になると。彼女は直に答へて、『主よ、我が意の儘を成さんとあらず、御意の儘に成し給へ』といひ。健康も、病苦も、主の御意のまにまに任せ奉つたといふことがある。リチャード、バックスターは又平生、『何でも御意の儘に、何處でも御意の儘に、何時でも御意の儘に』といふ格言を以て、其の金戒として居つたとやら。私共もどうか一切を、唯御意のまに任する、人物となりたきものである。(三三二—三三六)

◎弟子達が疲勞困憊の餘、坐睡する側に來て、耶蘇は告げ給ふた。『汝等誘惑に陥らぬやう、目を覺し且祈れ』と。其の如く今日の私共も亦目を覺し、且祈ることによ

りて、凡ての誘惑に打勝たねばならぬ。昔の人も、「誘惑に遭ふた場合に、私共が爲し得べき最上の事は、祈禱である。『スターク』『安全なる時にも、警戒を怠らぬ者には、絶えて危険の恐がない。』(サイラス)又『目を覺した人は、常に周囲を見まはしてその危険を戒め、祈禱する人は、断えず上を見上げて神よりの助と力とを受ける。』(ヒヤソン)などいふて居るのである。(三七―四二)

◎ユダが劍と棒とを持ちたる群衆を案内して、耶蘇を捕へに來たのは、金曜日の多分午前一時前後にて、折柄十五夜の明い月は、中天に懸つて居つたらうとの事である。太田道灌の歌に『なほからぬ心を隠すわが影に、いとほで照す月ぞ耻かし』とあり。ユダが若しちよつとでも、そのさえわたる明月の前に、内に省みる處があつたならば、彼は其の場に消えてしまひたい心地がしたであらう。しかし乍ら彼は反つて厚顔にも、來つて耶蘇に接吻し、それを合圖に彼を敵の手に付したのである。ダンテが地獄の狀を描いて、ユダを地獄でも、一番のどん底に墮ちて居るものゝ如く記したのは、尤の事と言はねばならぬ。(四三―四九)

◎弟子達は皆耶蘇を棄てて逃げ去つた。「我牧羊者を打たん、さらば羊散るべし」とは、此の狀態である。こゝに一人の青年があり、今し寢床から飛起きて來たのであらう、素肌に亞麻布を纏ふて耶蘇に従ふて居つたが、人々が之を捕へると、其の亞麻布を脱ぎ棄て、裸にて逃げ去つた。或は此の若者こそ、後にマルコ傳の著者マルコ其の人であつたといふ説があり。若しそれが本當だとすれば、私共はこゝに復一つ、神が如何に未熟不完全な器をさへ擧げ用ゐ、之を潔めて、其の御軍に有用の戦士とならせ給ふかといふ、實例を示されたわけにて、眞にたふとき事である。(五〇―五二)

(二八) 夜半の鶏鳴

【マルコ傳福音書第一四章五三―七一】

五三 人々イエスを大祭司の許に曳き往きたれば、祭司長、長老、學者ら皆あつまる。五四 ペテロ遠く離れてイエスに従ひ、大祭司の中庭まで入り、下役

どもと共に坐して火に煖まりたり。五五 さて祭司長ら及び全議會、イエスを死に定めんとて、證據を求むれども得ず。五六 夫はイエスに對して偽證

する者、多くあれども其の證據あはざりしなり。  
 五七 遂に或者ども起ちて偽證して言ふ、五八一われ  
 ら此の人のわれは手にて造りたる此の宮を毀ち、  
 手にて造らぬ他の宮を三日にて建つべし」と云へ  
 るを聞けり。五九 然れど尙この證據あはざりき。  
 六十 爰に大祭司、中に立ちイエスに問ひて言ふ「な  
 んぢ何をも答へぬか、此の人々の立つる證據は如何  
 に」六一 然れどイエス黙して何をも答へ給はず。大  
 祭司ふたたび問ひて言ふ「なんぢは頷むべきもの  
 子キリストなるか」六二 イエス言ひ給ふ「われは夫  
 なり、汝ら人の子の、全能者の右に坐し、天の雲  
 の中にありて来るを見ん」六三 此のとき大祭司おの  
 が衣を裂きて言ふ「なんぞ他に證人を求めん。六四  
 なんぢら此の演言を聞けり、如何に思ふか」かれ  
 ら舉りてイエスを死に當るべきものと定む。六五 而  
 して或者どもはイエスに唾し、又その顔を蔽ひ、拳  
 にて搏ちなど爲始めて言ふ、「豫言せよ」下役どもイ

エスを受け、手掌にてうてり。  
 六六 ペテロ下にて中庭にをりしに、大祭司の婢女の  
 一人きたりて、六七 ペテロの火に煖まりをるを見、  
 これに目を注めて「なんぢも、かのナザレ人イエス  
 と偲に居たり」と言ふ。六八 ペテロ肯はずして「わ  
 れは汝の言ふことを知らず、又その意をも悟らず」と  
 言ひて庭口に出でたり。六九 婢女かれを見て、ま  
 た傍らに立つ者どもに「この人は、かの黨與なり」と  
 言ひ出でしに、七十 ペテロ肯はず。暫くし  
 てまた傍らに立つ者どもペテロに言ふ「なんぢは慥  
 に、かの黨與なり、汝もガリラヤ人なり」七一 此の  
 時ペテロ盟ひ、かつ誓ひて「われは汝らの言ふ其の  
 人を知らず」と言ひ出づ。七二 その折しも、また鶏  
 鳴きぬ。ペテロ「はとり二度なく前に、なんぢ三  
 度われを否まん」とイエスの言ひ給ひし御言を思ひ  
 いだし、思ひ返して泣きたり。

◎人々が耶蘇を捕へ、大祭司カヤバの許に曳きゆく時、ペテロは「遠く離れて耶蘇に  
 従ひ、大祭司の中庭に入つたとある。彼が斯く敵ともつかず味方ともつかぬ、曖昧な  
 態度を以て耶蘇に従ふたのは、一面から見れば、彼が主思の眞情を認むべきことなが  
 ら、他の一面から見れば、其の卑怯未練なる煮え切らないやり口が、如何にも物足り  
 なく感ぜられる。元來「卑怯者は残酷なものである。彼は、勇者が手を伸べて救ふべ  
 き人をも、見殺にする。」(ゲイ)又「卑怯者には好運がない。」(カルマン)乃ちペテロが問  
 もなく三度主を否むが如き大失態を招いたのも、此の態度から觀れば更に不思議はな  
 いのである。それ故私共が、耶蘇に従はんと欲するならば、私共は彼に接近し、  
 一步一步直ちに彼の足跡を踏んで、大膽に進み行かねばならぬ。私共はペテロが「遠  
 く離れて耶蘇に従ふた」如き、卑怯未練な眞似をしてはならない。(五三、五四)  
 ◎祭司長、長老、學者等は、夜半にも拘らず、打寄つて臨時の會議を開催し、如何に  
 もして耶蘇を死に陥さんものと、頻に評議をこらした。そのため多數の偽證人が現れ  
 た中には、彼が曾て其の死と復活とに就いて豫言し、「汝等此の宮(彼の肉體)を毀て、

我三日の間に之を起さん』(ヨハニ。一九)と言ふたのを曲解して。彼は神聖なるエルサレムの宮の破壊を教唆したなど、訴ふる者もあつたが、其の證據が合はなかつた。彼等は斯して、夜深に相集り、互に相談して取敢ず第九戒、『虚妄の證據を立つる勿れ』といふのを破り。進んで第六戒『汝殺す勿れ』といふのを犯すべき計畫に、腐心して居つたのである。彼等は『人を教へて己を教へぬ』(ロマニ。二) 似非宗教家達であつた。(五五—五九)

◎『中傷に應ずべき最上の答は、沈黙である。』  
 耶蘇は誰が何と言ふても、一切對手にならず、唯默然として居給ふたが。それでも大祭司が、『汝は頗むべき者の子基督なるか』と、尋ねた時ばかりは、口を開いて明に、『我は夫なり。汝等人の子の全能者の右に坐し、天の雲の中に在りて來るを見ん』と答へ。彼が誠に、『基督、活ける神の子』(マタイ。一六)であることを、卒直に宣言し給ふたのである。此の如く耶蘇は基督である。即ち古今東西を通じて、唯一人の眞の救主であるといふのは、基督敎信仰の基礎である。凡ての教會も、神の軍隊も、唯此の磐の上に打建てらるべきものであれ

ば、私共も耶蘇の模範に倣ひ、若し必要ならば身命を賭しても、飽迄此の大切なる眞理を擁護して立つべきものである。(六〇—六五)

◎ペテロは何でもない、大祭司の婢女から、『汝も彼のナザレ人耶蘇と偕に居りし』といはれて喫驚し。忽ち『我は汝の言ふことを知らず、又其の意をも悟らず。』など、強辯した。此の如く人は往々、意外に小き誘惑の爲にとんだ不覺をとるものである。西洋人の言に、『悪魔はしばしば四つの言草を以て、人を惑はすものである。即ち第一「これは小い事だから」第二「誰もする事だから」第三「まだ年が若いから」第四「たつた一遍だけだから」といふのが、其れだ』と、説いてある。私共は小な誘惑から引入れられて、とんだ大失態に至らぬやう、不斷の警戒を要する。(六六—六八)

◎結び目のとけた珠数は、珠が一つ脱け出すと、幾らでも脱けるのである。ペテロは一遍耶蘇を否んだ爲に、何遍でも彼を否まねばならぬ破目に陥つた。三度目には終に誓言までして、『我は汝の言ふ其の人を知らず』と、斷言するに至つたとある。これが前に一切を擲つて従ふたペテロ、『汝は基督なり』と告白したペテロ、變貌山にも、ヤ

イロの家にも、ゲツセマネの祈にも、特に耶蘇に侍したるペテロ、『我汝と共に死ぬべきことありとも、汝を否まず』と、斷言したペテロの行動であらうとは、殆んど想像に及ばぬではないか。それを思へば、人間の決心覺悟といふものは、案外當にならぬものである。『幾度か思ひ定めて變るらむ、たのみまじきはわが心なり。』それにつけても私共は、唯『主に在りて、其の大能の勢威に頼りて強く』(エベ六。一〇)なるまでは、満足することが出来ないのである。(六九一七二)

◎ペテロは鶏の鳴聲を聞き、耶蘇が前に、『鶏二度鳴く前に、汝三度我を否むべし』(マル一四。三〇)と仰せられた言を思ひ出で、之を思ひ反して泣いた。クレメントの言ふ所によれば、ペテロは唯此の時のみならず、其の後一生、夜半に鶏鳴を聞いては、いつでも泣いて居つたことである。彼は大變な失態を演じた。しかし乍ら彼はまた衷心より之を悔改めて、其の赦を受けた。それ故ルートルは、『私が若し、ペテロの肖像を畫いたとすれば、私は彼の頭の髪一本一本に、『罪の赦』と書くであらう』と、いふて居る。つまり彼は『多くの罪を赦され』たるが故に、『其の愛することも亦大なり』

(ルカ一〇。四七)しものである。(七二)

### (二九) 耶蘇の十字架

#### 【マルコ傳福音書第一五章一一二六】

一夜明るや直ちに、祭司長、長老、學者ら、即ち全議會ともに相議りて、イエスを縛り曳きゆきて、ピラトに付す。ニピラト、イエスに問ひて言ふ、『なんぢはユダヤ人の王なるか』答へて言ひ給ふ、『なんぢの言ふが如し』ヨ祭司長ら、さまざまに訴ふれば、四ピラトまた問ひて言ふ、『なんにも答へぬか、視よ、如何に多くの事をもて訴ふるか』五されどピラトの怪しむばかりイエス更に何を答へ給はず。六さて祭の時には、ピラト民の願に任せて、囚人ひそりを赦す例なるが、七愛に一揆を起し、人を殺

して繋がれをる者の中に、バラバといふ者あり。八群衆すすみ來りて、例の如くせんことを願ひ出でたれば、九ピラト答へて言ふ、『ユダヤ人の王を赦さんことを願ふか』十これピラト、祭司長らのイエスを付ししは、嫉に因ると知る故なり。十一然れど祭司長ら群衆を唆かし、反つてバラバを赦さんことを願はしむ。十二ピラトまた答へて言ふ、『さらば汝らがユダヤ人の王と稱ふる者を我いかに爲すべきか』十三人々また叫びて言ふ、『十字架につけよ』十四ピラト言ふ、『そも彼は何の悪事を爲したるか』かれ

ら烈しく叫びて『十字架につけよ』と言ふ。十五ピラ  
ト群衆の望を満さんとて、バラバを釋し、イエス  
を鞭ちたるのち、十字架につくる爲にわたせり。

十七兵卒どもイエスを官邸の中庭に連れゆき、全  
體を呼び集めて、十七彼に紫色の衣を着せ、茨の冠  
冠を編みて冠らせ、十八「ユダヤ人の王、安かれ」と  
禮をなし始め、十九また葦にて、其の首をたたき、  
唾し、跪づきて拜せり。二十かく嘲弄してのち、  
紫色の衣を剥ぎ、故の衣を着せ十字架につけんと

て曳き出せり。二時にアレキサンデルとルフとの  
父シモンといふクレネ人、田舎より來りて通りかか  
りに、強ひてイエスの十字架を負はせ、二三イエ  
スをゴルゴタ、釋けば髑髏といふ處に連れ往け  
り。二三斯て没藥を混ぜたる葡萄酒を與へたれど、  
受け給はず。二月彼らイエスを十字架につけ、而し  
て誰が何を取るべきと、圖を引きて其の衣を分つ、  
二五イエスを十字架につけしは、朝の九時頃なりき。  
二六その罪標には「ユダヤ人の王」と書せり。

◎祭司長、長老、學者等は、耶蘇を死刑に定められたれども、彼等にはそれを施行すべき  
權能がない故、夜の明けを待ち兼ねて彼を縛り、曳きゆきてピラトに付した。ピラ  
トはロマから任命せられた總督である。彼の官邸は宮の西北に當るアントニアにあつ  
たが、直ちにそこにて耶蘇の訊問に取りかゝつたものと見える。耶蘇は彼の『汝はユダ  
ヤ人の王なるか』といふ問に對し、『汝の言ふが如し』と答へた以外には、祭司長等  
が何と訴へても、相手にしないで、ちつと沈黙を守り給ふた。カौरライルが『沈黙

は言語にまさる雄辯である』といひ。ドライデンが『患難の際に於ける沈黙は、最も  
善し』といひ。テニソンが『沈黙は美しき聲である』といふたのは、何れも殊に此の  
場合の彼に、よく當筈つた言である。(二一五)

◎『嫉妬は骨の腐なり』(箴一四・三〇)といふてある。ピラトは祭司長等が耶蘇を付した  
のは、其の嫉妬の爲であると知るものから、如何にもして彼を赦さんと試みたが、及  
ばなかつたとある。これはピラトが餘に人の顔を畏れ、思切つて所信を行ふ所の道徳  
的勇氣を缺いだからである。ソクラテスはアテネの爲政者から、往いてレオンといふ  
者の財産を掠奪し來るべきことを命ぜられ、『左様な不正の事は出來ない』といふて、  
之を拒んだ。『君は命令に服従せざる者に、嚴罰を加へらるべきことを知らないか』と言  
はれて、彼は答へた。『例令千百の禍は身に落ちかゝるとも、不正を行ふの禍より  
は優である』と。けれども不幸にして、ピラトには、然らした誠實と勇氣とが缺けて  
居つたのである。(六一〇)

◎ユダヤの風として、過越祭には、いつも一人の囚人を特赦する慣例である故、ピ

ラトはそれを機會に、耶蘇を放免せんものと思ひ。ことさらに、一揆を起し、人殺をしたバラバを出し、『バラバか、耶蘇か、どちらを特赦せんことを望むか』と、群衆に諮ると。彼等は祭司長等に教唆されて、意外にもバラバを特赦せんことを求めた。而して耶蘇に對しては、之を『十字架につけよ』と、烈しく叫んだのである。無定見なる臨機應變家のピラトは、是に至りて爲さん所を知らず、餘議なくも群衆の要求するまゝ、耶蘇を十字架につけることに決定したといふのは、眞に腑甲斐なきことの至である。或は言ふ、バラバは放たれて後、己に代つて死に給ふた耶蘇の犠牲を思ひめぐらし、謙遜つて彼を信じ、其の恩恵に與る者となつたとやら。けれども復考へて見れば、耶蘇はバラバに代つて死にたる如く、亦私共々に代つて死に給ふたのである。『彼は己を與へて凡ての人の贖となり給へり』(テモ前二・五)とあるではないか。(二一—一五)

◎羅馬の兵卒は耶蘇を官邸の中庭に連れゆき、彼に紫色の衣を着せ、又茨の冠を編んでかぶらせ、殴いたり、唾したりして、あらゆる侮辱と嘲弄とを加へた。後世ボヘミヤの殉教者ジョン、フスは、其の迫害者から、紙に惡魔を畫いた冠をかぶらされ、散々侮辱を蒙つた時に言ふた『我が主耶蘇は、我が爲に茨の冠を戴き給ふたに、我も亦彼の爲に、此の輕き冠くらゐ、戴き得ない筈があらうか』と。やがて甘んじて火刑に行はれたのである。(二六—二〇)

◎ピラトの官邸から刑場迄は、約十町餘の距離であつたが、其の國の習として、十字架につけらるゝ罪人は、皆自分で自分の十字架を負ふべき規定であるに、耶蘇は此の時甚く疲勞し給ひ、どうしても其の御足が抄取らぬ故、羅馬兵はもどかしく思ひ。折柄通りかゝつたクレネのシモンといふ田舎漢を捉へ、強て之に耶蘇の十字架を負はしめた。シモンの迷惑は如何ばかりであつたか、想像に難くない。尤も彼はそれが縁にて後耶蘇の十字架の眞意を學び、暫くでも其の貴き十字架を負はせて戴いたことを、身に餘る榮譽として感佩し、感激するに至つたものらしく。即ち後年彼の妻と其の子ルフとが、共に熱心な基督者となつて居て、殊に彼の妻は、母の子に於ける如く、パウロの世話をした(ロー一六・一三)といふ如きは、其の間の消息を語るものである。それ

故意味を知つて見れば、耶蘇の十字架を負ふ位、此の世に大なる特權、又榮譽の事は  
ないのである。(二二)

◎耶蘇をへブル語でゴルゴタ(ラテン語ではカルバリ)即ち『髑髏』といふ所に連れゆきて  
之を十字架につけた。ユダヤの十字架は掌と足とに大な釘をうち、其の儘いつ迄で  
も晒物にして置いて、息が絶えたと見れば、始めてとゞめの鎗を肋に刺すのであるか  
ら、それ迄の苦痛懊惱は、到底言語に盡せない。しかも耶蘇は實に此うした御苦を、  
私共の救の爲に甘んじ給ふたのである。使徒パウロは言ふた、『彼は神の貌にて居給  
ひしが、神と等しくある事を固く保たんとは思はず。反つて己を空うし、僕の貌をと  
りて人の如くなれり。既に人の狀にて現れ、己を卑うして死に至るまで、十字架の死に  
至るまで順ひ給へり。この故に神は彼を高く上げて、之に諸般の名にまさる名を賜ひ  
たり。これ天に在るもの、地に在るもの、地の下にあるもの、悉とく耶蘇の名により  
て膝を屈め、且もろもろの舌の、耶蘇基督は主なりと言ひあらはして、榮光を父なる  
神に歸せん爲なり』と。(ヘリ二。六―一二)勿躰ないことではないか。(二二―二六)

(三〇) 何ぞ我を見棄て給ひし

【マルコ傳福音書第一五章二七―四七】

二七 イエスと共に、二人の強盜を十字架につけ、一  
人をその右に、一人をその左に置く。〔二八〕三九 往來  
の者どもイエスを譏り、首を振りて言ふ『ああ宮を  
毀ちて三日のうちに建つる者よ。三十 十字架より下  
りて己を救へ』三一 祭司長らも亦同じく學者ら  
と共に嘲弄して互に言ふ『人を救ひて、己を救ふこ  
と能はず、三二 イスラエルの王キリスト、いま十字  
架より下りよかし。然らば我ら見て信ぜん』共に十  
字架につけられたる者共もイエスを罵りたり。三三  
晝の十二時に、地のうへ徧く暗くなりて、三時に及  
ぶ。三四 三時にイエス大聲に『エロイ、エロイ、ラ

マ、サバクタニ』と呼り給ふ。之を釋けば、わが神  
わが神、なんぞ我を見棄て給ひし、との意なり 三五  
傍らに立つ者のうち或る人々これを聞きて言ふ『視  
よ、エリヤを呼ぶなり』三六 一人はしり往きて、海  
綿に酸き葡萄酒を含ませて葦につけ、イエスに飲ま  
しめて言ふ『待てエリヤ來りて、彼を下すや否や、  
我ら之を見ん』三七 イエス大聲を出して息絶え給ふ。  
三八 聖所の幕、上より下まで裂けて二つとなりたり。  
三九 イエスに向ひて立てる百卒長、かかる様にて  
息絶え給ひしを見て言ふ『實にこの人は神の子なり  
き』四十 また遙に望み居たる女等あり、その中に



はマダダのマリヤ、小ヤコブとヨセとの母マリヤ及びサロメなども居たり。四一 彼らはイエスのガリラヤに居給ひしとき、従ひ事へし者どもなり。此の他イエスと共にエルサレムに上りし多くの女もありき。

四二 日既に暮れて、準備日、即ち安息日の前の日となりたれば、四三 貴き議員にして、神の國を待ち望める、アリマダヤのヨセフ來りて、憚らず

ラトの許に往き、イエスの屍體を乞ふ。四四 セラトイエスは早や死にしかと訝り、百卒長を呼びてその死にしより時經しや否やを問ひ、四五 既に死にたる事を百卒長より聞き知りて、屍體をヨセフに與ふ。四六 ヨセフ亞麻布を貰ひ、イエスを取下して之に包み、岩に鑿りたる墓に納め、墓の入口に石を轉し置く。四七 マダダのマリヤとヨセの母マリヤとイエスを納めし處を見たり。

◎『十字架は凡ての刑罰の中、最も残酷にして、且不面目なものである。十字架の死に最も厭はしきは、其の故意に苦痛を長からしむることである』と、シセロは言ふて居る。耶蘇は此うした慘刑に服し、しかも二人の強盜の間に挟まれて、殺され給ふたのである『彼は多くの人の罪を負ひ、愆ある者の爲にとりなしをなさん』とて、自ら『愆ある者と共に數へられ』(イザ五三。一二) 給ふたのである。(二七)

◎異種異様の人々が、寄つてたかつて耶蘇を悪口雜言したる中に、祭司長と學者とは

彼に對ひ、『人を救ひて己を救ふこと能はず』といふて、之を罵つた。如何にも其の如く彼は多くの人を救はん爲に、己が身を棄て給ふたものである。『彼は我等の愆の爲に傷けられ、我等の不義の爲に碎かれ、自ら懲罰を受けて我等に平安を與ふ。其のうたれし痕によりて我等は癒されたり。我等は皆羊の如く迷ひて、各自己が道にむかひゆけり。然るにエホバは我等凡ての者の不義を彼の上に置けり』(イザ五三。五、六)と。イザヤの預言は、文字通に彼の上に應驗せられたのである。(二九―三二)

◎晝の十二時から三時頃まで、不思議に天地晦冥となり、咫尺を辨ぜぬほどであつた。三時頃耶蘇は大聲に『エロイ、エロイ、ラマ、サバクタニ』と呼はり給ふた。これは詩篇にある『我が神、我が神、何ぞ我を見棄て給ひし』(詩二三。二) といふ語を、幼い時から使ひ慣れたアラム語にて、唱へ給ふたものに外ならない。思ふに此の時、彼は不心得な子を有つ母が、一切の責任をものれ一人に引受けて、身も世もあられぬ悲嘆をする如く、世界萬民の罪を一身に負ひ、全く神に見棄てられたかと思ふばかりの、苦悶をし給ふたものと見える『まことに彼は我等の病患を負ひ、我等の悲嘆を擔へり。』

然るに我等思へらく、彼はせめられ、神に撃たれ、苦めらるゝなりと。彼は虐待と審判によりて取去られたり、その代の人のうち、誰か彼が活ける者の地より絶れしことを思ひたりしや。『イザ五三。四八』しかし乍ら彼は斯る間にも尙、『我が神、我が神』と呼び給ふた。それに就いてアボットは言ふて居る。『これは絶望の叫聲にあらず。反つて極度の苦悶と、それにも拘らず、神に屈服し、信任することを告げる所の叫聲であつた』と。同時に私共は又、ツイセントの言を記憶すべき必要がある。曰く『彼自ら神に見棄てられんばかりの苦痛を嘗め給ふた故に、私共は此うした嘆聲を放つことを、免れたのである』と。(三三三—三三六)

◎耶蘇が大聲に『事竟りぬ』(ヨハ一九。三〇)と呼はつて、息絶え給ふ時、宮の聖所と至聖所とを隔つる、長六十尺、幅三十尺の巨大なる幕が、上から下まで裂けて二つとなつた。これは耶蘇の死によりて、最早祭司長だの、祭司だのいふ者の仲保を要せず。あらゆる人民が自由に神に咫尺し得るに至つた徴であつた。使徒パウロが、『我等は彼に在りて、彼を信ずる信仰により、臆せず疑はずして、神に近づくことを得るなり』(エ

ペ三。一二)といふたのは、其れではないか。(三七、三八)

◎刑の執行を監督して、最前からの成行を、注意深い眼で視て居つた百卒長は、ここに至りて感動に堪へず。覺えず『實に此の人は神の子なりき』と言ふた。レミジアスが『十字架の血は、異邦人の心を蠟の如く溶かした』といふたのは、其の事である。傳説によれば、此の百卒長は後熱烈なる基督者となり、最も早く殉教者の一人となつたさうである。即ち聖シルが『彼はペテロの如く信仰を告白し、ステバノの如く殉教の死を遂げた』と、いふた通であつた。(三九)

◎ガリラヤから出て來た女達が、終始一貫、耶蘇に従ふて、その十字架の最後をまでも見届けたのは、感ずべきことである。或人の説に、『十字架の周圍に三種の代表的人物があり。それは第一、冷淡無頓着なるロマの兵卒。第二、嫉妬と憎惡とに満ちた祭司長等。第三、同情と信仰とに燃ゆる女達であつた』とのことである。しかもいつの時代にも、耶蘇の十字架を取巻いて、之と似たやうな三種の人物が立つて居るのが常の事だとすれば、私共はどうか其の第三の、同情と信仰とに燃ゆるガリラヤの女達に

興くみしたいものである。(四〇、四一)

◎アリマタヤのヨセフは七十人議会の議員にて、神の國を待望まつぞむ者であつたが。ピラトの許もとに往ゆき、耶蘇イエスの屍しかばねを乞こひうけて、之これを岩いに鑿はりたる墓はかに納たくめ、其の入口いりぐちに石いを轉まし置おいたとある。これはユダヤの風習として、縦たに地ちを堀ほつて柩ひつぎを埋うめるのでなく、横よこに岩いを穿うつて作つくつた穴あなに屍しかばねを納たくめて居をつたからである。其の時ときは金曜日きんようびの午後四時ごよじから、六時ろくじ迄の間あいだであつたと思おもはれる。此このヨセフは腐敗ふふいし切きつた七十人議にんず會かいに於おける、鷄群けいぐんの孤鶴こかくともいふべき、珍めづしき義人ぎじんであつた。(四二―四七)

(三二) 進軍令

【マルコ傳福音書第一章】

一 安息日あんじつ終はりし時とき、マгдаラのマリヤ、ナコアの母はマリヤ及びサロメ往ゆきて、イエスに抹ぬらんとて香料かうりょうを買かひ、二 一週ひとまはりの首はの目め、日ひの出いでたる頃ころいと早はやく墓はかにゆく。三 誰たれか我われらの爲ために墓はかの入口いりぐちより石いしを

轉ますべきと語り合あひしに、目めを擧あぐれば、石いしの既すでに轉ましあるを見る。この石いしは甚おほだ大おほなりき。五 墓はかに入り、右みぎの方に白しろき衣ころもを着おきたる若者わかものの坐まするを見みて甚おほく驚おどろく。六 若者わかものいふ『おどろくな、汝なんぢらは

十字架じゆうじかにつけられ給たまひしナザレのイエスを尋たずねれど

既すでに廻まりて、此處こゝに在あらず。視みよ、納たくめし處ところは此處こゝなり。七 然しかれど往ゆきて、弟子でしたちとペテロペテロとに告つげよ一汝なんぢらに先まだちてガリラヤガリラヤに往ゆき給たまふ、彼處かゝこにて説まゆるを得えん、暫かつかんて汝なんぢらに言いひ給たまひしが如ごとし』八 女等をんなら いたく驚おどろきをののき、墓はかより逃にげ出でてしが、懼おそれたれば一言ひとことをも人に語かたらざりき。

九 一週ひとまはりの首はの目めの拂曉あかつき、イエス廻まりて先まづマгдаラのマリヤマгдаラに現あられたまふ、前にイエスが七ななつの悪鬼あくまを逐おひだし給たまひし女をんななり。十 マリヤ往ゆきて、イエスと偕ともにありし人々ひとらの、泣なき悲かなしみ居をるときに之これを告つぐ。十一 彼かれらイエスの活いき給たまへる事ことと、マリヤに見みえ給たまひし事こととを聞きけども信しんぜざりき。

十二 此この後のちその中うちの二人ふたり、田舎ゐなかに往ゆく途みちを歩あむほどに、イエス異ことりたる姿すがたにて現あられ給たまふ。十三 此この二人ふたり人ひとゆきて、他ほかの弟子でしたちに之これを告つげられど、なほ信しん

ぜざりき。十四 其そののち十一弟子じふいちでしの食しよくする時ときに、イエス現あられて、己おのが廻まりたるを見みし者ものどもの言ことばを信しんぜざりしにより、其そのの信しん仰かうなきと、其そのの心こゝろの頑固かたくななるを責せめ給たまふ。十五 斯かくて彼かれらに言いひたまふ『全世界ぜんせかいを遣まりて凡すべての造つくられしものに福音ふくいんを宣のたまへよ。十六 信しんじてバプテスマバプテスマを受うくる者は救すくはるべし、然しかれど信しんぜぬ者は罪つみに定めらるべし。十七 信しんずる者ものには此等これらの徴しるし、ともなはん。即すなはち我が名なによりて悪鬼あくまを逐おひ

いだし、新あらたしき言ことばをかたり、十八 蛇へびを握にぎるとも、毒どくを飲のむとも、害がいを受けず、病やめる者に手てをつけば癒いえん』十九 語り終はてのち、主しゆイエスは天てんに擧あげられ、神かみの右みぎに坐まし給たまふ。二十 弟子でしたち出ででて、福音ふくいんを宣のたまへ、主しゆも亦またともに働はたらき、伴ともふところの徴しるしをもて、御言みことばを確かたうし給たまへり』

◎『一週の首の日』といふのは、日曜日のことである。元來ユダヤ人は土曜日を安息日としたもので、それを基督者が日曜日に守ることゝなつたのは、耶蘇が其の日に甦りたまふたからである。二三人の女達は日曜日の早朝、耶蘇の屍に香料を抹らんとて墓に詣で。それにしても、如何に墓の入口の大な石を動かすべきかと、案じながら近づいて見ると、早や石は傍に轉ばされて居るのを見出した。此の如く神はしばしば、意外の法を以て、私共が兼々苦にして居つた問題を、其の間際に及んで解決し給ふ如き場合がある。すなはちアブラハムが危なく、わが子イサクを殺して犠牲に獻げんとする際、神が傍の樹蔭に一頭の牡羊を用意し置きて、之に代らせ給ふたのを見て、彼は感激の餘、其の地をエホバエレ（『エホバ備へ給はん』の意）と名づけたなどいふ物語も、（創二二・一四）今更のやうに思ひ合さるゝではないか。（二一五）

◎天の使は女達に、耶蘇の甦り給へることを知らせ、かつ『往きて、弟子達とペテロとに告げよ、汝等に先だちてガラリヤに往き給ふ、彼處にて謁ゆるを得ん』といふた。此の弟子達といふは皆數日前、耶蘇を棄て、逃げ去りたる者共にて、中にもペテロは三

度主を否んだ人物ではないか。それをさへ大目に見て、有難い復活の音信を聞かせ給ふたといふのは、どういふ寛大なる御取扱であらうか。ヤコブ書に『我が兄弟よ汝等の中真理より迷ふ者あらんに、誰か之を引回さば其の人は知れ。罪人を其の迷へる道より引回すは、彼の靈魂を死より救ひ、多くの罪を掩ふことを』（ヤコ五・一九、二〇）とあり。私共もまた随分寛大なる心を以て、信仰上の墮落者を引戻すために、盡力せねばならぬ。（六一八）

◎耶蘇は金曜日の夕方墓に葬られ、日曜日の早朝甦り給ふたのであるから、日數から言へば三日目、時間から言へば三十六七時間、墓に在し給ふたわけである。それから後、約十二三回、彼は主として其の弟子達に現れ給ふた。ウエストンの言に、『基督敎は結局、一箇の人格と、一箇の事實との上に立つものにて。其の人格とは耶蘇、其の事實とは彼の復活である』と、いふてある。それさへ前に、『七つの惡鬼を逐ひ出されし』マグダラのマリヤが、先づ復活の耶蘇を拜み、之を弟子達に證言すべき任務を委託せられたといふのは、如何なる光榮のことであらう。基督敎に於ける婦人傳道